

仙台市文化財調査報告書第375集

# 仙台旧城下町に所在する 民俗文化財調査報告書⑦

仙台の七夕飾り・竹細工

2010年3月

仙台市教育委員会

## 仙台の七夕飾り

## 例 言

- 1 本稿は、仙台市を補助事業者とした平成20年度国庫補助事業「仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査」のうち、「仙台の七夕飾り」に係る調査報告書である。
- 2 本調査の実施期間は平成20年6月6日～平成21年3月23日である。
- 3 調査は仙台市教育委員会文化財課（担当：伊藤優）の総括のもと、仙台民俗文化研究会が行った。
- 4 調査および執筆分担は次のとおり（肩書きは当時）
  - ・第1章 仙台七夕の歴史と概要～第2章 第1節 商店街の分布及び七夕飾り製作の現状  
近江恵美子（東北生活文化大学教授）
  - ・第2章 第2節 七夕飾りの製作者 鳴海屋紙商事株式会社  
安藤直子（東北福祉大学講師）
  - ・第2章 第3節～第4節  
近江恵美子
  - ・第3章 第1節 長町の七夕飾り  
野村一史 鈴木祥元 森祐一朗（東北学院大学民俗学研究会）
  - ・第3章 第2節 荒町の七夕飾り  
我妻和樹 五野井昌秀 野村一史 星洋和 森祐一朗（東北学院大学民俗学研究会）
  - ・第3章 第3節 八幡町の七夕飾り  
岡山卓矢 門脇麻人 森文乃（東北学院大学民俗学研究会）
  - ・第3章 第4節 宮町の七夕飾り  
野村一史 佐藤史明 小山史仁（東北学院大学民俗学研究会）
  - ・第3章 第5節 原町の七夕飾り  
我妻和樹 鈴木謙 滝沢美樹 星洋和（東北学院大学民俗学研究会）
  - ・第4章 第1節 民俗誌にみる七夕行事  
近江恵美子
  - ・第4章 第2節 根白石の七夕飾り  
佐々田弥生（仙台市歴史民俗資料館学芸員）
  - ・結び  
近江恵美子
- 5 地図の出典に関しては、「国土地理院数値地図情報をもとに作成した。
- 6 本調査事業の目的と方法、調査体制、調査成果の概要を示すために別途「総括編」を刊行している。
- 7 調査及び報告書作成に関する諸記録、資料等は仙台市教育委員会が保管している。

# 仙台の七夕飾り

## 目 次

第1章 仙台の七夕の歴史と概要	1
第1節 仙台の七夕の発祥と変遷	1
第2節 仙台の七夕飾りの特色	2
第3節 仙台の七夕まつり及び七夕飾りの現況	3
第2章 商店街の七夕飾り	4
第1節 商店街の分布及び七夕飾り製作の現状	4
第2節 七夕飾りの製作者 鳴海屋紙商事株式会社	5
第3節 自家製作の七夕飾り	11
第4節 仕掛物	14
第3章 周辺部の七夕飾り	16
第1節 長町の七夕飾り	16
第2節 荒町の七夕飾り	23
第3節 八幡町の七夕飾り	34
第4節 宮町の七夕飾り	44
第5節 原町の七夕飾り	52
第4章 民俗誌にみる七夕飾り	64
第1節 民俗誌にみる七夕行事	64
第2節 根白石の七夕飾り	65
結び	75



## はじめに

仙台の七夕まつりは東北三大祭の一つであり、竹飾りの規模と華やかさは全国随一と言っても良い。七夕は古来中国から伝承し、宮中・武家の行事を経て広く民間の年中行事として定着した。

仙台では藩政期、藩主が子女の技術上達のため七夕行事を奨励したとされ、城下では女子や家庭のまつりとして家毎に守られていた。一方これまでの民俗調査の成果によれば、仙台には旧暦7月6日には七夕飾りを庭に立て、野菜などを供えるという伝承がある。これは農村や町場を問わずに行われ、折鶴、巾着、短冊、吹流し、紙衣、扇籠、投網の7種類の飾り物を用いたり、子供の無事な成長を祈願するために、子供の浴衣を吊るすことが見られる。七夕飾りには季節の果物野菜などを供え、家族や近所の子供たち同志で精進料理を食することも行われた。この他にも様々な民俗事例が見られるが、旧暦7月6日の七夕が盆を迎える準備としてもとらえられ、盆行事との関連がうかがえる。

七夕まつりは家毎に行われる行事であったが、明治以降には町内単位の華麗で賑やかな行事が繰り広げられるようになる。この様子は当時の新聞記事や「風俗画報」、大正期の絵葉書などで確認することができる。この契機については、肴町の浜祭り行事や旧遊廓の七夕飾りに始まるとも考えられるが、大正期から昭和初期にかけては、仙台市中心部商店街による懸賞付七夕競技や不況を乗り切る一助として、昭和3年(1928)の東北産業博覧会開催記念の七夕まつりなど、年々盛大に催されるようになった。戦後においては商店街振興からさらに全国より集客を目指す観光イベントへ変貌する。そして現在仙台の七夕行事は「仙台七夕まつり」として、市内中央部の商店街を中心とした華やかな七夕飾りと多彩なイベントを含む「市民まつり」として再編されている。

本報告では仙台七夕の変遷をたどり、伝統的な家毎の年中行事から商店街を中心とした市民まつりに再編された経緯と背景を明らかにしたい。さらに仙台の七夕飾りの特色を示し、仙台七夕まつり及び七夕飾りの現況を調査し報告するものである。

内容構成は、第1章では仙台の七夕の歴史と概要について述べ、第2章では仙台市中心部6つの商店街の七夕飾りの現状と七夕飾り製作について調査報告する。第3章では仙台市周辺部において、古くからの商店街を形成している5町の七夕飾りと七夕にまつわる習俗について調査報告する。第4章では民俗誌にみる伝統的な七夕飾りが残されている、泉区根白石地区の七夕飾りについて調査報告する。

## 第1章 仙台の七夕の歴史と概要

### 第1節 仙台の七夕の発祥と変遷

仙台の七夕は、藩政期、子女の技芸上達のために藩主が奨励したとされている。一般に七夕に竹飾りが登場するのは江戸時代元禄の頃からのようで、それまでは乞巧奠にみられる五色の願いの糸を垂らす簡略な形だったが、色紙や短冊を下げ吹流しをつけ、後に様々な飾り物が付けられるようになった。その江戸の様式が仙台にも伝えられて仙台七夕の基となったと考えられ、仙台七夕の竹飾りは、江戸の七夕飾りに幾つかの独自の要素が加えられて発展して来たと言える。

文政3年(1820)の『参詣記』には、7月7日の早朝評定橋から七夕飾りを流す人々の姿が描かれていて、よく見ると五色の紙程度のシンプルな飾りであったことがうかがえる。嘉永年間(1848～53)の『仙台年中行事大意』には「七月七日棚機祭、六日夜より篠竹に式紙、短冊、くさくさの形を切って歌をかき、又はちようちんをともし、七日の朝評定川または支倉川、澁川へ流す」とあり、ちようちんをともし、つまり灯入れあんどんが竹飾りに加えられている様子が記されている。

明治6年(1873)明治政府によって旧暦から新暦へ改暦が行われたが、依然として年中行事を旧暦で行う地域が多く、仙台の七夕もしばらくは旧暦で行われていた。改暦と共に五節供も廃止されたことから、江戸の七夕は次第に忘れられ衰退していった。しかしその中で仙台の七夕は女子や家庭の祭りとして続けられ、家毎に七夕行事として守られ、廃れることなく独自に発展してきた。明治43年(1910)より、宮城県では七夕・盆行事などを新暦の1カ月遅れで行うように定めた。月遅れの8月6日～7日が七夕祭りとなり、以後今日まで続いている。

明治32年(1899)の「仙台開市三百年記念祭」を最後に「仙台祭」が中止され、それに代って「七夕祭り」が盛大になっていった。当時の新聞記事等によれば、肴町・国分町・常盤丁の飾り(仕掛)が盛大で華やかであったようである。また成織学校生徒の雛形を主とした飾りなど、技芸の上達を祈る本来の姿を保った竹飾りもあったようだ。

大正12年(1923)の開東大震災後の不景気転換をねらって、大正15年(1926)8月6日に、商店街は「七夕祭連合大売り出し」を行っている。東一番丁・新伝馬町の「中央大売り出し」、国分町の「誓文払い」、南町通の「よる市」、大町五丁目の七夕競技会「懸賞七夕祭り」などである。この成功を機に従来の仙台の七夕は、商店街の七夕飾りが主流となっていく。

東北産業博覧会開催の昭和3年(1928)、七夕祭りを盛大に行って仙台商人の心意気を示そうと、不景気で年々衰微に傾く七夕の復興を目指した。仙台商工会議所、仙台協賛会(後の仙台観光協会)共催による「第1回全市七夕飾り付けコンクール」が行われた。こうした努力の結果七夕は年毎に盛大となり、観光七夕という側面がクローズアップされ、仙台七夕の名が全国に知られるようになった。

戦争期の中断を経て戦後、七夕が復興されたのは昭和21年(1946)のことである。東一番丁に竹飾り52本が立てられた。翌昭和22年(1947)には昭和天皇行幸を奉祝し、仙台商工会議所が主催して、8月5日から7日までの3日間七夕祭りが行われた。繁華街から天皇一行の宿舎となった伊達別邸まで、5千本の七夕飾りの華やかなトンネルが出来たと報じられている。この年から七夕飾りの審査が再開されている。昭和23年(1948)からは七夕祭りの日程が8月6日～8日までの3日間と定められた。翌年には「仙台七夕祭協賛会」が結成され、七夕祭実行委員会として組織化された。以降ミス七夕コンテスト、書道絵画写真コンクール、七夕音頭、七夕踊りの実施、動く七夕パレードなど多彩な企画が加えられ、七夕飾りと共に一大イベントとして今日へ続いている。

## 第2節 仙台の七夕飾りの特色

### (1) 七夕飾りからくす玉へ

#### 七夕飾り

七夕の竹飾りは元々、短冊、吹流し程度の素朴な笹飾りであったが、江戸末期に趣向を凝らした様々な切紙が吊るされるようになった。仙台の七夕飾りも時を経て独自の飾りに発展した。笹竹に和紙を基本に明治期に確立されたとする「七つ飾り」を伝統としてきた。七つ飾りとは「短冊」「紙衣」「折鶴」「巾着」「投網」「吹流し」「肩籠」の7つである。

(短冊) 七夕飾りの基本とも言えるもので、和歌や願い事を書き字間や書道の上達を願う五色の短冊で、片側の端を細く切り、撚りをかけてこより状にして笹に結ぶ。

(紙衣) 和紙でつくった四つ身の子供衣裳で、裁縫技術の上達を願う意味と、子供の健やかな成長を願う。昔は実際に子供に穿着してから飾り、翌朝厄除けの形代として川に流した。

(折鶴) 家内安全と延命長寿を願う。家族の最年長者の年齢の数だけ折られた。

(巾着) 財布のことを巾着といった。金銭に不自由せぬよう富貴を願う。

(投網) 海の幸の豊漁を願うと共に、海の恵みの感謝のしるしをあらわす。

(吹流し) 五色の糸、願いの糸の変形化したもので、機織り技術の上達を願う。願いの糸にかけた願い事は3年のうちに必ず叶うとされる。

(肩籠) 七夕飾り作りで出た切屑や紙屑を入れて、儉約の精神を教え、物を粗末にすることを戒める。

これら7つの飾りの他にも仙台独特の飾りがある。七夕線香と仕掛物である。

(七夕線香) 曲輪をつくり、それに白か水色の30センチ長さ程の吹流しを付け、その下端に線香を付け夜に火を灯す。盆の迎え火の意味がある。

(仕掛物) 祖霊を迎える準備のもので、遊廓、芸妓屋のあった町で特に見られた。竹ヒゴと和紙で朝顔や西瓜、茄子などの張り子をつくり、中にローソクを入れて灯した。畑作物の豊作祈願の意味もあった。

#### くす玉

七夕飾りを基本とした七夕飾りの形式に、新たにくす玉が登場する。一説によれば戦後味な七夕飾りを豪華に見せる工夫として、森天祐堂の森権五郎がはじめたとされるが、絵葉書で見るとそれ以前の竹飾りにくす玉らしきものが散見され、また大正期の遊廓の七夕飾りに、当時流行した桜紙でつくった「くす玉」があったとの古老の述懐があることなどから、戦後とされるくす玉はもっと以前からあったと考えられるが定かではない。ともあれ戦後くす玉は七夕飾りの主流となり、くす玉の重量に耐える太い竹が用いられ、下に吹流しが下げられた見た目に豪華なくす玉が、仙台の七夕飾りの象徴となっていった。全国で行われている七夕の飾りもまた、仙台の七夕飾りを模したくす玉が主流となっている。

1本の竹に5基のくす玉というのが現在まで続く仙台の七夕飾りの形式となっているが、近年七夕飾りを復興させようという七夕協賛会の提唱によって、コンクールの審査基準の一つに伝統を継承しているかどうか、七つ飾りがあるかどうかが決められているということだ。江戸時代から続いて来た、空に高く直立し飾りが風にびくびく軽やかな七夕が、水平に並列する重量感あふれる飾りにと大きく変容したのは、戦後を境としていることに違いないようだ。

### 第3節 仙台の七夕まつり及び七夕飾りの現況

現在の仙台七夕まつりは「仙台七夕まつり協賛会」が主催する。協賛会は宮城県・仙台市・仙台商工会議所・(社)宮城県観光連盟・(財)仙台観光コンベンション協会・みやぎ仙台商工会・(社)仙台青年会議所・市内各商店会等、協賛会の目的に賛同する機関、団体、企業等をもって構成される。会長には仙台商工会議所会頭があたり、事務局は仙台商工会議所が勤めるという規約になっている。協賛会は総務部、宣伝部、笹飾り・行事部、星の宵まつり部、接遇部、自主警備部に分化し、七夕飾りは笹飾り・行事部の分野となる。

平成19年度の「仙台七夕まつり報告書」を参照し、平成19年の七夕飾りの状況を見てみよう。協賛会では七夕飾り付け及び審査申込のあった商店街に助成を行うことにして、27商店街に助成を行っている。そのうち審査を申し出たのは23商店街である。

審査は第1地区から第4地区まで地区を分け、さらに第1地区と第3地区をA・Bに分けて計6地区で審査を行い、地区毎に入賞を決めている。第1地区は中心部商店街でAは東一番丁通り地区、Bは中央通り地区。第2地区は旧市電環状線内商店街。第3地区は旧市電環状線外商店街でAは東・北地区、Bは南地区。第4地区は商工会地区商店街である。中でもメインなるのは第1地区で、Aは一番町四丁目(商店街振興組合、以下略)・一番町一番街・サンモール一番町の3商店街。Bはおおまち・クリスロード・名掛丁の3商店街である。

市内各地の子供会へも七夕飾り参加を呼びかけ、子供会奨励賞の贈呈を行っている。328子供会、13718人が七夕飾りに参加した。その他「笹飾り・行事部」では、仙台市民と観光客とのふれあい事業や、周辺部七夕バスツアーなども企画推進している。「星の宵まつり部」では、8月6日～8日の3日間、定禅寺通を会場に午後5時から踊りや演奏などのパレードを行っている。出演団体は67団体、出演者数は3日間延べ人数3千名を数える。

七夕飾りの現況は、メインとなる東一番丁及び名掛丁の大規模な七夕飾りと、その他の地区の七夕飾りを基本とした素朴な飾りに二分される。

#### 参考文献

- 「仙台市史」(資料編7)近代現代3、社会生活 仙台市史編さん委員会編 2004
- 「仙台市史」(通史編4)近世2 仙台市史編さん委員会編 2003
- 「宮城歴史」21 民俗 宮城歴史刊行会 1973
- 「参詣記」齊藤報恩会蔵 1820
- 「平成19年度仙台七夕まつり報告書」仙台七夕まつり協賛会 2007
- 「仙台のまつり」仙台商店会青年部連合会 1977
- 「仙台七夕 伝統と未来」国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書3 大崎八幡宮 2008
- 「仙台七夕まつり」近江恵美子(佑イービー「風の時」編集部) 2007

## 第2章 商店街の七夕飾り

### 第1節 商店街の分布及び七夕飾り製作の現状

七夕飾りのメイン地区となるのは前述したように東一番丁と名掛丁の商店街である。その位置を示すと、仙台駅前から西に伸びるアーケードの通りと、その通りが突きあたる南北に伸びた東一番丁通りである。いずれも仙台市中心部を代表する繁華街であり、様々な商店が軒を連ねている。

商店街は「三栄会」の名のもとに組織化され、三つの代表的な連合会がその傘下にある。駅前から順に「仙台駅前商栄会」「中央通り連合会」「東一番町連合会」である。仙台駅前商栄会には仙台駅前商店街振興組合（以下略）が属している。中央通り連合会には駅前方面から西方向に順に名掛丁商店街（振）、クリスロード商店街（振）、おおまち商店街（振）が属している。東一番町連合会には南から順にサンモール一番町商店街（振）、一番町一番街商店街（振）、一番丁四丁目商店街（振）が属している。

これらの商店街には古くから店舗を構える老舗もあれば、新興店舗もあるが、年々古くからの店舗が姿を消し新しい店に入れ替わる傾向にある。

商店街の現状について、おおまち商店街振興組合前理事長である三原本店代表取締役三原喜八郎氏に取材した。三原本店は明治20年創業で喜八郎氏は3代目にあたる。現在は息子が四代目を継いでいる。喜八郎氏によると、まず商店街の構成が変化して来たことをあげた。古くからの店が姿を消し、中央資本の新興店が増えた。これらの店は七夕飾りもつきあい程度の小さなものや、自社の広告を入れたものが多いという。地元の商店の七夕飾りは、商売抜きで広告を自粛している。喜八郎氏によれば「仙台商人に不心得者はいない」という。それでも最近は自前で飾りを製作するところが少なくなり、外注に頼る店が増えたという。三原本店でも鳴海屋に外注しているという。かつては住み込みの従業員が七夕飾りをつくっていたが、今は従業員の雇用形態が変り、また従業員数も減ったため外注せざるをえないという。その分七夕飾りに個性がなくなったと氏は語る。

また商店街の七夕は景気に大きく左右される。オイルショック時は七夕飾りの主役たる紙が値上がりして大変だったらしく、七夕まつり存続が危惧されたという。おおまち商店街では緊急アンケートを実施したところ、本音は7割が七夕に参加したくないとの回答であったという。商売でいえば七夕期間は人出の割に平常より売上げが落ちる。しかし七夕は商売ではなく、年一度の仙台商人の心意気だと初代から聞かされ、そう思っ続けてきたという。昔のように従業員を含め自家で七夕飾りをつくる商店は急激に減少し、ほとんどが業社に外注しているというのが現状であるようだ。

七夕製作業者は現在、紙の専門店から七夕製作業者に転じた「鳴海屋紙商株式会社」をはじめとして「株式会社キクチ」「株式会社なるみ」「宍岐紙店」「ディスプレイさいう」等多数あるようだ。

## 第2節 七夕飾りの製作者 鳴海屋紙商事株式会社

### (1) 専門業者による製作のはじまり

仙台市中心部に位置する6つの商店街では、昭和30年代まで、それぞれの商店が手作りの七夕飾りを製作し、飾り付けることが恒例であったものの、40年代以降、専門の業者に製作を依頼する店が増えた。現在、中心商店街では、一番町四丁目商店街振興組合、一番町一番街商店街振興組合、サンモール一番町商店街振興組合、おおまち商店街振興組合、クリスマスロード商店街振興組合、名掛丁商店街振興組合の6つの地区に分かれて、竹の配布や飾り付けが行われている。

昭和30年代の中心商店街では、店ごとに家族や社員が七夕飾りを製作し、徹夜で飾りの製作に取り組んだ。毎年、飾りのテーマやデザインを隣接する商店にも秘密にし、互いに趣向を凝らした飾りを作ろうと競い合った。出来上がった飾りは七夕当日、一斉に披露し、その年の飾りの出来栄を、互いに評価し合ったという。昭和39年（1964）に、中央通のアーケードが完成し、昭和40年代には多くの店が一戸建てからビルに建て替えられた。そのためビルの所有者と店舗の借主が別となり、古くからその土地に店を構える人に限らず、新たにこの土地に出店する人も増えてきた。仙台市外から商店街に店を構える人も増えたため、商店街では店主へ七夕行事への理解を促し、共にこの行事に取り組むことの意味を改めて伝える必要が生じてきた。やがて、家族や社員が独自に七夕飾りを製作する、従来の行事のあり方を維持することが難しくなり、飾りの製作や飾り付けを業者へ委託する店が現れ始めた。

現在、仙台市内で七夕飾りを製作・販売しているのは、鳴海屋紙商事株式会社、株式会社なるみ、ディスプレイさいとう、株式会社キクチ（旧菊地紙店）等である。このうち、最も多く七夕飾りの注文を受けているのは、一番町3丁目に位置する鳴海屋紙商事株式会社である。鳴海屋が七夕飾りの製作・販売を始めたのは、現在の七夕企画室長である山村蘭子氏が、昭和30年代後半に数軒の商店から飾りの製作を依頼されたことがきっかけである。山村氏は、商店街の女性の手助けを得てたった一人で飾りを作り始めたという。七夕飾りの製作依頼が増え始めたのは、昭和40年代後半のことである。やがて50年代後半から60年代にかけて、中央資本の企業の支店経営が増え、商店街の顔ぶれが急速に変わっていく。七夕飾りの七つ道具やその作り方の他、それを飾り付けるという風習に馴染みのない人が増えたことや、労働基準法の改正により閉店後、従業員に飾りの製作を担当させることが難しくなったことで、商店からの製作依頼が急激に増加した。鳴海屋では現在、商店街の約8割、およそ100店から七夕飾りの製作依頼を受けており、特におおまち商店街周辺からの注文が多い。

七夕飾りの外注が進む一方、専門の業者に製作を委託せず、自社で七夕飾りを製作し続けている店もある。上述した6つの商店街のうち、現在も家族や社員が七夕飾りを製作しているのは、三原本店、お茶の井ヶ田、白松がモナカ本舗、大正園、松葉屋、菅原酒店、梅原鏡店、錦章堂、精幸堂、糸幸、水晶堂、ふく寿司、かき徳、彩華、振興オーディオ、小新堂本店等が挙げられる。飾りを自社で製作する店は、鳴海屋紙商事の他、株式会社キクチ、株式会社なるみなど、近隣の専門店から和紙や曲げ輪など、製作に必要な材料を購入している。一例として、株式会社白松がモナカ本舗では商店街に4店舗を構えており、店ごとに異なる飾りを製作している。七夕飾りの材料は鳴海屋から購入し、正月の初売りが終了した直後から社員が製作に取りかかる。白松がモナカ本舗では、飾りの製作が社員に受け継がれる行事となっており、販売等の業務をこなしながら、社員自身が飾りの製作に積極的に取り組んでいる。

また、一番町四丁目商店街に位置する梅原鏡店では、家族全員で七夕飾りの製作に取り組んでいる。梅原鏡店では和紙を購入し自宅で染めて、吹流しを製作している。花紙、千代紙や飾り製作に必

要な道具は隣接する株式会社キクチから購入している。梅原鏡店は、明治44年（1911）、一番町四丁目商店街（現 ホテルユニバース付近）で創業し、その後、昭和5年（1930）、定禅寺通り沿いの現在地に店を構えた。七夕飾りの製作は、数ヶ月前から店舗の2階にある自宅を中心に行われる。自宅の他に店舗も利用し、通常は商品の鏡を並べている棚に閉店後、染めた紙を貼りつけ、朝までに乾燥させる。

七夕飾りの製作は主に女性の役割とされ、七夕行事は女性の力で継続されてきたと言われている。梅原鏡店では、他所に嫁いだ娘も七夕の時期になると、製作を手伝うため、実家に足を運ぶ。遠方に嫁いだ娘も、仙台の実家から送られてきた折り紙で、2500～2600個の折鶴を製作し、それを郵送して、七夕飾りの製作に協力している。従来の七夕行事は、女性が飾りを作り、男性は竹を切り出し、飾りを設置する役割を担っていたが、梅原鏡店では男性である社長が自ら飾りのデザインを考案し、製作から飾り付けまで、熱心に取り組んでおり、女性たちはそのことへの感謝の気持ちを語っている。また、梅原鏡店では、母親が戦時中、疎開先から持ち帰った紙衣を大切に保管し、母親が亡くなった年にその紙衣を七夕飾りとして飾り、披露した。店や家族の歴史が七夕とともにあり、家族のうち女性を中心としてこの行事が継承されてきたことが窺える。しかし、行事が観光化され、県外から多くの観光客が訪れる中で、飾りを見せる対象は市内の買い物客から県外の観光客へと変化してきた。明治時代から一番町四丁目に店を構え続けるこの店は、大規模化し変化する七夕のあり様を受け止めながら、行事を長く同じ場所で開催してきたことへの責任を感じている。七夕飾りを含むこと、和紙を使用することなど、仙台七夕の本来の様式を守りながら、どの店にも見劣りしない手間のかかった美しい飾りを、家族で作り続けてきたことへの誇りが感じられる。

同じく一番町四丁目に位置する呉服専門店の松葉屋では、社員5、6名が6月に入ると同時に七夕飾りの製作に取りかかる。専門店から吹流し用の紙を購入せず、毎年白い和紙を購入し独自に店で染めて吹流しを製作している。それ以外の材料は鳴海屋から購入する。松葉屋では4つの飾りを製作しているが、このうち薬玉に吹流しを組み合わせた七夕飾りを2つ、吹流しの代わりに薬玉に折り鶴をつないだ飾りを1つ、薬玉に輪つなぎを用いた飾りを1つ製作している。飾りには必ず、紙衣や投網を取り付けている。

また、一番町四丁目商店街に位置する、株式会社キクチでは四国地方で染めた紙を吹流しに使用している。株式会社キクチでは、薬玉の籠を升沢竹細工店から、曲げ輪は鳴海屋から仕入れている。一番町四丁目商店街には戦前から現在地に店を構える店が多く、店舗を1階、自宅を2階としている店も多いため、現在も業者に委託せず、家族で七夕飾りを製作する店が比較的多くみられる。

## (2) 業者による七夕飾り製作の流れ

鳴海屋紙商事では、その年の七夕飾りの取り外しが終わると同時に、翌年の七夕飾りの製作を開始する。例年8月8日、夜9時から商店街の七夕飾りの撤去が始まる。鳴海屋が製作した飾りの多くは回収された後、製作を依頼した店が指定した場所に送られ、再利用される。このことを鳴海屋では「嫁入り」と呼んでいる。また、他所に送られて再利用する予定のない飾りは鳴海屋が回収し、状態の良い和紙だけを取り外して保管する。鳴海屋では保管した和紙を、七夕飾りの製作に使いたいという希望者に譲っている。飾り付けに使用した竹は、商店街ごとに一箇所に集められ、翌朝仙台市がゴミとして回収する。

その年の行事が終わるとすぐに社員が得意先を訪問し、今年の七夕飾りの感想や改善点、翌年の飾りをどのように作りたいか、希望を聞き取り、翌年の製作に反映するよう心がけている。また、商店街に共同で飾る6号サイズの七夕飾りの製作は、祭りの終了後すぐに開始し、他に吹流しや折り紙の

用意など、下準備を済ませておく。

各商店用の飾りの製作は4月頭に始められる。4月に入ると、注文を受けた店に社員がデザイン画を持参し、最終的な打ち合わせをし、その上で本格的な製作に取りかかる。七夕飾りの製作は、利府工場、花園工場、一番町七夕企画室の3箇所で行われる。利府工場では10名の職人が、花園工場では4～5名の職人が薬玉を製作している。各工場の作業は朝8時から夜10時まで続き、七夕開催前日は徹夜で製作し、出来上がった最後の飾りを持参して、早朝4時から飾り付けを開始する。

薬玉は、利府工場・花園工場で製作される。仙台市青葉区本町通の升沢竹細工店から購入した竹籠に「花」をつけて作成する。最も多く注文を受けるのは、15号(直径45センチ)、18号(直径54センチ)サイズの薬玉である。15号の薬玉には花を200個、18号には300個、取り付ける。23号(直径69センチ)からは「小花」を使用する。

薬玉の下には、曲げ輪を横置きにして縦に2段つなぎ、その間を厚紙等でつないだ「筒」が用いられる。筒の胴体部には切り絵や折り紙を貼るが、現在は胴体部に店名やロゴマーク、商品名を入れる店も多い。筒に店名やロゴマークを印字したシートを貼る際、部屋の湿度が高いと緩れて空気を含み、隙間なく貼ることができないため、湿度の低い場所で作業が行われる。吹流しには、友禅和紙と板締染和紙が使われている。鳴海屋では、友禅和紙は京都から、板締染和紙は愛媛で染めたものを取り寄せている。吹流しは、大きなサイズの中に小さなサイズの曲げ輪を入れ、二重または三重に重ねた曲げ輪を、両面テープで貼り付けられる。内側の曲げ輪には「雲龍」と呼ばれる和紙が垂れ下がるように両面テープで貼り付けられる。雲龍の幅は1寸から4寸までである。外側の曲げ輪には、「大札」と呼ばれる幅12センチの和紙を貼り付ける。吹流しとは、和紙のみの状態を呼び、この他に(1)丸花、(2)鶴、(3)輪つなぎ、(4)大札に切り絵や折り紙を貼って細工を施したものが使われることがある。丸花は、赤い丸紙を2枚ホチキスで止めて作り、間にストローを挟み1本の糸でつないだものである。

薬玉や曲げ輪には、「加茂川京花版」「シルクペーパー」で作った花が取り付けられ、裝飾される。アーケード内に設置される薬玉には、ポリウムを出すのに適した加茂川が使用され、屋外に飾り付ける薬玉には、濡れても色落ちせず型崩れしにくいシルクペーパーが用いられる。加茂川は7枚一折りにし、シルクペーパーは5枚一折りにする。折りこんで中央を針金で留めた状態を「折花」と呼び、開いたものを「花」と呼ぶ。鳴海屋の花は開き方に特徴があり、折花を右左交互に開くことで、花に高さを出すようにしている。また、職人は紙を1枚ずつ内側に重ね、「チューリップのように」開くことを意識している。花びらが重なる面積を大きくすることで、飾りつけた後、左右に花が割れることもなく、花の形を保つことができる。加茂川には、白、桃、黄、赤、水、紫、緑、牡丹、ピンク、紺、青、橙、黒の13色があり、シルクペーパーには、白、黄、赤、水、紫、紺、牡丹、緑、茶、オレンジの11色がある。花の色の組み合わせで模様を作ることも多く、白い花が最も多く使われる。利府工場、花園工場で製作された薬玉は、祭りが近づくと一番町七夕企画室の



鳴海屋の七夕飾りづくり



作業場に運ばれ、薬玉、筒、吹流しの3つの部分を連結する。こうして出来上がった七夕飾りは、完成した順に注文先へ配達される。

利府工場、花園工場、一番町七夕企画室には、それぞれにリーダーとなる女性の職人が配置され、彼女らが知り合いの主婦に作業を分配し、自宅で「花開き」の内職をする人もいる。そのため、在宅で作業する女性も含めると全体で約100名の女性が、鳴海屋の七夕飾り製作に携わっていることになる。友人に誘われて飾りの製作に参加し、その後28年間、製作に携わってきた女性もいる。また、同世代の女性との交流を楽しみに製作に参加する主婦もいる。作業場を訪れると、自分が必要とされていることを実感すると語り、製作に携わることで生きがいを得ている女性もいる。職人と呼ばれるこうした女性たちの地道で丹念な作業の積み重ねで、鳴海屋の七夕飾りは完成する。これまで、仙台市周辺の各家庭や商店で女性が中心となり作られてきた七夕飾りは、専門の業者が製作販売するものとなり、商品化が進んだと言われている。しかしながら、現在も商品としての七夕飾りを作り続けている人の多くは主婦である。仙台七夕まつりの規模が拡大し、飾りが商品として販売されるようになった現在も、その担い手は女性であり、女性が手作業で飾りを作るという、仙台七夕のあり様は変わっていないといえる。

七夕企画室長の山村蘭子氏は、昭和30年代後半に、近所の店から七夕飾りを製作するよう頼まれた際、商店街の主婦の手を借りて手探りで飾りの製作・販売を開始したと語る。2年目からは、薬玉の直径や円周を計測し、基本的な受注のスタイルを確立していった。また、現在は立体の図面を片側ずつ描き、依頼主の要望を忠実に再現するため、職人が、平面の図面を見ながらも、要望通りに立体化するための工夫がなされている。また、同じ時期に約100件の注文を同時進行で製作するため、職人の経験に合わせて、花開きの担当、吹流しの担当、薬玉作りの担当を分担するなど、仕事を効率よく進められるスタイルも確立してきた。

鳴海屋紙商事では、飾りを製作し納品するだけでなく、女性の販売員が多い店では、竹切りや滑車の取り付け、当日朝の飾りの取り付けまでを担当している。平成20年（2008）の仙台七夕まつりでは、鳴海屋は6日の朝18軒の飾り付けも行った。飾り付けに使用する竹は、以前は店ごとに切り出しに出掛けていたが、現在は商店街ごとに取り寄せており、各店舗に配布されている。3年目の竹が最も強度が強いといわれており、太く丈夫な竹が好まれる。おおまち、サンモール、ぶらんどーむ、一番町四丁目では4日に「竹配り」が行われ、その日のうちに竹を切り、滑車を済ませ、6日の朝に飾りを設置する。クリスマスロードでは専門の業者に飾り付けを依頼しており、8月4、5日に飾り付けをし、ハピナ名掛町では4日に竹が配布され、専門業者による飾りの取り付けが行われる。七夕飾りへの放火やいたずらを防ぐため、毎晩、吹流しを縛り、通行人が触れることのできない高さまで括って上げる。飾り付けには「一番町方式」と「アーケード方式」がある。アーケードが設置され天井を覆われている商店街では、竹を横置きにし、滑車をつけて飾りを横一列に並べる。これを「アーケード方式」と呼んでいる。また、一番町周辺では、商店街の地



飾りつけ



一番町での竹の設置

面に設置された竹を刺し込むための穴が設けられており、飾りをつけた竹が斜めになるよう配慮して、飾りが設置される。これを「一番町方式」と呼んでいる。

### (3) 七夕飾りの定式化

昭和22年(1947)、昭和天皇の視察にあわせて森天祐堂が箔を2つ組み合わせ、これに飾りをつけたのが、葉玉の始まりと言われている。これをきっかけに仙台七夕の飾りに、葉玉の形式が導入された。昭和30年代には、曲げ輪を2つ縦に組み合わせ、



筒に吹流しを取り付ける様子

円状の胴体部分に紙を貼り、絵を入れて、縦置きにした「堤(太鼓)」が流行した。この頃には、堤(太鼓)の下に、曲げ輪と吹流しを組み合わせる様式が非常に多く見られたという。高度経済成長期の七夕飾りは、現在再現すれば、数百万円の値が付くと言われるほど華やかであり、それぞれの店が飾りの華やかさを競い合ったと言われている。

昭和50年代になると、堤(太鼓)を横置きにした「筒」に吹流しをつける現在の形式が流行した。筒に切り絵を貼ったり、絵を描いたり、店の名前やロゴマークを入れて、飾りを製作する店が増え、現在、鳴海屋が製作する飾りのうち半数がこの「筒」を取り入れている。このように、昭和50年代以降、葉玉の下に、曲げ輪を上下2段に組み合わせ、間に紙を貼り付けた「筒」をつなぎ、筒の下段の曲げ輪に吹流しを取り付ける、現在の「鳴海屋方式」とも言える飾りの様式が定着した。

昭和30年代後半から、鳴海屋紙商事が七夕飾りの製作を開始し、約100名の職人が分業で飾りを製作し、100軒の店から製作依頼を受けている。また、新たに他所から仙台に出店した店には、鳴海屋が仙台七夕の「伝統」を伝え、七夕飾りの製作方法を指導する役割を担っている。こうした中で、間に鳴海屋が生み出した、葉玉、筒、吹流しという現在の七夕飾りが定着し、飾りの様式の画一化が生じた。七夕飾り製作の専門業者である鳴海屋紙商事が生み出した様式が、現在の仙台七夕の典型として定着してきたことが推測される。

### (4) 七夕飾りの製作に対する認識の変化

七夕まつりに取り組む姿勢は、(1) 地元資本の商店、(2) 県外から出店した企業、(3) 海外資本のブランドショップの3種類で異なっており、商工会議所では入会許可を出す際、七夕まつりには飾りを出すことを条件としているものの、飾りの製作による経費の負担を避けたがる企業も増えているという。昔から現在の場所で開催する人と、他所から仙台に移り住み出店する人では、七夕まつりに取り組む姿勢が異なるという。地元資本の店舗の減少に伴い、七夕飾りの製法や素材、さらには飾り方も変化し、仙台七夕の「伝統」を守ることが難しくなってきたとも言われている。これまで仙台七夕では、道の幅に合わせて七夕竹1棒に飾りを5個取り付けるのがしきたりとされてきた。1棒に4個飾りを並べることは縁起が悪いとされ、忌み嫌われてきたものの、近年は経費削減のため1棒に3~4個に、七夕飾りの数を減らす店が増えている。また、七夕飾りを広告として活用する店が増えている。前述したように、葉玉に筒、吹流しという鳴海屋が生み出した定番の組み合わせで、飾りを製作する店が増えたのは、筒の平面に広告が入れやすいためである。鳴海屋でも広告の面積を大きく確保できる筒のデザインの注文が増えているという。

現在の七夕飾りは4つの地区に分かれて、団体審査・個人審査が行われているが、飾りに店名やロ

ゴマークを入れると審査の対象から外されることになっている。そのため、入賞を狙う店は、飾りに店名を入れていない。また、専門のデザイン会社や広告代理店に飾りのデザインを依頼し、そのデザインを鳴海屋に持込み、製作を依頼する店も増えている。店と製作者の間にデザイナーが入り込むことで、店の要望が直接製作者や職人にうまく伝わらないことが増えてきた。店によっては、仙台ではなく東京の会社に、七夕飾りのデザインを依頼する場合もあり、仙台七夕の伝統や特徴を把握していないデザイナーとの意思疎通に職人が苦労する場面も増えている。特に平面の設計図から、実際に立体の飾りとして仕上がった際のニュアンスの違いを理解してもらうことが難しいという。製作とデザインが分業化し、仙台市外の業者が介入することで、仙台七夕の「伝統」を守りながら製作する苦勞が生じている。さらに、七夕まつりの直前にデザインが出来上がり、製作者の手元に届けられる場合もあるため、急ぎで仕上げられるよう、吹流しに和紙ではなくプリンターの印字に対応した合成紙を使用する場合もある。七夕飾りの製作に携わる人たちが多様化する中で、材料や製作方法も変化している。

こうした中、鳴海屋紙商事では、仙台七夕の「伝統」を取り戻そうとする活動を展開し始めている。平成21年（2009）から、吹流しは和紙で製作すること、七つ飾り（短冊、紙衣、折鶴、巾着、投網、くずかご、吹流し）を必ず飾り付けることを各商店へ提案し、合成紙の使用を控えようとする取組みを始める予定である。

#### **(5) 仙台から全国へ：七夕飾りの拡がり**

鳴海屋紙商事では、仙台市内に限らず、北海道から鹿児島まで七夕飾りの製作依頼を受けており、1年に15～20箇所へ七夕飾りを製作し、発送している。特に、鹿児島県薩摩川内市の商店街には製作の指導にも出掛けている。薩摩川内市の中心市街地に位置する太平橋、十文字、堀田では、毎年8月9、10日に七夕まつりが行われ、3つの通りに6日から17日まで七夕飾りが飾られる。鳴海屋紙商事では、平成20年（2008）に現地へ赴き、七夕飾りの製作や飾り付けを指導している。技術や製作方法を伝えた翌年、平成21年（2009）からは、商店街へ材料を発送して販売するようになり、現地の人から自ら製作に取り組んでいる。また、例年大阪梅田のセキスイハウススカイタワービルや、渋谷商店街から七夕飾りの製作を依頼されているという。梅田では新暦の7月に七夕が行われるため、6月に飾りを送り、8月いっぱい七夕飾りが飾られている。渋谷商店街には、製作した七夕飾りを7月20日以降に発送する。このように、鳴海屋が製作した七夕飾りは全国各地に販売・展示されており、鳴海屋による七夕の様式や制作方法も各地に伝授され始めている。

あるいは逆に、他所で行われている七夕の様式が、仙台七夕に取り込まれる場合もある。鳴海屋では、仙台七夕と並んで多くの観光客を集めている「湘南ひらつか七夕まつり」を意識しており、仙台七夕と平塚七夕の違いを明確にしようとしている。平成20年（2008）には、平塚風に行灯を取り入れた飾りを製作依頼した企業もある。このように、平塚の飾りの特徴である行灯を仙台七夕が逆に取り入れようとする動きも見られる。平塚七夕の特徴は、貼り絵や切り絵を施した電飾であり、一方仙台七夕の特徴は和紙を使用することであると語られる。鳴海屋では、仙台と平塚の七夕は異なる特徴を持つからこそ観光客が見に来るのであり、仙台七夕の「伝統」である和紙の使用と、七つ飾りを復活させることで、仙台七夕の特徴を明示していきたいとも考えている。そのため、企業に対し、合成紙の使用を控えて和紙を使用すること、七つ飾りを取り入れることを提案し始めている。

### 第3節 自家製作の七夕飾り

商店街の大半が七夕飾りを外注で七夕製作者に負っている現状の中で、ごくわずかながら自家製作の七夕飾りをつくっている商店がある。その中からクリスロード商店街の「水晶堂」、おおまち商店街の「白松が最中本舗」、一番町四丁目商店街の「菅原酒店」の3店舗取材した。

#### (1) 水晶堂



水晶堂の七夕飾り（平成20年）



吹き流し部分

松澤等専務・美紀御夫妻に取材した。水晶堂は大正15年創業、始めは文化横丁松竹の隣にあったが、戦前に今の場所に移転。現在は3代目社長。昔は社員は家族の扱いで、住み込みの従業員もいたので労働力が豊富にあり、閉店後に店の奥さんのまかないで夕食後、家人も含めて皆で飾りをつくっていたという。今は法律により終業後の七夕づくりは残業扱いとなるため、ほとんどの店は従業員に頼らず外注にならざるをえない。それでも水晶堂では店のスタッフ総出で、就業時間内につくれるように工夫しているという。現在は美紀さんが中心となって店のスタッフ総出でつくっている。

クリスロードは道幅が11mと東一番町の18mに比較して狭い。昭和30年代はまだ通りを車やバスが通っていたため、竹1本を立てて飾っていた。昭和40年代に竹を束ねて上から吊る方式に変わった。これは6つの商店街では一番早かったという。竹は県北の美里町から調達する。現地で太い竹と細い竹を束ねて滑車の取り付けが出来るよう加工して運び込み、各店舗に吊り上げる作業まですべて業者に委託している。飾り付けは8月6日朝8時30分から行う。

くす玉の籠は鳴海屋から購入する。18号（直径54cmのもの）を使用。吹き流し用の曲輪は外側から20号、18号、10号、6号と4重にする。吹き流しは20号輪でひとまわり168cm、ひと幅12cmの吹き流しをひとまわり14本つける。吹き流しの長さは3mにする。

竹飾りのデザインは美紀さんが考える。その年の七夕飾りを参考にしたり、様々なきっかけをヒントに練り上げていく。その上で試作をして決める。作業開始は5月頃から始まり、材料の発注は6月頃行う。約3ヶ月間毎日女性従業員総出でつくる。家に持ち帰ってもつくり、期日ギリギリまでかかって完成させる。くす玉用の花紙は折って開き、ためておいて直前に一気に取りつける。従業員の中には30年来のベテランがいて、くす玉はその従業員、吹き流しは美紀さんが分担している。材料費は20万円位ということだが、外注すると40～50万円、物によっては100万円位のものもあるということだ。

従業員でつくことで社員のコミュニケーションがとれ和が生まれてくるという。美紀さんは出来る限り今の状況を続けていきたいと語る。七夕飾りは8日の21時頃降ろし、その後は、福岡、鹿児島などの商店街に送られ再活用される。ここ数年商工会議所を通じて全国から譲渡の申し出があり、商店街の半数は転用されるという。転用されなかった飾りは9日早朝集積所に集められ、仙台市が回収処分する。

## (2) 白松が最中本舗

以前は仙台市内各店舗で七夕飾りを出していたが、バス通りのため交通の邪魔や信号が見えなくなるなどの苦情が出て、やめた店舗もある。現在は一番町店、中央通店、駅前店の3店舗が竹飾りをつくっている。各店長より取材した。各店舗とも七夕飾りは店長が責任を持つ。仙台の伝統行事なので外注はせず自社で手作りする。店長は1月下旬から2月頃にかけて1週間程構想を練りデザイン画を描く。

ゴールデンウィーク終り頃から製作を始め、各パーツの準備から開始する。作業場所は各店舗とも休憩室等バックヤードで行う。基本は各店舗の従業員で製作にあたるが、他店にパーツの製作を依頼することもある。7月末に製作を終え8月初めに仕上げをする。くす玉は一本の竹に5基、くす玉の大きさは駅前店が18号、他の2店は23号と幅がある。くす玉と紙は鳴海屋から購入する。18号の場合は花がついて直径70cm位、花は1つのくす玉に2,000個から1,500個つくる。5基で計1万個程つくる。花は2月に発注し3店で分担して6月まで折りあげる。花は4寸大の紙を5枚重ねて7山折るとききれいに仕上がる。くす玉に取り付ける作業は店長がする。くす玉に取り付けるのに1基あたり3〜4日かかる。

くす玉の下に下げる吹流しは曲輪を2つ二段にして重ねる。一輪に吹き流しを18枚ぐると貼る。長さは75cmの紙を3枚縦につなぎ、曲輪が2つ重なる分長くなり2m30cm位になる。くす玉には広告は一切入れず、店名も入れたことはない。デザインを重視し観客に楽しんでもらうことが主となる。費用は15〜30万円位。上記3店舗以外も含め、全店舗で店内にミニ七夕を飾っている。ミニ七夕のくす玉は5号か3号、直径15cm前後のものである。

竹の準備は3店3棟で、駅前店は4日早朝仙台駅で竹を引き取り自分達で店頭を立てる。一番町店は5日の9時に配布され自分達でセットする。中央店は業者に竹の設置を依頼する。七夕終了後、飾りは保管しておき、自社関連のイベントに使用するという。アンテナショップに貸し出したこともある。飾りはずした竹は8日夜21時から22時に回収場所に運ぶ。



一番町店の七夕飾り（平成20年）

## (3) 菅原酒店

明治28年創業。4代目を継いだ菅原克枝社長に取材した。社長の記憶では昔、家族や従業員で七夕飾りをつくっていたという。過去2年程鳴海屋に七夕飾りを依頼したが、3年前から自家で作りはじめた。デザインは社長自ら行っている。竹は三越の前にとりに行く。特大の竹を1本そのまま持って来て穴の太さに合わせて立てる。1本の竹にはくす玉を5基つける。吹流しの曲輪はひとまわりで12本の吹流しが下がる。外輪の内側に小さい輪を1個つけて二重にする。吹流しの長さは上から3基までは3m、4つ目は2m80cm、5つ目の一番下は2m60cmにする。

社長をはじめ娘さんを中心に家族で飾りをつくる。七夕祭りが終るとすぐに翌年のデザインを考えはじめるといふ。実際に着手するのは5月か6月、費用は1本で10万円位。終了後8日の21時頃飾りはずし、福岡や新潟などに送るといふが、今年は出さずに自家で保管し来年再利用するつもりだといふ。



菅原酒店の七夕飾り（平成20年）

七夕飾りを出さないのは責任を果たしたことになるし、何より自分の手で七夕飾りをつくらぬのは寂しいと語る。昔は紙を染めたりイモ判に絵の具で刷ったりしたものだという。竹の利用では、秋田県湯沢の人から嵐の材料に利用したいとの申し出があり讀ったこともあった。

一番町四丁目商店街では、「おかみさん会」が自分達でミニ七夕をつくり売り出したり、8月13日に竹を利用してろうそくの灯をともし「仙台竹灯り」の催しを実施しているという。

以上自家製作の3店舗に取材してみて、七夕飾りづくりにかかる情熱と継続への使命感を感じた。まさに商売の損得を抜きにした心意気というもの、仙台商人の魂が確かに伝承されていると思った。もっといいものをつくりたいという向上心と、つくる楽しさを共通して持っておられる。ひと握りではあるが、これらの人々によって仙台の七夕まつりが支えられていることを実感した。

## 第4節 仕掛物

仙台七夕独特の飾りものに仕掛物がある。明治32年(1899)の「風俗画報」196号には「思々の意匠を練りて造りし仕掛物を笹竹に吊し、燈火を點ずれば其美事なる事、實に他国に誇る所なり」とある。竹飾りに下げられた火入れ行灯を仕掛物といったことがわかる。また「風俗画報」では続けて「此夜遊廓、新常盤町にては、嫖客を集むるに種々の工夫を凝らしたる仕掛物数多ありしが(後略)」とある。それによれば竹飾りの仕掛物とは趣を異にするもののように、樓毎に歴史上の人物や史実をはじめ、富士に旭、鶴亀、恵比寿に鯛、朝顔畑等々趣向を凝らしたテーマで、大きな仕掛物をつくっている。中には「五層樓上より下層まで大滝をつくった」との記述があり、建物の外壁一杯に仕掛をほどこすという大がかりなものまであったようだ。

これらの仕掛物が商店街の屋根に舞台を組んでつくられた仕掛物に影響を与えたと思われる。一般に言われる仕掛物は、戦後店舗の屋根に舞台を組んでつくられた、動く人形劇のようなものを指して言うが、文献では竹飾りの火入れ行灯や、遊廓の軒先の仕掛を仕掛物と記述している。

一般に言う戦後の仕掛物も仙台独自の大変ユニークなものである。仕掛物で知られているのは「三原本店」「よろづ園」「永楽園」などで、この3店舗に取材した。

### (1) 三原本店

前述した昭和9年生まれの三原喜八郎氏によれば、戦前については記憶もなく写真も残っていないが、戦後は記憶にあり昭和30年頃からあったと思うとのこと。当時は高山彦九郎など皇室崇拝をテーマにしたものや、牛若丸・義経の一の谷の合戦など歴史物がテーマだったらしい。いずれも人力で人形を動かしていた。仕掛物の人形を作ったのは店出入りの煎餅屋さんの素人で、本人からのつくらせてほしいとの要望でつくってもらっていたという。この人が昭和48年(1973)に亡くなって以後、仕掛物をやめたということだ。三原氏が言うには、竹飾りよりも仕掛物の方がお金がかかったそうだ。



三原本店の仕掛物

### (2) 永楽園

明治10年創業。竹飾りは外注し主力は仕掛物だったという。紅白の幕を張り、屋根の上に舞台をつくった。電気仕掛けで動かしたこともあったそうだが、動きがおもしろくないため手動にかえたという。永楽園は戦前から仕掛物を作っていたとのこと。当時は七夕が終わると倉庫に保管し残っていたが、戦後は老人施設に寄附したりしたという。

戦後仕掛物をつくっていたのは荒町の看板屋さんで、昔話がテーマだった。「浦島太郎」や「サルカニ合戦」などだったようだが、テーマを決めるのが悩みの種だったという。春先に発注して竹細工で芯をつくり、和紙を貼って彩色し服を着せて手で動かす。飾るのは前日の8月5日、舞台は3日前位につくる。人形を動かすのはアルバイト学生7~8人を雇い、4~5人で動かすという。朝9時から夜10時まで1日中動かした。喜ばれるようお客さんサービスを第一に考え続けて来たが、テーマを決めるのに頭が痛かったという。近年は「ダンゴ三兄弟」「名探偵コナン」「ハム太郎」「千と千尋の

神隠し」など流行のテーマもとりあげてきたが、平成18年以後はつくっていないということだ。

### (3) よろづ園

創業文政12年(1829)初代萬屋萬兵衛で「萬屋茶店」が店名だった。現当主は6代目にあたる。よろづ園では武田久吉宮町工場長(大正7年生)が仕掛物の製作を行っていたということで武田氏に取材した。店舗がビルに建て替えられてから仕掛物はやめたということで、七夕飾りも現在はテナントで1Fに入居している企業が出しているという。

昭和27年の最初の仕掛物は4代友助の発案によったという。「宇治茶入荷風景」を再現した。つくったのは友助の知りあいで蒲生の人だったという。友助は博学多識多趣味で、なかなかのアイデアマンだったという。店名を改称して「よろづ園」になったのを機に、記念の景品として15キロ茶箱を「重宝箱」と称して売り出し、300個の箱が完売した。

「宇治茶入荷風景」は稲藁で馬をつくり背中に茶箱を乗せて、静岡からの搬入の風景を実物大の仕掛けでつくり再現したもので、店先に置いたところ評判が良かったので、翌年もつくった。第2作は「初代万兵衛と挽き茶」で、小僧が店内で臼を挽く場面を紙粘土でつくった。この仕掛けをつくった友助の知りあいに、武田さんは作り方を教えてもらったという。以来見よう見真似で一人で作り続けてきた。昭和31年(1956)まで友助がテーマを考えていたが、その後子供達にも喜ばれるようなテーマに転換した。「夏山の喜」「少年ケニヤ」「一寸法師」「鉄腕アトム」などである。昭和33年(1958)の「七夕サーカス」の頃から東北放送のアナウンサーの声を入れ、一曲演出するのに20分かかったという。この仕掛けは人気を呼び、人だかりが出来て交通整理の人が出たほどだという。昭和46年(1971)まで続いた。昭和47年(1972)から50年(1975)までの中断の後、昭和51年(1976)再開、昭和55年(1980)を最後にアーケードが出来てビルに建て替えたこともあって、仕掛物はやめたということだ。

仕掛物作りはまずテーマを決め、4月頃からつくりはじめる。始めは業者に依頼していたが、もったいないので節約で武田さんがつくりはじめ、材料は一切残りのものを利用し終わった後に解体し、翌年また使うということであった。人形を動かすのははじめの頃は家人や従業員であったが、後に学生アルバイトを使い、9時から21時まで交代で動かした。

武田さんの記憶では、仕掛物を出したのはよろづ園より三原本店の方が早かったというし、戦前から東二番丁角のパン屋や、南町にも2軒位仕掛物をつくる店があったと記憶しているということだ。

仕掛物は完璧に精巧に出来た、スムーズな動きよりも、稚拙で不自然な動きをする仕掛の方がおもしろい。見るからに作り物、しかも素人の作ったものだからこそ不思議な魅力を持っている。



よろづ園店内に置かれた仕掛の人形(平成20年)



## 第3章 周辺部の七夕飾り

### 第1節 長町の七夕飾り

#### 1 調査地の概要

##### (1) 長町の成り立ちと歴史

長町は、慶長17年(1612)12月に名取郡根岸村と平岡村にまたがって設けられた奥州街道の宿駅であり、平岡村分の南長町と根岸村分の北長町の南北合わせて長町宿を構成していた。仙台城下の境である広瀬橋を渡ってすぐの宿場



長町の街並み



長町周辺地図

として、また山形へ通じる笹谷街道との分岐点としても重要な地点であった。

当初仙台城下へは、長町を通って宮沢渡しから城下の舟丁、田町と進み、その後宮沢橋が架けられたものの、寛永14年(1637)に宮沢橋が流出。以後長町渡しができ、そこから仙台城下へと入った。そして寛文8、9年(1668、9)頃まで現在の広瀬橋にあたる長町橋が架橋されるまでは、仙台城下へは「徒渡り」(かちわたり)と呼ばれる徒歩で広瀬川を渡河していた。昭和35年(1960)に新しく造られた現在の広瀬橋のたもとは、当時の橋の礎石が残されている。長町では、そんな宿場の様子について「江戸へ行く人は旅装を整えて、江戸から来た人は城下の前で休んでから入る場所だった」という話も聞かれる。

明治7年(1874)根岸村と平岡村が合併して長町村となり、昭和3年(1928)に仙台市と合併して仙台市長町となった。当時の長町は町場と近郊農村を繋ぐ場として米穀商や薪炭店が多く、明治25年(1892)には青果市場が設立され、周辺農村からの産物を町場へ供給していた。戦前ぐらいまでは農家と商家が半々だったという。明治29年(1896)には東北本線長町駅が開設され、大正2年(1913)には秋保石材軌道株式会社の設立によって駅周辺に商店街が形成され発展した。

現在、かつての奥州街道は国道4号線となり、地下鉄東西線開通後は高層マンションが立地するなど街並みが大きく変貌した。街並みの東側はあすと長町構想による土地区画整備事業が行われ町はより変化しようとしている。その一方、家並みの西側は比較的早い段階から住宅地となったため、未だに板倉を残す農家も見受けられ、往時の宿駅と裏筋の農村を垣間見ることができる。

長町1丁目には広瀬橋建設の際の人身御供にまつわる伝説を持つ橋姫明神や、仙台三十三観音第三十二番札所の十八夜観音、長町4丁目には蛸薬師と舞台八幡神社があり、それぞれの商店街や町内会で行事が執り行われている。

##### (2) 社会組織

長町には北側から長町一丁目の商店を中心として構成される長町一丁目商店街、長町三丁目、四丁目の商店で構成されるサンカトール商店街、そしてJR長町駅周辺の長町五丁目、六丁目を中心と

する長町駅前商店街の3つの商店街があり、それぞれ振興組合が組織されている。いずれの商店街も主に国道4号線沿いを中心とし、サンカトゥール商店街のように笹谷街道沿いに商店街を形成しているような部分もあるが、ほぼ一直線に並ぶその三商店街を構成員として長町連合商店街振興組合がある。

上記の三商店街には、長町一丁目から六丁目までの長町地区町内会連合会に加入する単位町内会が含まれている。

## 2 七夕の準備から片付け

長町には前述の通り長町駅前商店街、サンカトゥール商店街、長町一丁目商店街の3つの商店街があり、それぞれの商店街が独自で七夕を製作し飾っている。この三商店街は長町連合商店街として組織されているが、七夕の場合は団体審査の対象としても独立しているためお互いに協力し合うこともなく、竹の入手から片付けまで個別に行われている。

### (1) 飾り作り

#### 飾りの作り手と分担

おおむね長町の七夕飾りは、個人や商店が飾りを製作して飾るというより、商店街組織として手分けをして飾りを製作し立てており、それに子ども会や婦人会なども参加している。

サンカトゥール商店街では、七夕飾りの材料は商店街から配布され、飾り作りの講習も行われる。またくす玉を各商店に1個から2個と割り当て、その他の短冊や七飾りも担当者を決めてまとめて製作するようにしている。そのため個々の飾りの裏側には「サンカトゥール商店街」と角印が押されている。一丁目商店街では振興組合の婦人部を中心として、およそ一年がかりで製作をしている。婦人部では大きい竹飾りの他に街灯などに取り付けるミニ七夕も製作している。その他、商店街や子供会の協力を得ている。

#### 種類と構成

飾りは、短冊・紙衣・折鶴・吹流し・屑籠・投網・巾着があり、各商店会組織の中で作っている。基本は上記の飾りだが、折鶴は単体で飾られることは長町全体では少なく、吹流しの装飾に使われたり、飾り自体飾られない場合が多かった。長町一丁目では吹流しの数は基本2本・サンカトゥールでは3本・駅前では3～5本であった。1つの竹飾りの規模はサンカトゥールと駅前が大々的に吹流しを作り飾っている。一丁目は婦人部や子供会が多く手がけており大きな飾りはあまり見られない。



長町の七夕

### (2) 竹の切り出しと設置

#### 竹の切り出しと運搬

竹の入手場所や方法は各商店街異なり、サンカトゥール商店街は組合員が出かけて切り出し作業まで行う。

長町駅前商店街では、名取の竹林から竹を30本ほど切り出している。以前は組合で切り出しにでかけていたが参加者の高齢化で作業が難しくなり、現在では山の持ち主に切り出しまでを依頼し運搬してもらっている。そのため商店街の関係者が竹に関わるのは長町に到着してからとなり、5日に駅前の広場に運ばれた竹の枝を払ったりして調節しておく。一方、長町一丁目商店街の竹は5日に名取

の高館から切り出したもらった竹を購入している。竹の切り出しは以前、業者に委託したり、組合員がにかけて切り出したたりすることもあったという。山で下枝は予め払っておき、後は竹を立てる人がバランスを見て調整する。

サンカトール商店街では、太白区茂庭から商店街関係者のついで30本から40本ほどを無償で切り出してくる。本来は七夕前日の5日なのだが、平成20年（2009）は参加者の都合が付きやすいということで日曜日に合わせ、3日の早朝5時に集合して切り出しへでかけた。参加者は30人ほどだ。その際の道具類は各自持参でのこぎりや鉋、チェーンソーなどを使用する。斜面に生える竹を切り出し、だいたい長さを調整してトラックへと積まれてサンカトール商店街へ戻ってくる。下枝の調節は竹を立てる時に行うという。今年は、昨年まで竹を保管するために使用していた場所が使えないため、トラックは竹を立てる予定の場所を回って次々と下ろして行き、そのまま飾りつけられるような形にして竹だけをたてる準備にとりかかる。山の中にある竹林からの切り出し作業は重労働で、1年参加すると翌年から来なくなることもあるという。

#### 竹の設置

長町駅前商店街や長町一丁目商店街は飾りつけの前日に竹を搬入して6日の早朝、竹をそれぞれの場所に運んで設置し、飾りつけを行うのに対して、サンカトール商店街は3日に切り出しをしたため、その日のうちに竹を立てる作業を行った。その理由としては前述の通り保管場所の問題があったという。

竹は、先の方の枝を残して下枝を全て払っておき、残した枝の部分に短冊を取り付ける。商工会議所からできるだけ笹を残すよう、指示があったという。そして飾り上げるための滑車を40cmほどの間隔で竹に取り付け、笹谷街道沿いでは街路整備の際に設置された七夕用の穴に挿し込み、裁断した竹などを詰めて固定をする。また補助としてロープでも固定をして電柱などに固定をする。この際、滑車のロープがねじまがったり、電線にかかったりしないように注意しなければならないという。国道4号線沿いでは専用の穴がないため、歩道と車道の柵や街路樹、街灯の支柱などに紐でくりつけて固定される。基本的に長町駅前商店街はサンカトールと同様に滑車を利用するが、長町一丁目商店街では滑車を利用しない。



搬入された竹

### (3) 飾りつけ作業と維持

#### 飾りつけ作業

七夕期間の初日である6日の早朝に各商店街で飾り付けが行われる。サンカトール商店街は予め竹が設置されているが、長町駅前と一丁目は竹の設置からはじまるため、作業開始は早い。いずれの商店街でも関係者や子供会などが出て飾りつけがおこなわれ、くす玉は竹の曲がりに合わせて段差がつくように並べ、高い場所に取り付けられ、巾着や投網などは比較的下の方につけられている。また飾りの順序として紙衣、折鶴、吹流し2本、巾着、扇籠、投網、短冊と指示がある。自動車などと接触するような場所では、予め飾り付けてから長さを調整することがある。



飾りつけられた七夕



イベント会場の七夕飾り

長町一丁目商店街からサンカトゥール商店街、長町駅前商店街までは、サンカトゥール商店街の笹谷街道沿いを除いて国道4号線沿いを広瀬橋からJR長町駅前まで飾り付けられる。たいていは歩道と車道の欄や街路樹、街灯の支柱などに紐でくりつけ固定されるが、街路整備の際に取り付けられた七夕専用の穴がある場所では、そこに竹を挿し入れ、裁断した竹などを詰めて補助ロープで固定する方法がとられる。

長町駅前商店街は、まず竹の下枝を払って短冊と滑車を取り付け、飾りを上げる。場所によっては滑車を取り付けない竹もあり、その際は紐で固定している。長町一丁目商店街では5:00集合で竹の余分な下枝を払い、短冊などを取り付ける。飾りは滑車を用いず、ビニール紐で竹に固定して飾りをつける。サンカトゥール商店街では、個々の飾りを滑車で上げるたり、脚立を使って飾りを取り付けるだけなので、一斉に行うというよりは、飾りを管理している人の判断で行われている。そのため飾りつけは8:30過ぎというところもある。いずれの商店街でもこうした作業と同時平行でミニ七夕なども取り付けられていく。

#### 飾りつけ後の維持管理

サンカトゥール商店街では基本的に期間中は毎日夕方18:00頃に取り込み、翌日の朝にまた上げることしており、そのために滑車で吹流しなどが付けられている。笹谷街道の七夕は自動車と接触しやすく、自動車に引っかかってそのまま持っていかれるケースもあり、飾り付けてから吹流しの長さの調節が行われる。飾りは運が悪いと飾ってすぐに破損することもあり、「審査員が来るまではもたせる」と受賞を意識して飾りに注意を払っている人もいる。一方、一丁目商店街ではビニール紐で固定し、雨が降っても基本的にはそのままにしておくという。

## (4) 撤去と処分

### 飾りの撤去と回収

七夕は、各商店街共に8日の夕方から片付けが開始される。滑車の場合は飾りをまず下ろし、固定されている場合は竹を下ろす。滑車をはじめ短冊以外の飾りを取り外した竹はチェーンソーやのこぎりなどで1mほどに裁断して束ねておく。七飾りやくす玉の花は普通ゴミとして処分するが、一部は来年の参考にするとして保管しておくこともある。くす玉の芯となる竹かごは、商店街でまとめて保管している。束ねた竹やゴミ袋に入れた飾りは、指定の回収場所に積み上げて作業は終了する。サンカトゥール商店街では回収業者に依頼して持って行ってもらうことにしている。

### 竹と飾りの処分

たいてい竹や飾りは裁断して回収してもらうが、サンカトゥール商店街では株式会社権竹工房等に提供し、「七夕のあとの、竹遊び教室」などで利用されている。また、太い竹は長町連合商店街が行う広瀬川燈籠流しと老人ホームの慰問で行うそうめん流しに利用される。以前は山形県や高知県に送ったこともあるという。

### 3 七夕の変遷とイベント

#### (1) 七夕の変遷

##### 戦前から戦後の七夕

長町の戦前の七夕について知る人は、家並みにはほとんど飾られなかったと語る。太平洋戦争がはじまるとそれどころでもなくなり、七夕飾りを大きくするようになったのは戦後だという。

終戦後、疎開していた人たちが戦地から復員してきた人たちが戻ってきて商店街の七夕をやりはじめた。昭和22年(1947)に行われた昭和天皇の東北巡幸の際も盛大に飾ったというが、長町までは見に来なかった。当時の飾りは紙不足だったのでレッテルをためておいて吹流しを作り、また、ちり紙で花を作ったから真っ白だったという。白い花には絵の具を吹き付けて色をつけたりもしていた。そのためまずは材料集めから行わなければならない、包装紙をきれいにたたんでしまっておいたり、レッテルをもらってきたりしていたという。その後、色のついた紙が出始める昭和25、6年(1950、1951)ごろが最も盛んであった。

竹は、家並みの裏手の方に竹やぶが多かったので、そうした竹林から個々にもってきており、費用はかからなかった。親たちは忙しいので子どもたちが主体となって飾りを製作し、七飾りについては昔からのしきたりということで母親から聞いたという。そして近所同士で競い合って七夕飾りを製作し、10日や2週間かけて作った飾りが竹に付けて上がると嬉しいものだった。当時は半屋が多かったため七夕の竹は大きく見え、八百屋はすいか、魚屋は魚、お菓子屋はお菓子。文具屋は本、えんぴつなど、その業種に合わせた飾りを工夫していたという。1つ1つは豪華ではなかったが、全体で飾ることの集合美だったと語る人もいる。

##### その後の展開と現在

それまで個人で飾っていた七夕は、規模が大きくなるにつれ個人負担が大きくなっていった。そこに宮城県沖地震が起きて長町が被害を受け、商店が少なくなり七夕を出す店も減ってしまったという。そして地下鉄工事や街路整備もあり、それまでの街並みも大きく変わってしまっていて個人で七夕をあげるようなところはほとんど無くなってしまった。その要因を建物が木造から鉄筋コンクリートに変わって七夕を引っ掛けるところが無くなったためと語る人もいる。

現在の長町では商店街や婦人会、子供会が主体となって七夕をやっている。七夕を飾る店も減ってはいるが、「やめようと思うけど、やめられない。」「年に一回だから飾ればいい。」と語る人もいる。そんな中で七夕を受け継いでいく若い人へ期待する声が多い。



街路のミニ七夕①



街路のミニ七夕②

## (2) 各家庭での行事

### 七夕流し

現在では七夕流しを行っているところは無く、全て商店街で回収したりしている。長町での七夕流しは昭和30年代に広瀬橋から流していたといった話が聞かれた。ただ、たいていは流したかもしれないというもので、多くの人が七夕流しを知ってはいるものの、実際に行ったという人は上記の1人だけであった。あとは長町の話ではないかもしれないというものも目立った。

### その他行事

現在、各家庭などで七夕に関連して特別なものを食べたり、行事を行うというところは見られない。72歳になる男性によれば、子どもの頃、母親から朝早く起きてカラドリの業に夜露で取ってきて、墨をすって書くと言葉が上達すると聞かされたというが、実際にしたことはないという。また、75歳になる女性は、昔は七夕には浴衣を着て花火をして、縁台で枝豆、ナス漬け、とうもろこし、スイカを食べたという話も聞かれた。

## (3) 現在行われる七夕期間中のイベント

七夕期間中には商店街を中心として様々なイベントが行われるが、ここでは今年、平成20年のイベントをまとめた。

### ふれあい事業

8月6日には、後述の通りたなばたバスツアーとして観光客が長町の商店街などを回るのに合わせて各商店街ではふれあい広場としてイベントを開催している。

長町一丁目商店街では、リップロード長町にテントを設営して朝10時からこま回し、輪投げ、ビーチボールスイカ割りなど子供向けのイベントを行う。サンカトゥール商店街では、仙台銀行前で短冊を書いてもらうコーナーを設けている。昔は川柳を書いてもらうコーナーを置いたことがあったが、とっさに川柳を書ける人が少なく、短冊にしたという。長町駅前商店街では、ながまちバザールをタイハックルで開催している。このイベントは終日行われ、途中でバスツアー参加者が立ち寄る。ふれあい広場の開設は6日のみで、残りの期間は七夕飾りだけとなる。

### バスツアー

8月6日に行われた仙台七夕まつり協賛会主催のたなばたバスツアーでは、長町の3商店街は「ひこほしコース」に組み入れられ、前述の通りそれぞれの商店街でイベントが行われている。このバスツアー一定員は40名ほどで事前申し込みが必要となり、「ひこほしコース」の場合、費用は1人3000円である。

9:50にJR長町駅に集合した参加者は、まず長町駅前商店街で七夕飾りや、ながまちバザール大バザールを見学し、庄司恵子コンサートを聴く。その後バスで茂庭にある旧伊達邸鐘景園に移動して昼食をとり、柳生和紙工房を見学。そして長町一丁目商店街へ移動して広瀬橋のたもとにある橋姫明神、十八夜観音を見学して説明を受け、一丁目の沿道にある七夕を徒歩で見学しつつ一丁目公園で休憩をとる。ここで長町一丁目商店街より冷たい飲み物や味噌パンが振舞われる。そしてサンカトゥール商店街に移動して豊年饅頭の水まんじゅう配布や仙台銀行前のテントで短冊に願い事を書いてもらい、書いてくれた人には竹のタジを引いてもらって風鈴やうちわ、エコバックのうちどれかが当たる。予定のコースでは、蕎麦師で冷たい飲み物のサービスとトイレ休憩があったが、場所が変更されたコースから外れた。おおむね16:30前にツアーは終了した。

#### 七夕審査

8月6日には仙台七夕まつり協賛会による七夕審査が行われ、各商店街の役員と七夕の審査員、ミス七夕などが3商店街を回って審査を行った。審査については、受賞をめぐる競争が激しくなり、華やかな飾りを製作するための個人的な負担も大きくなることから、「せっかく気持ちであげるのだから賞をつける必要はない」と思っている人もいる。

審査の結果、団体審査では第三地区Bで長町駅前商店街振興組合が銅賞をサンカトール商店街振興組合が奨励賞を受賞した。

## 第2節 荒町の七夕飾り

### 1 調査地の概要

#### (1) 町の成り立ちと歴史

荒町は仙台市若林区に属する町で、市街中央を貫く幹道である国道4号から分岐し、南小泉方面へ抜ける県道235号荒井荒町線沿いに形成される。ここは仙台開府の際に、伊達政宗とともに米沢・岩出山から移ってきた町人たちが住んだいわゆる御譜代町の一つで、開府当初は南町の西側に、奥州街道を挟んで並行して配置された。それが1627、8年（寛永4、5）頃の若林城の建設によって城下が拡張され、奥州街道の道筋も変更されたのに伴い、荒町は新しく敷かれた奥州街道沿いに移され現在の位置となった。



荒町周辺地図

荒町は麴の製造や販売の特権を許された町で、明治の初めまでは71軒の麴屋があり、その副業としてのササラや洪団扇なども盛んであった。このため荒町の女性は年間を通して休む間もなく働き、荒町から嫁の口がかかれれば「荒町さ行くか井戸さ入っか」というほどのものであったという（『仙台あこのころこのころ八十八年』三原良吉 仙台八十八選定委員会 1978）。明治期に麴の特権が解消されてからは、味噌、塩、油、食料品などのほか、さまざまな店が立ち並ぶ商店街として栄えた。

また寛永年間頃に市街地全域にわたって整備された四ツ谷堰（四ツ谷用水）とは水源を異にする孫兵衛堀も、清水小路から荒町を流れ、南鍛冶町、櫛ヶ岡にかけて生活用水、また農業のための灌漑用水として利用された。この孫兵衛堀は昭和2～30年代まで利用されていたというが、現在は埋め立てられ荒町小学校にその記念碑を残すのみとなっている。

町内には子育ての神として信仰を集める満福寺の毘沙門天があり、荒町の守り神としても親しまれ、1月14日にはどんと祭、8月1、2日には例祭が行われる。この例祭は以前は旧暦の7月6日で七夕の前日に行われていた。このほか商店街のさまざまな行事でも町の人びとと毘沙門天が関わる機会が多い。

#### (2) 現在の荒町

今回荒町内の社会組織について詳しく調べる事ができなかったが、商店街の概要を掴む上で、町内会と商店組合について簡単に記述しておく。

荒町の商店街の全長は6～700mに及び、その間に荒町第一から第四町内会の四つの町内会が存在する。8月1日、2日の毘沙門天の例祭などはこの町内会が主体となって行うものとされている。またこれら単位町内会の上に荒町小学校の学区を範囲とした荒町地区連合町内会があり、荒町のほかに隣接する清水小路愛清会、東七番丁南部町内会、東八番丁南部町内会、土樋町内会、石垣町内会、弓の町共和会、石名坂町内会、南鍛冶町町内会などの単位町内会が含まれる。

町内会以外に商店が加入する荒町商店街振興組合（以下場合によって商興会と略す）があり、前身であった荒町商工会をもとに昭和63年に発足された。これは商店街全体での行事を運営したりする際に関わってくる商店組合で、最高に理事長を置き、婦人部や青年部も存在する。毘沙門天の例祭に合わせて境内で行われる夜空のオーケストラ（宮城教育大学管弦楽団と荒町小学校スクールバンドによ



る音楽祭。2006年までは星空コンサートとして仙台フィルハーモニー管弦楽団を呼び、20年間続いた。)をはじめ、七夕などの行事もこの荒町商店街振興組合主催のもとに行われる。

荒町は現況のアパートや駐車場の増加している商店街に比べると、商店経営を続けている家が多く、青年部の年齢も3～40歳代が主であるように商店街の人員層も厚い。また商店をやめた家でもテナントとして店舗を貸している場合が多く、テナントの出入りも多い。このように昔からの老舗が残っている一方で、新しい店が入っては変わっていき、さまざまな表情を見せるのが荒町の商店街の一つの特徴といえる。

## 2 荒町の七夕

### (1) 荒町の七夕の変遷

#### 戦前の七夕

戦前の荒町では、七夕を商店街規模でやるようなことはなく、主に子どものいる各家庭で行っていたようである。七夕を飾る期間は8月6、7日という人もいれば、一晩だけ飾ったという人もおり、飾った場所も庭の井戸端、門などで、表通りには庭に出せない人が飾るくらいだったということが聞き書きから伺える。

飾りは家族間で作り、材料の紙は当時荒町にあった鳴海屋紙店（現在若林区卸町二丁目に所在）や南鍛冶町我妻紙店などで購入していた。ただし男の子にとっては飾り作りは乗り気でないことが多かったようだ。飾りは現在と同じ吹き流し、折り鶴、短冊、紙衣、投網、くずかご、巾着の七つ道具が基本で、吹き流し等の飾りは今ほど立派なものではなかったという。また、昔は短冊が多く、「字が上手になるように」など子どもなりの夢を書いたという。ほかにも幼稚園児くらいの子どもが着るような本物の浴衣を飾っていた家もあった。

飾りを飾る竹は直径3～4cm程度の太さで高さは天井くらいまでのものであった。このための竹はどのように入手していたのかは分からないが、昔は竹やぶも周辺に多く存在し、そこから切り出していたのではないかという話である。飾りはその後川に流したり、田舎のほうに持って行ったという話もある。

昭和12年、日中戦争が始まったころに紙の規制が始まり、店の広告や七夕の飾りにも影響が出るようになった。太平洋戦争が1941年（昭和16）年に始まるころには、七夕などの行事も行われなくなったという。

#### 戦後の七夕の展開

七夕は戦中は荒町のみならず仙台市内全域で不況を見せたが、それが復活したのは戦後の1946年（昭和21）のことである。この時は東一番丁に十年ぶりに七夕飾りが飾られ、8月6日・7日の二日間にわたって開催された。

翌1947年（昭和22）、昭和天皇が巡行で仙台を訪れ一本杉の伊達屋敷に宿泊した。この時、繁華街から伊達屋敷まで五千本の七夕が飾られ、荒町ではこの昭和天皇の巡幸を期に、商店街規模で七夕を表通りに飾るようになった。ただし全ての店があげていたわけではなく、竹も今に比べれば小さなものだったという。

その後荒町にもバスが走るようになると、七夕飾りがバスのワイパーなどに絡まり七夕を引きちぎるという問題が発生した。バスの運転手からも苦情が来たが、それに商店街の人たちも怒り、七夕は中止となってしまふ。それが復活するのは1973年（昭和48）頃に、通り沿いの店先を1間ほど削って歩道を作ってからになるが、当時はまだ今ほど盛んではなかったようだ。

この頃の子ども会では、町内会長の家などに行って七夕飾りを作り、飾りを作り終えた後、ジュースを飲んだりスイカを食べたりしたという話がかかれていた。このとき飾り作りは一日くらいで終わったという。また荒町市民センターができたのが昭和47年で、当時ここを飾り作りの場として利用していたかどうかは分からないが、1985年（昭和60）年頃になってくると、休日に市民センターに集まって飾りを作ったという話も聞かれるようになってくる。これは荒町全体の子どもが集まって作り、当時の話者はこうして子ども会で飾り作りを教えていたのはどこかの商店の母親ではなかったかと語る。

1988年（昭和63）になると荒町商店街振興組合が発足される。当時は穀町の七夕が盛んで、それに並ぼうと商興会のほうでも商店への呼びかけを行っていたころだった。商工会議所の補助金制度について補足してもなかなか参加者が出ず、竹も黒川郡のほうまで取りに行くなどして試行錯誤する期間がしばらく続いたという。そのときある有志が七夕を一人で10本作り、その年の七夕で初めて荒町が団体金賞を取ることができた。そのようなことがあって荒町の七夕も活気がつき、中には夫に勤められて七夕をはじめてみるという人も増えてきた。

#### 現在の状況

以上荒町における七夕の変遷を見てきたが、現在はどのような状況で七夕が行われているのかというも以下で見ていきたい。

現在の七夕の期間は8月6、7、8の3日間である。1、2日には荒町毘沙門天の例祭があり、3日には宮城教育大学管弦楽団との共催による夜空のオーケストラがあり、商店街では大きな行事が続くためこの期間は忙しくなる。



荒町の七夕

七夕に関する話し合いは荒町商店街振興組合の理事会において、婦人部、青年部を交え毘沙門天の例祭、夜空のオーケストラの打ち合わせと並行して行われる。6月には七夕を上げるか上げないかを町の人びとに聞いて回ると行った具合になる。仙台市商工会議所が主催している七夕コンクールの対象ともなっているため、なるべく多くの参加を呼びかけている。

七夕を上げるのは商店がほとんどだが、店をやっていない一般家庭やその他の各種団体も参加することができる。テナントを借りて店を営業している人なども参加しており、これらの参加者には七夕1本につき補助金が出るようになっている。また団体とは別の個人賞の対象にもなる。今年の七夕は全部で49本出るという。

商興会のほうでもなるべく多くの七夕を上げて通りの飾りに隙間が出ないよう声がけをしており、ここ最近荒町にやってきてはじめるようになったという店や団体などもある。こうして新しく始める人たちは長年七夕飾りを作り続けている人や婦人部から飾り作りを教わるという。

その一方で飾り作りをやめてしまったという店も多い。そうした理由としては従業員がやめてしまったことや、娘が大きくなって店を出て行った、また奥さんや旦那さんを亡くして一人になったということが上げられる。

こうした状況から現在では飾りの不足分を埋めるために商興会の婦人部が定期的集まって飾りを作ったり、それ以外の有志が飾りをするようになっていく。また新しく荒町に来た店などでは、飾りが雨に濡れても上げっぱなしという事情を聞いて、やろうというところまではいかないというところもあれば、チェーン店などは参加したい気持ちがあってもなかなかそうはいかないという。

なお昔は参加していた子ども会も現在は七夕に参加しておらず、荒町小学校の一部の学級で飾り作りが行われるようになっていく。また数年前からは荒町市民センターでも七夕を作って上げるように

なっている。

## (2) 七夕飾りとその作り手

### 七夕飾り

七夕の基本的な飾りとして七つ道具がある。荒町商店街振興組合発行の「ミニミニ情報あらまち Vol.19」に掲載された紹介によると、七つ道具は①吹流し（織り糸をたらしした形）、②折り鶴（家族の長寿を願う）③短冊（学業や書道の上達を願う）④紙衣（身代わりとして病気災害を除く裁縫の上達を祈る）⑤投網（豊漁豊作を祈る）⑥くずかご（節約や清潔の心を養う）⑦巾着（商売繁盛や富貴を祈る）となる。（出典：「ミニミニ情報あらまち Vol.19」 荒町商店街振興組合 2005年7月25日）

これ以外にも、かつては、スイカやカボチャの中身をくりぬいて目や鼻など穴を開け、下から蠟燭を入れて吊るした飾り物や、吹流しの先一本一本に線香を付けて火を灯す七夕線香などがあった。ちなみにこの七夕線香は今でもしているところがあるが、火は付けていない。ほかに自分の店の屋号を飾りに入れて飾るところもある。



七夕線香

### 飾りの作り手

七夕を作るのは商店街の店がほとんどだが、それ以外の一般家庭、幼稚園、保育園といった各種団体も参加することができる。その中で飾りの作り手にも家族、従業員、親戚、顧客などさまざまなバリエーションが見られた。

家庭間での場合は、基本的に母親や嫁、娘など飾りは女性が多くなる。男の人でも手伝ったりする人はいるが、大元に指示をしたり、枝を切ったりなど飾り作り自体に参加する人は少ない。また、女性の中でも男性は飾りを作るのが下手だから手伝わなくてもいいと考えている人もいる。実際に飾りの作り方が分からない、鶴が折れないといった男性は多いようである。また中には荒町外の親戚が鶴を作って送ってくれるといった例もあった。

従業員を含めての飾り製作の場合には、店によって勤務時間のうち一時間を飾り作りのために割り当てていたところもあった。それは20日ほどかかったという。近年では従業員の減少によって飾りを作ることができなくなったという店も出てきており、そのため今まで女性の従業員に任せっぱなしにしていたのが、自分が作らなければならなくなったという男性の店主もいる。

家族・従業員以外にも、10年ほど前まで南鍛冶町に住むお得意さんに二人ほど来てもらって、一日の手間賃を払って飾りの作成を手伝ってもらったという店もあった。また折り紙教室を開いている人の店では、折り紙教室に通うお客さんが手伝いに来てくれることになっており、その中には外国人も参加しているという例もあった。

### 飾りの材料

七夕飾りの材料であるが、荒町では七夕の材料は美しさを重視のために買い揃えることがほとんどである。近隣では99円均一店や我妻紙店などから材料を買うこともある。飾りの種類によっては、たとえば包装紙を使って着物を作ったりすることもあるが、こういったあり合わせのものは主だったところではなく中材として使い、外側は和紙にしりする。

他にも使えそうな飾りを来年用に取っておきリサイクルする場合もあるが、大体は雨にあたって使い物にならなかったり、日に焼けて紙が縮んだり色がはげたりするため、基本的には毎年新しい材料を揃える。

## 竹

竹は昔は近くの竹やぶから切り出したり、20年ほど前には黒川郡から運び出したりしていたこともあったのだが、現在では名取市愛島の農家の山から切り出している。この農家と荒町の付き合いはかれこれ10年になるというが、はじめは宮城県の中企業団体の会合で知り合い、そこで偶然七夕の話し合いになったのがきっかけであった。

この農家とは七夕以外にも交流があり、農家が行っているタケノコ料理を5月になると商興会のほうで団体を組んで食べに行く。これは竹を無償で提供してくれることへのお礼の意味もあり、行く前に案内を出して参加者を募り、家族も参加することができる。そして何台かの車に分譲して屋敷のほうで昼の宴となる。

また商興会経由ではなく独自に竹を調達していた家もある。その家は花屋を営んでいることもあり、14、5年前まで七夕を行っていたころは竹を卸す業者から七夕の竹を調達していた。また、七夕後にはその竹を切断してお盆のお墓に供えるための花竹として使った。

### (3) 七夕まつわる習俗

荒町では現在七夕期間中に特別に行う風習はないようであるが、かつて行われていた二つの風習を紹介する。

#### 飾りに見る風習

戦前の荒町では短冊に願い事を書くための墨にサトイモの葉の朝露を混ぜて磨るということがあった。この朝露を取りに行くのは子どもの役目だったが、意地悪な子どもなどは女の子が集めたものを蹴散らして泣かせたりすることもあった。そうするとその親に怒られ、顔を見れば誰の子どもなのかすぐに分かったため、子どもも嘘をつけなかったという。

#### 七夕流し

また戦前には七夕飾りを広瀬川に持って行って流す風習もあった。この際川に流しに行くのもまた子どもの役目であり、竹はカマドに焚いたという。飾りを流しに行くのは日中で、夜中に行くということはなかった。当時は猫の子どもが生まれると袋に入れて川に投げることがあり、夜に川に行くと六郷堀、七郷堀の堰のところに引っかかった猫の声が聞こえてきて子どもにとっては耳から離れなかったという。またそのために猫にバチを当てられるとか、愛宕橋付近にある梁川庄八の首洗い池の伝説などがあって、夜の広瀬川は怖くて子どもは行かなかったという。

この七夕流しはやがて飾りが六郷堀・七郷堀の堰に引っかかるという理由から中止となった。昔は農家のほうでホリハライ（堀払い）といって、水を流さないようにして干上がらせてから、村全員で堀を掃除する作業があり、六郷・七郷の農家が組む講の年中行事だった。そのときに飾りと農家の人にとっては非常に邪魔というので、これ以降飾りを川に流すのは中止になった。

#### 七夕中の食事に関する習慣

荒町では今も昔も七夕中に家庭内で行うような習慣はなかったようである。ただし一軒だけその家独自に行われていた習慣について聞くことができた。それがなぜ行われていたのか、また七夕に関係するものなのかは定かではないが、食事に関する事例を紹介する。

1928年（昭和3）生まれの話者の話であるが、七夕の日の夕方頃になると、おばあさんが「ムシロ敷け、ガキめら座らせろ」といって七夕飾りの下にムシロを敷き、そこでカボチャご飯を食べたという。これは家族全員で食べるというわけではなく、いとこなどが来ていればいとこを含め子どもたちだけで食べた。

カボチャご飯は白米にカボチャを入れて煮込むもので、小豆などは入っていなかった。当時は麦こ

飯ばかり食べていた時代だったので、白米を使うということはこのとき以外に正月くらいのもので大変めずらしいことであった。これを大きい木のおほつに入れて分けて食べたが、副食などはなくそれのみだったという。また昔は商人がご飯を食べるときは一杯のみで、今のようにおかわりをすることはなかったため、一杯で足りるようにちょうどよく分けたのではないかと話である。

このときなぜかボチャゴ飯で、なぜそれを子どもたちだけで食べたのかは、親もいなくなったため分からないというのが、とにかくまず子どもたちに食べさせたので、もしかしたら子どもたちが丈夫に育つようになどと祈りが込められていたのかもしれないと話者は話す。またこれを七夕飾りの前や仏前、神前に供えたかも記憶にないという。「仙台市史特別編6 民俗」（仙台市史編さん委員会1998）にも、「七夕飾りの下には季節の果物、野菜などを供え、また簾を敷き、家族や近所の子供たちどうしで精進料理を食べる。これは農村では戦前まで盛んに行われていた。」と書かれていることから、この話者の話も同種のものと考えられる。なお話者の祖母の里親である沖野の農家のほうでは七夕を田んぼに飾っていたという。

### 3 七夕を取り巻く人びとの動き

#### (1) 飾り作りの現場

##### 飾り作りの流れと保管の方法

荒町における飾り作りの流れであるが、飾り作りに取り掛かる時期は店や人によって違いが見られ、早い人は4月頃から、大体の人は6月頃から作り始める。まず最終的な飾りのデザインを考え、それに沿って鶴や花を作り始める。毎年飾りを作っている人はネタも尽きてくるためデザインを決めるのが大変だという。

飾り作りは仕事の合間などに続けられ、その間家族以外にも嫁に行った娘や親戚に手伝ってもらおうということもあれば、店のお得意さんに手伝ってもらおうということもある。従業員が飾りを作っている店などでは飾り作りのための時間を1時間ほど割り当てているという例もあった。

なおこれは荒町の隣の南鍛冶町に住む80歳代の女性から聞いた話であるが、昔は飾りを作る際に家族だけで足りない親戚の子どもに手伝ってもらい、お菓子や食事を用意することもあったという。また昔のお嫁さんは自分の意思が通らないため、姑の言うとおりにするほかに、気を遣わなくてはならないため大変だったという。

こうして作った飾りは自宅の部屋の天井に吊るして保管しておくが、飾りができていくにつれて生活スペースがどんどん狭くなっていく。そのため多く作る人ほど自分の寝室まで七夕飾りで溢れることになってくる。自宅のほうに十分なスペースがなかったり、テナントを借りて店を営んでいる人などは店のほうに飾りを保管しておく。

またせっかく作った飾りも小さな子どもが握って台無しにしてしまったり、花を作り溜めて入れておいた箱の中に猫が入って寝ているということもよくあるという。ある人は暑くても飾りが飛んでしまうため扇風機がつけられず、七夕と夏が大嫌いになるという。8月のはじめにもなれば思沙門天のお祭りや夜空のオーケストラもあり、男性陣は商店街の行事で忙しい一方女性たちは最後の追い込みというように、この期間は非常に忙しくなる。



七夕飾りの保管

### 飾り作りの工夫

一方飾りそのものを見てみると、年々作るうちに手が込むようになって来てさまざまな工夫が盛り込まれる。たとえばす玉につける花の数がどんどん増えていたり、花の色を複数色にしたり、また花をくす玉に均等につけるためにかごにテープをぐるぐる巻いてから千枚通しで均等に穴を開けてつけるというようなこともある。七夕飾りそのものとは別に何か特徴的な飾りを付随させるなど、技術・労力両面において変化が見られてくる。またデザインの参考のために中央の七夕を見に行くこともあるという。



飾り作りの工夫



吹き流しのデザイン

### 作り手の意識と七夕への関わり方

飾り作りへの意識も人それぞれで、鶴や花一つ作るにしても他の人の助けを借りず、全て自分で作るというほどのこだわりを持っている人もいれば、飾り作りを人との交流の場と捉えている人もいる。

前者のような場合は人とお茶を飲むにしても七夕のことは一切触れず、当日まで飾りを人に見せない方針にしていることが多く、賞に対する志向性も高い。そのため当日の飾り付け時のチェックなども徹底している（第4節 飾りつけ参照）。一方後者のような場合は賞への関心はあまりない分、飾り作りを楽しむことに重きを置いている。

## (2) 七夕における支援者側の取り組み

### 荒町商店街振興組合婦人部の七夕作り

現在盛んに行われている荒町の七夕であるが、店をやめてしまったところなどではシャッターが閉まったまま飾りも上がらず、どうしても全体的に飾りの空く空間ができてしまう。こうした空白を極力なくすため、不足分を補おうと定期的に集まって飾り作りをしているのが荒町商店街振興組合婦人部である。今年（2008年）の七夕では49本の七夕飾りのうち10本をこの婦人部が作った。

婦人部は毎週火曜日の夜7時から9時頃まで飲まず食わずで飾りを製作する。鶴や花は部員間で宿題として自宅で作るようにしている。こうして七夕当日まで大体10回は集まることになる。また来れない人にも飾り作りを協力してもらっており、人によっては着物作りが得意な人などを専門に作るということもある。

婦人部は飾り作りに対して意欲的であり、数年前に荒町が団体金賞から一気に銅賞に下がったときに非常に落胆し、婦人部の部員数人で車に乗って他の町の飾りを見に行くということもあった。

### 荒町商店街振興組合青年部の取り組み

一方七夕には竹が必要となってくるが、この竹を調達するのが荒町商店街振興組合青年部である。竹は現在名取市愛島の農家から切り出し、トラックで運んでいる。また竹を立てたり下ろしたりする作業は一般の人には厳しいため、その際にも青年部が手伝う。またこれらの作業には学生などの若いアルバイトも加わる。アルバイトは部員の息子や知り合いなどが主である。

### 有志による七夕作り

また先述したように飾りの空白を埋めるために婦人部が飾りを作るが、商店街の七夕をより華やか



有志によるミニ七夕①



有志によるミニ七夕②

にするために、婦人部の活動とは別にミニ七夕を作って飾る人もいる。こうしたミニ七夕作りは数年前に団体賞で銅賞になったのをきっかけに、翌年から一部の有志によって行われるようになった。

ミニ七夕は長町の駅前に飾ってあったものを参考にはじめたという。全体のバランスを考慮し、荒町小学校のフェンスに飾ったり、シャッターの閉まっている店の人に頼んで飾らせてもらう。材料は牛乳パックや余った吹き流しなどを使ってお金をかけないで作っている。またこうしたミニ七夕作り以外にも、個人で自分の店に飾る以外の七夕飾りを作って空いているところに飾るといった人もいる。

### (3) 竹の調達

#### 竹の切り出し

今年の竹の切り出しは、8月3日（日）と4日（月）の2日間に渡って行われた。3日には夜空のオーケストラがあったため、部員のほとんどはそちらの準備に当たり、数名が切り出し部隊として愛島の農家に行って竹を切ってきた。これはチェーンソーを使うため慣れていない人でないとできないという。今年は竹を75本ほど切り出したが、多めに切り出すのは竹の選定のときに曲がっているのが嫌だとか枯れているのが嫌だとかいうように気に入らない人も出てくるためである。

4日の朝、夜空のオーケストラのために借りたパイプ椅子を五橋中学校に返却したあと再び愛島に向かう。10時37分農家に到着し、敷地に車を置いて虫除けスプレーを全身にかけ、山に移動する。竹は間引かなくてはならないため毎年切り出すところは違うという。

10時53分、アルバイトを含め15、6人で作業が開始される。山道の中央に用意した台（道路工事などに使う通行止めのガード）を置いて、そこに竹の幹を乗せて下に押し付ける。こうすることで竹がテコの原理で反り返り、飾り付け時の状態が判別できる。竹の背面に当たる上側の部分を枝を残し、下側の枝をノコギリやナタ、ハサミを使って払う。そうして枝を払うと山道の下に停めておいたトラックのほうまで運び、幹のほうから乗せていく。このときちゃんと並べないと全て乗せることができないため、それを専門でする人が一人二人つく。作業はこの繰り返しとなる。

11時35分、1回目の休憩となる。この時点でトラックの荷台に乗せた竹は5分の1ほどだが、ジュースを飲む手がかさどる。このための飲み物は荒町商店街振興組合のほうで用意した。このあとも2回休憩を挟みながら山から竹を積み作業は終わったが、虫除けスプレーを使ったとはいえ汗で流れてしまい、蚊に食われながらの作業となった。また山道の一面に払った枝が積み重なってしまったため、これを脇へよけることになったが、枝と枝が絡まってとても重く、相当の体力を使いながらの作業となった。

山から降りると次に敷地の門前に置いてあった10本ほどの竹を積み、ロープで全ての竹をくくりつけて作業は終了した。その後農家の方が用意してくれたスイカやきゅうりの漬物などを食べ、14時40分に愛島を出発した。荒町公園前に到着すると、竹をトラックに積んだまま一行はまずみんなで料理屋に行き食事を取った。

## 竹の配付

16時35分、荒町公園前でトラックの荷台から竹を下ろす作業が始まる。下ろした竹は一本一本荒町公園に並べていく。こうして竹を取りに来た人から自由に選んで持っていくことになる。この際もアルバイトが手伝う。

婦人部は10本の竹が必要なため、選んだ竹にシールを貼ってこの場で余分な枝を払ったり竹の長さを縮めて調整していく。こうして今日中に竹を取りに来ない人もいるものの、作業は18時に終了した。

## (4) 飾りつけ

### 飾りつけの流れ

飾りつけは6日の早朝に行われる。朝方小雨が降り地面が濡れていたが、飾りつけが始まる5時頃にはやんでいた。

まず5時15分頃から婦人部の飾り付けが開始される。第3ふれあいセンターに一括して保管されていた飾りを所定の竹のもとへ運んでいく。二手に分かれ、一方は国道4号に面した荒町の入り口のほうから、もう一方は仏眼寺前から飾りをつけ竹を立てていく。この時間の車の通りはまだまばらである。このときも必要に応じて見映えをよくするために枝を払ったり、バスに引っかからない程度の高さに調整して竹の長さを詰めたりする。吹き流しを吊るす紐の長さをきっちとそろえ、準備のできたものから青年部が紐で電柱に縛り付けていく。飾りは一度竹につけて上げてしまえば取り外すことはできず、滑車を使って上げ下げできるような店はごくまれである。

次第に飾り付けをする店は増え、7時頃にもなると交通量も多くなってくるため車を一時止めたりすることも見られてくる。こうして店が営業を開始する時間帯には大体の飾り付けが終わり、作り手間でも他の人がどのような飾りを作ったのか初めて分かることになる。

### 完成形へのこだわり

なお飾りつけはただ飾りを竹につければそれでいいかというそうではなく、作り手の飾りへのこだわりが反映される。

たとえば人によっては飾りに番号をつけてくす玉と吹き流しの組み合わせを間違えないようにしたり、飾りをつけるにしても竹の先につけてきれいにしなって見えるようにしたり、竹の枝のバランスが悪ければ荒町公園から枝を拾ってきて、副え木をして緑のテープでつなぐおすというように、自分が思い描く形を実現するためには徹底的にこだわって妥協をしたくないということもある。

このように飾りの上げ方、吊るし方、枝とのバランスによって見え方が違ってくるため、飾り付けのときに何度もチェックすることが必要となる。

### 飾りつけ後の諸問題

飾り付けをして竹を立ててしまえば、これまで一生懸命飾りを作ってきた作り手たちも七夕のことは忘れ、あとはどうでもいいということが、その後もいくつか頭を悩ませる場面が出てくる。

まず七夕期間中には必ず雨が降るといわれており、今年は飾りつけ前に雨が降ったが、前の年は立ち上げが終わった直後の10時に雨が降ったという。一度立ててしまえばその後はずっと立てたまに



竹をしならせた飾り方



なってしまうため、こうして雨で地面に落ちぐちゃぐちゃになった飾りを掃いたり、歩行者に当たらないようにはさみを入れなければならないときは悲しいという。

また車両によって飾りが引きちぎられてしまうといったこともしばしばあり、飾りが引けなかったまま持って行かれたり道端に置き去りにされていくこともある。最近では夜中にいたずらで引きちぎっていく人もおり、最後まで何もないままとの状態で飾りを下ろすということは少ないようだ。

## (5) 七夕期間の様子

### 期間中の催し物

七夕期間中には毎年何かしらの催し物を行うようにしているというが、近年では荒町を訪れた人を丁寧におもてなしするという意味を込めて無料のお茶会を開くようになっている。このお茶会は今年で4回目を迎える。

お茶会は荒町の入り口から少し進んだところにある酒屋の前にテントを張り、午前10時から行われる。荒町近辺の小・中・高生の女子生徒13人が浴衣を着てお茶出しを勤め、荒町市民センターでお茶作りの教室を開いている先生が指導役に当たる。また婦人も手伝いに当たる。お茶会に集まった人びとは各々世間話に花を咲かせ、中には子どもの晴れ姿を見に来る父兄もいる。主催者側はこの行事を重ねることで交流が深まり、子どもたちも社会のマナーを学ぶことができるので有意義であると語る。お茶は七夕コンクールの審査員一同にも作り、子どもたちは緊張した面持ちでお茶を勤めていたが、「おいしいね」の一言にはっと胸を撫で下ろした様子だった。

### 仙台市商工会議所による七夕審査と七夕バスツアー

6日には仙台市商工会議所による七夕審査と、七夕バスツアー参加者のために荒町の名所をめぐる荒町歩行ツアーが行われる。ツアー参加者は30名ほどで、午後1時に海軍中佐斉藤七五郎生家跡である荒町市民センターを出発し、拡声器を持った町内の案内役の先導のもとにツアーが始まった。

ツアーではまず午前中にお茶会が催された酒屋にて、荒町の酒蔵である森民酒造の地酒を試飲し、その酒蔵を見学したあと昌伝庵、佐藤味噌醤油店、荒町見沙門天を回り、最後に荒町まちおこしセンターにて商店街の取り組みを紹介するといった内容で、全体で一時間ほど要した。

### 星の宵まつりでの神輿担ぎ

七夕期間中、中央商店街では星の宵まつりと呼ばれるパレードが行われているが、その一環として行われる神輿担ぎは毎年荒町の青年部が音頭をとって担ぎ手を募集している。このときの代表役はその年その年で代わる代わる務めるという。神輿担ぎは7日に行われ、荒町からは4、5人ほど参加したが、そのほかに原町、宮町、長町、連坊、伊達幹興連(だてすいこうれん)、泉興会(せんこうかい)、舞興組(まいこうぐみ)といった神輿担ぎの団体、その他有志の人たち計30人ほどが参加した。

## (6) 飾りの片付け

以上のように七夕の3日間が過ぎ、最終日(8日)の飾りの片付け作業は3時頃から始められる。わりと早い時間に片付けが開始されるのには、本数が多いため遅い時間にはじめると暗くなる前に終わらせることができないという理由による。一方3時に下ろしはじめての夕方方見に来る人ががっかりしてしまうという意見もある。そのため一部の店は暗くなるまで飾りを上げたままにしておき、そのあとは自分たちで片付けることにしている。

竹を下ろすときには、歩道のほうにたぐりよせてなるべく車道に出ないように注意する。竹は荒町公園に運び、そこで枝を払ってダンボールに詰めていく。竹は短冊が付いたままになっているものも

多い。幹のほうはチェーンソーで切断して細かく分けていく。こうして分けた竹は翌日の朝6時頃に業者がゴミとして回収していく。

人によっては七夕が終わってから飾りを七郷にある福祉施設に渡すということもあれば、姉妹都市に持って行くということもあるようだ。また花の針金を外して鼻紙にしたり、独自に竹を入手している店などでは七夕の竹をお盆のお墓に供える花竹として活用することもあった。

#### 参考文献・資料一覧

- ・『仙台市史通史編3 近世1』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 2001
- ・『仙台市史通史編4 近世2』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 2003
- ・『仙台市史通史編5 近世3』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 2004
- ・『仙台市史通史編6 近代1』 仙台市史編さん委員会 仙台市 2008
- ・『仙台市史特別篇4 市民生活』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 1997
- ・『仙台市史特別編6 民俗』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 1998
- ・『仙台あのこところ八十八年』 三原良吉 仙台八十八選定委員会 1978
- ・『仙台あちこち』 佐々久 宝文堂 1982
- ・『荒町界隈物語～あらうんど・あらまち』 「若林区ウッチング」スタッフ 若林区役所 2000
- ・『忘れかけの街・仙台～昭和40年頃、そして今～』 河北新報出版センター／編集 河北新報出版センター 2005
- ・『ミニミニ情報あらまちVol.19』 荒町商店街振興組合 2005年7月25日
- ・『ミニミニ情報あらまちVol.20』 荒町商店街振興組合 2006年7月20日

### 第3節 八幡町の七夕飾り

#### 1 八幡地区の概要

##### (1) 商店街としての八幡地区

仙台市の西方に位置する八幡地区は、国道48号線を山形方面へ走らせる交通の要地として、仙台の西の玄関口となっている町である。現在は青葉区八幡地区としてもとの八幡町・八幡町崖下・覚性院丁・石切町・江戸町の全域と、土橋通・十二軒丁・中島丁・切通町・坊主町・判子町・滝前・滝前丁・角五郎丁・北五十人町・山上清水それぞれの一部、および荒巻のうち字弘法山・字仁田谷地・字文殊を、八幡一丁目から六丁目までの地番としている。

南を広瀬川と接する八幡地区は、大崎八幡神社およびその別荘である龍宝寺の門前町であることを町名の由来とする。大崎八幡神社は山原段丘の延長上の丘陵に鎮座し、この丘陵より広瀬川に向かってなだらかに広がる斜面状の土地が八幡地区の大部分を占める。

かつて作並街道と呼ばれた国道48号線は、昭和16年（1941）の市電開通に伴い道幅を4間から12間に、道の南側へ広げた。これは道路南側の土地の地主らの好意によって無償で寄付されたもので、以降この南側の商店は店舗施設の建て替え・配置換えを余儀なくされ、また隣地を買収して土地面積を維持した店もあるなど、大きくその景観を変えた。一方八幡の他の地域は、第二次世界大戦中の仙台空襲の被害を免れ、かつての町並みも多く残したが、昭和51年（1976）に市電が廃止された頃より、道の南側、北側を問わず建て替えが進みビル・マンションも多く建つ景観となった。

アイオン台風による広瀬川の氾濫があった以降、広瀬川に土手が造られた。それまでは斜面がそのまま川へ続く地形で、夏になると子どもらが裸のまま土手を走り降りて川へ泳ぎに入る光景がよく見られた。現在は土手の内側が一部遊歩道として整備され、地区内外問わず利用者は多い。

##### (2) 八幡地区の社会組織

昭和42年の住居表示制実施以来、通りの名に由来する古い町名は統合されたが、現在も地区内の町内会はもとの町制ごとに組織されている。具体的には大崎東部親交会・大崎西部親交会・土橋通中部町内会・土橋北部町内会・覚性院丁町内会・石切町町内会・江戸町好江会・十二軒町親交会・八幡第二区八幡会・八幡第三区親睦会・八幡第四区町内会・八幡第五区町内会・北三土橋共栄会・中島町町内会・北五十人町地区町友会・角五郎丁北部親交会・角五郎丁南部町内会・角新町町内会・山上清水町町内会・三滝親和会・聖親和会・山祭会の22町内会である。

仙台市内には、おおむね小学校区にあたる範囲ごとに地区連合町内会が組織されている。市内の各単位町内会が連合して加入することで地区連合町内会は成り立つが、八幡地区の場合、八幡地区連合町内会が八幡小学校区内の各町内会の連合によって組織されている。



八幡町周辺地図



八幡町を通る国道48号線

町内を通る国道48号線に面して商店街が形成される八幡地区には、八幡第一区～第五区の商店を中心とした商店組合として八幡町商店会が組織されている。八幡町商店会は現在31軒の店が加入している。商店街および地区の活性化を目的とした団体で、毎月一度役員会を開いて活動のための協議をする。昭和40年頃までは八幡商工振興組合を名乗る、家内工業の工場も含めた団体であった。ちょうちん作りなどの職工の店が地区内にあったためだが、次第にそういった工場が廃業し、昭和50年頃に商店組合として改めたものである。最も多い時期で70軒以上の加入があったが、現在は八幡町商店会に加入しない店も多くなった。現在は病院や指圧院なども商店会に含めている。

## 2 八幡地区の七夕

### (1) 商店・民家の七夕

八幡地区の家々は、仙台七夕に合わせて8月6・7・8日に、「七夕7つ飾り」をはじめとする各種の飾りを作って竹にさげて七夕をする。

七夕飾りは8月6日の夕方頃に軒先や玄関口に設置する。7日にはお煮しめやトウモロコシなどちょっとしたご馳走を食べ、8日の夕方ないし9日朝に七夕を下げる。民家の場合子どもがいる家が七夕をする傾向が強く、子が幼い頃には七夕をしたが、毎年七夕をするのではないとする家が多い。民家の並ぶ住宅地はヤシキマナと呼ばれ、商家の並ぶ通り沿いの商店街と区別される。また八幡地区のヤシキマナは戦後に社宅やアパートが多く建った。この住人たちによって七夕を共同で作り社宅・アパートの前に飾ることもある。

2008年の調査ではヤシキマナ部には七夕があまり見られなかったが、国道48号線沿いの商店街では幼い子どものあるなしに限らず、毎年七夕を店先に飾る店も多い。その際、店の七夕の方が民家のそれよりも飾りが華やかである。これらの七夕は、各商店や民家の自主制作によるところが大きい。この節では、八幡地区の七夕がそれら商店・民家でどのように行なわれているのかについて述べる。

#### 七夕飾り

七夕の飾りものはどれも紙細工であるが、その種類は短冊・吹流し・巾着・折鶴・投網・屑籠・着物のいわゆる「七夕7つ飾り」であることが多い。後述する八幡町商店会は組合加入店に七夕まつり協賛会の作るパンフレットを配布しており、そこに記されている「七夕7つ飾り」の作り方が参考にされているが、他にも多くのバリエーションが見られた。これらは大きく分けると、飾りを組み合わせる長く垂らす形状のもの、飾りを単品で吊り下げるものがあるようである。

#### 組み合わせる長く垂らす飾り

##### くす玉

デザイン上のワンポイントとなる大きな飾りから糸で輪形の軸を吊るし、この軸から長く飾りを垂らす。その最上部にくる飾りには、くす玉が最もよく見受けられる。くす玉の芯は、仙台中心部で竹製のものを買って毎年使い回すところもあるが、多くは廉価なプラスチック製のザルを二つ合わせるなどして自作し、この芯に紙製の花をいくつも貼り付けてくす玉にする。くす玉はかつては八幡地区では見られなかったが、中心部の七夕を見に行くと目にしたくす玉を真似て見様見真似で作り始めたとの話がある。くす玉をザルで作るある話者は、球形を簡易に作る方法を、と考えてザルを使うことにしたという。



飾り作りの様子

またこの垂らす飾りの上部にくるワンポイントには、くす玉以外にも、大判の紙で作る折鶴・まりなどの折り紙細工や、色紙で作った立方体などが見られた。これらは以下のものと組み合わせる飾りになる。

・吹流し

「七夕7つ飾り」の一つである吹流しは、輪形の軸から紙テープや細長く切った色紙をいくつも垂らして作る。芯は簡略に厚紙などを使うことが多いが、竹ひごを円に丸め、紙のこよりや糸を2本ほど円内に交差させて固定したものを着る例もよく見られた。戦前はむしろ竹ひごの芯を作ることが普通だったといい、垂らす飾りも色紙でなく新聞紙を用いた質素な飾りであったとの話がある。現在は色紙を繋げたり、長く切った和紙を使うところも多い。1〜2メートルないしそれ以上の長さに垂らすため、飾りの紙は一枚では足りない。複数枚の紙を繋げる際はこの色を変えて飾りをより鮮やかにする工夫もよく見られた。くす玉を吹流しに組み合わせることが多いが、吹流しのみで飾りとするものもよく見られた。

・折鶴

折り紙で作った折鶴を、単品で吊るす場合もあるが、多くは千羽鶴のようにして複数個を連ねて垂らす。折鶴は吹流しと同様にくす玉などの大きな飾りより下げた軸から垂らすこともあるが、千羽鶴のように連ねた糸を束にしたものを飾ることも多く見られた。折鶴は七夕飾りに欠かせないものだったという。

・ワッカ飾り

細長く切った色紙を輪にして幾つも繋げ合わせた、ワッカ飾りだとかクサリと呼ばれる飾りも非常によく見られる。一本の鎖状にしたこれをそのまま竹に下げたり、吹流しのように軸から垂らすこともある。「七夕7つ飾り」には含まれないが、これも昔からよく作られた飾りであるといい、かつては新聞紙でつくられることもあった。

・重ね貼りで作る飾り

特に名称は聞かれなかったが、色紙を三角あるいは四角に切り、この端を重ねて何枚も縦に貼り繋げることで長く垂らした飾りもよく見られる。最上部にくす玉や折鶴を組み合わせる垂らしたり、一本ずつ竹に下げるなどして飾る。

・その他折り紙細工

ハコやフウセンなどの折り紙細工を折り、これを縦に複数連ねて垂らす飾りもよく見られた。ハコ・フウセンはともに膨らませて立体的にする折り紙細工であるが、これを連ねる場合は間に短く切ったストローを挟んで密着させない形をとっている。ある話者は、飾りが過度に間をもって綺麗に見えるようにこうしているという。

また少数であるが、色紙を細長く切り、2枚を交互に折り合わせてジャバラ状にした飾りも見られた。これには使う2枚の紙の色を変えて鮮やかにする工夫も見られ、長く作った数本を軸から垂らしたり、1本ずつ竹から下げるなどする。

・単品で吊り下げる飾り

・短冊

「七夕7つ飾り」の一つである短冊は、八幡地区でも必ずといってよいほどよく見られる飾りである。色紙あるいは白紙に、願い事を書いて下げる。短冊の端に縦長に切れ目を入れ、これを上に折り



折り紙細工の七夕

曲げるか、こよりにして竹に絡めて下げる。穴を開けて糸を通して下げるものもあった。また少数だが、願い事を書いた短冊を何枚も縦に連ねて吹流しにする例も見られた。

短冊には家のものそれぞれが願い事を書き入れる。近年ではあまり見られなくなったというが、里芋の葉についた朝露ですった墨を用いて短冊を書くとか字が上手になると言われていた。また商店や病院の中には、客や来院者に短冊を書いてもらい、それを下げるところもある。長年七夕を続けてきたある商店の話者は「少しでもお客さんに七夕の季節を感じてもらえれば」との考えから、毎年客の短冊を飾っている。

#### ・巾着

「七夕7つ飾り」の一つである巾着は八幡地区でもよく見られる、大判の色紙を切り合わせて巾着を模した飾りである。袋部分と、ひだに折って周縁部につけるふちとは違う色の紙で作る。お金が貯まるよう願いを込めたものだといい、昔からよく作られた。年配の話者には、呼び名を巾着でなくズダズブクロとする人もおり、巾着の呼び名では知らない人も多い。

#### ・着物

「七夕7つ飾り」の一つである着物は、針仕事が上手くなるよう願いを込めて作るものだったといい、八幡地区でもよく見られる飾りである。現在は大判の紙を折って胴・袖・襟・帯などをそれぞれ作り、張り合わせて作ることが多い。本物の着物をうち掛けるように、そでに棒を通した形を紙飾りの着物でも模して作る例もあった。現在は見られないが、かつては本物の着物を下げることもあったという。

#### ・投網

「七夕7つ飾り」の一つである投網は八幡地区でもよく見られる、折った紙にいくつも切れ目を入れて、広げた際に網目になるよう細工した飾りである。ある商店の話者は魚がよく採れるように投網を作るのでないかとしながらも、魚を採る生活はしない。しかし昔から作ってきたので今も投網を七夕飾りとして作るのだと語る。

投網の細工は切れ目を入れるのが難しく、八幡町商店会の配るパンフレットを参考に作るところが多い。これをもとに、色紙を使ったり切れ目の入れ方を工夫するなどして飾りを鮮やかにするものが多く見られた。

#### ・扇籠

「七夕7つ飾り」の一つである扇籠は、上記の投網を上下逆さにした飾りである。投網は紙の四辺が下にくるよう吊るが、扇籠はこの端部分を上にしてまとめ、袋状に吊る。この中に七夕飾りの製作中に出た紙くずを入れるのだが、紙くずでなく色紙で作った花をいれた扇籠も多く見られた。整理整頓が出来るようお願いを込めた飾りだといい、八幡地区でも昔からよく作られた。

#### ・看板やキャラクターもの

先述のように七夕を飾るのは商店に多いが、焼き鳥屋は焼き鳥の飾りを作るというように、その店の商売の看板となる飾りも見られる。戦前から八百屋はスイカ、履物屋は下駄というようにその商店らしさが一目でわかる、厚紙などで作る飾りはよく見られたという。また各種の飾りをその店のチラシで作ったり、庄司味噌店のように自社製品のパッケージで吹流しを作ることもよく見られる。

地区内の病院や薬局などでは施設のイメージキャラクターを持っている場合があり、これを七夕飾りで作る例もある。こういったキャラクターものの飾りは、施設や店舗と関連がなくとも有名な漫画キャラクターを模して下げる例が多く見られた。

#### ・装飾

ここまで述べてきた各種の飾りには、より華やかにするため種々の装飾の工夫が見られる。最もよく見られるのは、花と呼ばれる紙製の造花である。花は薄い色紙を数枚重ねたままジャバラに細長く折

り、中心を留めて両端を一枚ずつ開いて花のようにする飾りである。色とりどりの花でくす玉の芯を覆うのははじめ、小さく作った花を吹流しの垂らした紙部分に貼り付けたり、短冊などの装飾に貼り付けることも見受けられた。

折鶴も東ねたり大きなものを単品で飾るほかに、装飾として各種の飾りに貼り付ける例がよく見られた。折鶴以外にもヤッコサンなど折り紙細工は装飾としてよく用いられる。

また、星型に切り抜いた色紙も装飾としてよく見られるものである。装飾に貼り付けるほか、厚手の紙で大きく作ったものを吊るしたり、星型を重ね貼って長く連ねるなどした飾りもあった。

#### 七夕飾りの準備

七夕の飾りは基本的には各商店・各家庭がそれぞれに製作する。製作には主に主婦や子どもがあたることが多いとされる。飾り作りに込めた願いも、字が上手くなるよう朝露で墨をすることや、針仕事が上手くなるよう作る着物など家の女性や子どもと関連して語られることが多い。商店の場合は家族皆が店で従業員していることが多く、商売の合間に数週間かけて準備するとの店が多かったが、中には数ヶ月前から少しずつ準備する店、従業員総出で作る店もあるなど様々である。

また八幡町分の国道48号線の長さの割に、自主的に七夕を飾っている店はさほど多くないため、以前の七夕期間は七夕がまっまつと散見される程度であった。このため八幡町商店会では七夕がある程度密集するよう間が空いてしまいうえに、七夕作を重点的に、七夕作を作ってもらうこと、あるいは八幡地区を学区とする八幡小学校・聖ドミニコ小学校の児童が作る七夕を店先に飾ってくれるよう声がけしている。2008年は八幡小学校で8月4日に八幡地区社会福祉協議会の主催で七夕作りをし、翌日に八幡町商店会が回収して通りに飾った。

#### 竹の使い方

上に述べた各種の飾りは、広瀬川の河原に自生する竹を採ってきたり、知り合いから譲ってもらうなどして入手した竹に下げて飾る。ただし八幡町商店会の後援する七夕に参加する商店に関しては、平成18年以降は配布された竹を用いている。8月6日の夕方頃より、準備していた飾りを竹に吊り下げて軒先・玄関先などに飾る。民家の場合玄関先や門に貼り付けたり、ごく小さな竹の枝に吊るして軒先に刺すなどして飾る。商店の場合は、いくつかの竹の飾り方が見られた。竹を立てて飾る場合、歩道のガードレールに貼り付ける例、普段は店ののぼりを立てている台に刺して飾る例、店舗脇の壁に竹を括って徳先を歩道に渡す例などがある。飾りが大型で縦型に出来ない商店では、店舗軒先に竹を横に渡す場合もある。ある商店の話者は、大きなくす玉の飾りを作ったところ竹がたわんで上手く飾れず、毎年竹の取り付け方を試行錯誤しているという。

8月8日夕方あるいは9日朝にこれを下げ、昔は広瀬川に竹ごと流した。しかし後に川へ流すことが禁止され、ゴミとして処分するようになった。七夕が終わると盆である。13日には道端で各家が盆火を焚き、この火で子どもらは花火をしたりトウモロコシ・芋などを焼いて楽しんだ。「お盆のものと七夕のものはゴミに捨てるな」との言い方があったといい、ある話者はこれら七夕や盆の飾りをゴミとして捨てるようになり申し訳ない気分であるという。関連するかは不明であるが、広瀬川にかかる牛越橋の根元には7月から8月の期間に川へものを投棄することを禁じる旨の標識が立てられている。

#### 七夕を飾る商店の一例

ここでは八幡地区の七夕の一例として、ある商店の七夕への取り組みを紹介する。この店は八幡町商店会に加入する国道48号線沿いの呉服屋で、仙台七夕まつり協賛会の授与する個人賞金賞の常連である。

家族経営のこの店では、姑・嫁・娘と家の女性3代にわたって一緒に七夕飾りを作っている。姑が嫁入りしてきた頃はまだまだ通りに市電が通っていたというが、今のように華やかでなかったものの当時から七夕を作っていた。その頃の七夕は色紙を使った飾りも作ったが、現在のような大きな飾りはなかったという。毎年必ずではないものの、長年七夕を作り続けてきた。昭和30年頃までは質素な飾りであっ

だが、その後段々と飾りも華やかになっていった。七夕を作らない年には、町内の子供会が作ったものを飾るよう店先を貸した時期もあった。平成に入ってからでは毎年欠かさず七夕を作っている。

息子に嫁をとってからは嫁も、また孫も小学生頃から一緒に七夕を作るのを手伝うようになった。現在、七夕飾りのデザインは孫娘を中心に、皆で意見を出し合って作る。前年とは色使いなどが重ならないよう注意しながらより華やかな飾りになるよう工夫を凝らしている。例えば装飾に使う花は、孫娘のアイデアにより、色紙をジヤバラに折った際に紙の両端にはさみを入れて花が開いた時に花びらがより本物の花らしく見えるようにしている。

毎年七夕が終わると、すぐに翌年の七夕の飾りつけの構想に入る。折鶴など数が大量に必要なものも翌年に向けて、商売の合間を見ながらこつこつと作り始める。大きな飾りは6月頃から作り始める。2008年の七夕飾りはくす玉を用いなかったが、一番丁で買ってきた竹細工の芯を保管しており、年によってはこれを使う。また吹流し用の軸も購入してあるが、これも竹の芯を平たく裂いて円状に加工したものである。軸は大小二つを組み合わせて針金で固定し、これから垂らす吹流しが二重になるよう作っている。製作途中の飾りは、店舗内で吊るして保管する。特に吹流しなどは、置いておくと自重で折れ目がついてしまうからである。

2008年度は「七夕7つ飾り」の7種を飾った。吹流しは二つ飾り、立方体から円状の軸を吊るして飾りを垂らしたものである。折鶴は吹流しと同様にして垂れ紙の部分を千羽鶴にしたものを一つ飾った。この吹流しと折鶴はいずれも全長2メートルを超える大きなもので、七夕・祭の3字を一つずつ割り振って飾り最上部の立方体にレイアウトした。軸からは筒状に金網を巻いて側面を大きく取り、ここに花を装飾している。七夕が近くなると、最近近所に住む姑の友人二人が駆けつけて一緒に折鶴作りなどを手伝う。ほかに巾着・着物・投網・肩籠をいずれも大型に作り、七夕7つ飾りの由来書きのボードも自作して下げた。店の客に書いてもらった短冊も吊るして、飾りの重さが相当なものになっているため、八幡町商店会の配布する竹を店舗の軒下へ横に渡して吊った。やるからには賞を買いたいとの思いから毎年時間をかけて七夕を作っているが、手間をかけるほど金もかかる。姑である話者は「金はかかっても、七夕は八幡町が賑わういいものだ」と語る。

#### 七夕見物

八幡地区に住む人々にとっては、国道48号線沿いの店々が飾っている七夕や各町内会で飾る七夕、大崎八幡神社に飾られる七夕などは意識して七夕見物に出向くものではないようである。調査の限りではこれらが飾られていること自体知らずにいた話者も多く、「七夕とは仙台の中心部に見に行くものだ」と語る話者もいる。七夕見物について行った先としてよく聞かれたのは一番丁・大町で、大掛かりで絢爛な仙台中心部の七夕を家族で見に行くとの話はよく聞かれる。

七夕を飾る商家に多いことだが、一番丁など仙台中心部で見物した飾りつけの仕方を真似て自宅の七夕に取り入れることもしている。現在「七夕7つ飾り」の一つに数えられているくす玉も、仙台中心部で盛んに飾るようになって以降八幡地区でも定番の飾りとなったとされる。また現在はほとんど飾られていないが、かつては木町の七夕がとて綺麗であったとされ、一番丁から木町を通って帰ってくる見物ルートをとったとの話がよく聞かれた。七夕頃は土用過ぎで川・海でおよくことを諫められるため子どもにとって大きな楽しみであったといい、また夏休みの宿題である絵日記の格好のたねにもなったという。



八幡町の七夕①



## (2) 八幡町商店会の七夕

### 仙台七夕まつり参加の経緯

八幡地区の七夕は、基本的には家々が自主的に七夕を作り、軒先や店先に飾るものである。仙台中心部の七夕祭りが賑わいだ戦後、八幡地区でも昭和20年代後半から30年頃にかけて、特に国道48号線沿いにおいて、それまで以上に七夕をする店が増えた。しかし昭和40年頃からマンション・アパートの類が通りにも建ちはじめ、しだいに七夕を毎年飾る店も減った。その後一時期、町内会によっては子供会で七夕をいくつか作り、通り沿いの店先に飾らせてもらうこともあったが、通り沿いの店においても基本的には先に述べたように七夕はその店の自主的な製作によるものだった。

平成18年(2006)より、八幡町商店会が組合に加入する商店を中心に七夕を飾ることの呼びかけを始めた。これまでは七夕を飾る商店は一部で、国道48号線沿いにおいても飾る店が散見するといった状態であったが、これを七夕飾りが通りに連続して並ぶよう通り沿いの商店に七夕への参加を呼びかけた。基本的に商家がそれぞれの店舗に自作した七夕を飾る場合が多いのはそれまでと同じだが、八幡町商店会がこれに各種の支援をする。またこの年より八幡町商店会は仙台七夕まつり協賛会との中継ぎをして助成金を得、仙台七夕まつり協賛会の主催する市内七夕見学ツアーの八幡町分を企画・実行し、七夕をする商店に対し竹の配布・回収を行なうようになった。仙台七夕まつり協賛会が七夕参加地区・団体として認めるには20本以上の竹飾りが立てられる必要がある。八幡町商店会が七夕飾りを作ることを各商店に呼びかけ始めた平成18年には計20本、翌平成19年には計30本の七夕が通りに並んだが、3年目となる平成20年は八幡町商店会非加入の店も含めて48本の七夕が作られた。

八幡町商店会は、平成2年(1990)と平成3年(1991)にも組合に加入する商店に呼びかけて七夕をしたことがあった。これも現在と同様、基本的に各商店が自主的に行っていた七夕が通りになるべく多く並ぶよう呼びかけ、20本を集めて仙台七夕まつり協賛会の七夕参加認定をとったものであったが、この2年のみで20本の竹飾りを下回し、商店会の関与は終了した。このことについては、参加する店が少なかったこともあるが、当時商店会は夏期に盆踊り大会の主催に力を入れていたことも大きいという。八幡地区は、秋に大崎八幡神社例祭、冬に同社のどんと祭で賑わいを見せる。これらの時期はおのずと商店街も客足が増えるといい、八幡町商店会もこれらに参加して盛りたててきた。特に秋の例祭時は、国道48号線の旧八幡町分をどんとロードと呼んで、すずめ踊りのコースとなるなど大きなイベントとなる。近年秋の例祭に合わせたすずめ踊りイベントが盛り上がりを見せており、7・8月は例祭の準備で忙しく七夕をしていられないとの話も聞かれる。一方で八幡町商店会は、平成17年(2005)まで夏には盆踊り大会を開いていた。商店街に活気が出る行事を夏にも欲しいとの思いから続けていたものだというが、近年は盆踊りに参加する人が少なくなっていた。そこで平成17年で盆踊りの企画を終了し、これに代わる夏に出来るかつ賑わうイベントを、と考へて仙台七夕へ参加する案がでた。八幡地区連合町内会が主催の役を担う案もあったが、国道48号線沿いの商店が七夕が飾られる中心となることから八幡町商店会が実行することとなった。またこの七夕の時期に合わせて商店



八幡町の七夕②



八幡町の七夕③

街の七夕大売り出しも開催している。八幡町商店会役員で七夕企画を担当している話者は「七夕祭りをしてはそれぞれお客さんが即増えるというわけではないが、少しでも町が賑やかにできれば」と語っている。

#### 八幡町商店会の七夕企画

八幡町商店会による七夕の準備は、例年5月末から6月をはじめ開く役員会より始まる。八幡町商店会が仙台七夕まつり協賛会の支援のもとに七夕をするようになって以降、仙台七夕まつり協賛会の主催による仙台七夕見学ツアーを八幡地区に受け入れるようになった。その企画を仙台七夕まつり協賛会に提出する期限が6月中であるためである。また商店会会員は多くが店主として従業しているため、寄り合いの機会もそう多くは取れず、さらに近年はチェーン型の店が当地にも多く出店しており、そこにも声を掛ける場合はチェーン店とその本部との協議をさせるのに期間が要することも、七夕の準備開始を5月末から6月をはじめという早い時期より行なう理由となっている。八幡町商店会は専任の七夕企画実行担当者を役員として一人割り当てており、この担当者を中心に八幡町への仙台七夕見学ツアーの企画および国道48号線沿いの七夕を増やすため各商店へ七夕を飾ることの呼びかけを行なう。また路上に七夕を設置するため、行政との交渉もこの頃から必要である。



八幡小学校での七夕作り

2008年には、八幡小学校で8月4日に「七夕かざりをつくろう」と称したイベントを開催した。これは八幡地区児童福祉協議会が主催するもので、早朝に青葉区柏木の林宅寺に向かって竹を買い受け、午前中に八幡小学校体育館に地区内の住人やPTAが集まって小学生・近所の保育園の園児らとともに2本の七夕かざりをつくり、体育館脇に飾る。7つ飾りを作るが、巾着など製作が難しいものは使いまわして、子どもには短冊や切り紙を重ね貼って長く連ねた飾りなどを作らせる。また八幡小学校と聖ドミニコ小学校では、各学年とクラスに割り当てて竹飾りを作っており、八幡町商店会が手配して回収後、これらを商店街沿いの協力店に飾る。七夕を自作しないながらも小学校製作の七夕を飾っている店のある話者は、小学生が自分の作った飾りを期間中に見に来るのが楽しみであるという。

#### 竹の配布と設置、回収

国道48号線沿いの商店に関しては、現在は八幡町商店会が七夕用の竹を配布している。知り合いのつてから青葉区柏木の林宅寺より竹を買い受けた竹で、八幡小学校の七夕づくりに提供する竹もこれである。8月4日朝に伐採に向かい、午後に配布して各商店がこれを受け取る。例年正午頃に配布しているが、2008年は諸事情で17時より町内のレンタカー店が提供したトラックに二人と、バイク一人で各商店を回り一時間半ほどかけて配布し、この担当者らによって設置された。この4日には八幡小学校・聖ドミニコ小学校が製作した七夕も回収し、八幡町商店会が協力を頼んでいた店の店舗前に設置する。2008年は20本の七夕が小学校による製作であった。配布された竹は、8月6日まで各商店の店舗内に保管され、8月6日の早朝に、それぞれの商店が設置する。それまでの間に商店はそれぞれ作っておいた飾りを取り付け、仕事の合間に終わらせてしまう店が多いもの、中には閉店後に飾り付けをおこなう店もあった。竹は歩道のガードレールや電柱に縄で二か所ほど固定し、なるべく道路にはみ出さないように設置する。また店舗自体に取り付ける店も多い。これらは七夕を下げる8日まで外へ出して飾ったままにしておく。

七夕期間が終わる8月8日の午後には竹飾りの回収が始まる。2008年は回収担当にあっている商店会の3人が午後3時に通りのレンタカー店に集まり、配布時と同様にトラックとバイクで各商店へ回収にまわった。バイクに乗った担当者が先回りしてナタで竹を短くし、その後トラックの二人がそ

れを回収していく。各商店にはこの頃までに飾りを外すよう通達済みである。外した飾りは捨てられることが多いが、大掛かりな飾りは取っておく店も多い。回収された竹は八幡町から、牛越橋をこえた三居沢地区の公園に運ばれる。回収には2往復して2時間ほどかかった。

公園に運ばれた竹は8月9日の早朝に八幡町商店会の手配したごみ収集車によって回収される。回収には商店会の担当者が一人立ち会い、2008年は15分程度で終了した。

#### 七夕期間中の諸イベント

八幡町商店会が企画し、仙台七夕まつり協賛会より受け入れる仙台七夕見学ツアーでは、大崎八幡宮の見学、商店街散策、地区内の資料館「八幡社の館」でのすずめ踊り見学が毎年のコースである。ツアーの参加者は徒歩で歩きながら、受賞七夕を中心に八幡町の七夕や施設を見学し、お土産に町内の味噌屋である庄司味噌屋よりめんつゆが配られた。八幡社の館は、かつて国道沿いにあった天賞酒造の店舗を、同店の転出に伴い移築して資料館にしたものである。館内にはすずめ踊りに関する資料が展示され、八幡小学校区の有志によって組織される八幡地区まちづくり協議会メンバーが運営委員となっている。ツアー参加者は展示を見学するとともに、同館ですずめ踊りの体験イベントにも参加する。2008年のツアーには35名が参加し、県内を中心に遠くは京都からの参加者もあった。

また大崎八幡神社では7月中旬より境内に七夕飾りが設置され、参拝者が願い事を書いた短冊を吊るせるようにしている。近年始められたことだが、大崎八幡神社では8月8日に七夕祈願祭を開いて、短冊を神前に供えて成就を祈願する神事を行なう。2008年の場合、8日の16:00より当社の神職が境内にて神事を行い、参拝者の短冊へ祈禱をした。しかし当社が七夕祈願祭を始めたことはまだあまり地区内に知られておらず、2008年においてはこの時間に参拝者はなかった。短冊を飾った参拝者には郵送で祈願成就の神札が配られる。



大崎八幡神社の七夕祈願祭

### (3) 町内会ごとの七夕

八幡地区の各町の中には、集まって七夕飾りを作る町内会もある。町内会ごとに組織される子供会が主体になることが多く、集会所に飾る例や町内の神社などに飾る例があるが、集会所を持たず、普段から寄り合いは誰かの自宅や公共施設を利用する町内会も多い。その場合は集まって小さな七夕をそれぞれが作り、持ち帰って自宅に飾ることが多いようである。これら町内会ごとの七夕作りについても報告する。

#### 角五郎丁北部親交会

八幡地区の広瀬川に接するあたりを角五郎という。もとは特に川に近い南側は家が少なかったが、後に家が増えたため角五郎を二つに分けて、町内会も角五郎丁北部親交会・角五郎丁南部町内会の二つに分けた。このうち角五郎北部親交会の範囲に縛り不動尊の社があり「お縛り不動さん」と呼ばれて親しまれている。7年前より「各家で七夕を作るものだったのを代表して」として、住人たちによって七



角五郎縛り不動尊の七夕

夕が飾られている。町内の婦人会・老人会・子供会が分担して、角五郎にある下水処理ポンプ工場内の一室を作業場に借りて、土日などに集まって短冊・折鶴・籠・着物・ワッカなどの飾りを手作りする。たくさんの飾りがいるため、これら会の割り当て以外にも町内各家に「折鶴60個」などと飾り作りを割り当てている。出来た飾りは2本の竹に下げて8月5日より縛り不動尊の社に飾り、8日に片付ける。飾りは処分するが、竹は枝を払って馴れ取しておく。9月第三日曜には縛り不動尊の祭りが開かれ、町内の器用な人が自作した神輿を渡御させ、たくさんの絵行灯を飾る。このとき絵行灯の中へ入れる蠟燭の台を作るのに取っておいた七夕の竹を利用する。また年寄りか竹とんぼなどの竹製玩具も作り、祭りに来る子どもに配る。かつて社に対し「子ども達に使ってくれ」と多額の寄付をした人が町内にあり、これを基金にして絵行灯を子どもに作らせるようにしたり、子ども用のほっぴなど備品や神輿の修繕費に充てている。先に縛り不動尊の七夕飾りを「各家の七夕を代表して」と述べたが、家でもこれと別に作る人はあり、ある女性の話者は飾り作りが好きなことから町内に建つドミニコ小学校に飾る七夕飾り作りを手伝っている。

#### 北五十人町町友会

戦後しばらくした頃から、子供会で七夕を作り集会所に飾っている。8月6日から10日頃まで飾る。北五十人町は下宿学生が多かった町だが、今は疎遠になったもののかつては学生らが子供会を手伝っていた。子どもらを引率して川で水泳ぎをさせるなど遊び相手になっていたといい、七夕作りも手伝いの学生と子供会の間で始まった行事とされるが、現在は子供会のみでこの集会所に飾る七夕を製作している。数年前にはこのほかに「一家に一本七夕を」と町内に呼びかけて各家が七夕を軒先に飾るようにした年があったが、現在は行なわれていない。



北五十人町町内会の七夕

#### 土橋通中部町内会

旧土橋通りのいくつかの商店が自主的に飾っていた七夕を、2002年より旧土橋通1丁目から5丁目の商店街として企画し、通りに七夕を飾った時期があった。2004年には20商店より20本の竹を、2005年には27の商店・団体より30本の竹飾りが並んだが、現在では行なわれていない。開催当時は8月3日頃と早い時期から、各商店がまちまちに飾りはじめていた。竹は商店街より、知り合いのつてから得た竹を配布していた。

#### 大崎西部親交会

30年ほど前まではどこかの家を会場に子供会の集まりをもって、自宅に持ち帰って飾るための七夕作りをしていた。しかし町内に子どもが少なくなり、子供会の活動自体が無くなってしまい七夕作りもやめた。

## 第4節 宮町の七夕飾り

### 1 調査地の概要

#### (1) 宮町の歴史と現在

##### 宮町の成り立ちと歴史

宮町はもともと小田原村に属していたが、承応3年(1645)に建立された仙台東照宮の門前町として新たに形成された町である。東照宮の場所は玉手崎と呼ばれ、元々は小田原天神社があった。そこを葛西大崎一揆鎮定の際に徳川家康が休息所とした縁から、小田原天神社を移転して家康を祭る東照宮と祭祀を司る別当として仙岳院が建立された。

そうした門前町の家々には、一軒につき500文ずつの御用捨田畑が付けられ無年貢であった。現在の宮町でも「かつてこのあたりは農家が多く、家々には荷車を止める下屋がついていた」という話を聞くことができる。また町家では酒・塩・タバコ以外の店売りについては諸役免除となっており、かわりに東照宮へ境内掃除役などの奉仕義務を負っていた。

宮町は上宮町と下宮町と区別することがあり、北側を上宮町と呼んでいた。そのため「上下宮町」とも呼ばれたが、一般的には「御宮町」「権現町」、また史料によっては「東照権現門前町」などとも呼ばれた。仙台城下の町の序列である町方二十四町では19番目に「上宮町」20番目に「下宮町」がそれぞれ数えられていた。特に東照宮の祭礼である仙台祭りは有名で、藩主在国の年は渡物と呼ばれる山車を出して練り歩くことになっていた。

宮町にはそうした歴史的経緯から、本殿が国の重要文化財指定を受ける東照宮をはじめ歴史ある寺社や文化財が多く、その他には仙台市有形文化財指定を受ける仙岳院や、仙台三回向寺に数えられる清浄光院、足の神様として信仰される淨円房などがある。また、戦災の影響も少なかったため、東六番丁に居住した中級武士住宅の遺構で、建築は江戸時代中期といわれる安藤家住宅などもある。

明治11年(1878)には仙台区、明治22年(1889)には仙台市となり、そこから昭和15年(1940)までは行政区域として宮町区が設けられていた。戦後、行政区域として現在の姿となる。

##### 現在の宮町

現在の宮町は東六番丁小学校から東照宮までの宮町通りが南北に走り、そのほぼ直線の通りを中心として左右に商店街が形成されている。東照宮のある北部の丘陵は森林に囲まれ、その麓には梅田川が東流しており、周辺は仙台中心部に近いながらも、比較的緑の多い自然豊かな地域である。その一方、北部の団地造成によって宮町通りの交通量は増加しており、昭和63年(1988)にはJR仙山線東照宮駅が開通している。現在はスーパーやマンションなども立地し、商店街は昔からの個人商店とコンビニやテナントが並存している。店舗の間には有料駐車場も目立つ。



宮町周辺地図



宮町の街並み

#### (2) 社会組織の概要

宮町は東六番丁小学校から東照宮まで一直線の宮町通りの左右に並ぶ商店で宮町商店振興組合が組

織されている。振興組合は組合長をトップとして青年部や婦人部などがあり、七夕をはじめ、夏祭りや秋祭り、交通安全運動などのイベントを行う。その他、町名にちなんだお宮町せんべいを発売するといった試みもしている。その中でも主に物販の店を対象とするわくわくカード協同組合が組織されており、わくわくカードを作って発行し、加盟店での購入ポイントに応じてサービスをしている。

また南の宮町一丁目から東照宮直前の五丁目までに宮町南部町内会、宮町中部町内会、宮町さつき会といった東六地区連合町内会に含まれる単位町内会が組織されている。

## 2 七夕の準備から片付け

### (1) 七夕の支援と関連組織

七夕は、直接的な支援は宮町商店街振興組合を中心として行われ、そこに仙台商工会議所や仙台七夕まつり協賛会の関与がある。

宮町商店街振興組合では、7月になると組合長名の文書で組合員に七夕参加を呼びかけ、材料費として2000円の助成金とともに、竹の配布や回収を行う。こうした支援があり、全体としては商店街として飾っているという意識が多いが、基本的に参加の判断はそれぞれにまかせられているため、個人商店では参加そのものは組合全体というよりも、組合に入っていない人も含めて個人で七夕を飾っているという意識もみられる。

一方、仙台七夕まつり協賛会では商店に寄附を募り、寄附を出した店には店名入りで「私たちは仙台七夕まつりを応援しています」と書かれた8月のカレンダーが配られる。七夕期間中には、協賛会によって団体賞と個人賞の審査が行われ、金賞、銀賞、銅賞（団体審査の場合は三賞と奨励賞）などが選ばれる。振興組合では努力賞を出している。

仙台商工会議所では、振興組合へ助成金を配布するとともに、青年部が七夕期間中に定禅寺通り行われる星の宵まつりで宮町の東照宮の神輿を担ぎ、宮町からも振興組合の青年部から人が出て「宮町」の法被を着て参加している。

### (2) 飾りの製作

宮町の七夕飾りは平成16年（2004）までは10mほどの大きな竹を使っていたため、飾りの大きさや規模は現在に比べて大きかった。しかし、近隣に視覚支援学校のある関係から歩道の安全を確保するため、飾り付けた竹の脇を通る自転車が目測を誤って竹にぶつかって問題となったことがあり、平成17年（2005）からは5mほどの竹を使用し、それに合わせて飾りも小ぶりになっている。そのため宮町では現在の七夕を「ミニ七夕」と呼んでいる。

#### 材料の調達

飾りの製作には前述の通り材料費として2000円の補助が振興組合から出るが、ほとんどは実費で賄われる。材料は鳴海紙店や、文具のキクチ、商店街にあるイワサキ文具店などで調達する。できるだけ材料費を抑制するため100円均一などを利用する人や、広告紙や包装紙を利用したりするところもある。その一方、必ず全て和紙を使うといったこだわりのあるところもある。現在、そうした材料にこだわりを持つところは少ないが、「ミニ七夕」以



ミニ七夕

前は、わざわざたまねぎや紅茶などを使って自前で和紙を染めていたことがあったという話も聞かれるなど材料からこだわりを持つところも多かったという。

#### 飾りの製作

個人や商店の場合、飾りはおおむね昔から手作りしていたところが多い。かつては振興組合で飾りの申し込みを受け付け、外注することもできたというが、現在では規模が縮小したため、基本的にそれぞれの商店で七夕飾りを製作している。また当時は外注した飾りが自分たちの手作りではないので愛着が湧かず、小雨が降ってもそのままにしていたり、色や形が画一的になったりするためおもしろくなかったという。そのため外注をしても、独自に飾りを付け加えたりしていたところもあった。

製作方法は、七夕飾りの意味などが書かれた仙台七夕まつり協賛会で発行しているパンフレットを振興組合が配布しているため、それを見ながら製作するというところも多い。それに加えて商店によっては伝統的にと理由で、独自に七夕線香などを追加する商店もある。また振興組合でも文書で「長さはくす玉とふき流しで1～1.2m位がめやす」とし、それも参考にされている。

七夕の製作期間は、「ミニ七夕」以前は飾りの規模も大きく、千羽鶴なども数多く折らなければならなかったため、早い人では構想を含め半年前から開始したり、1、2ヵ月前から準備をはじめたというところがあれば、恒例として前日に徹夜で製作したものだという商店まで様々であった。現在の「ミニ七夕」となっただけからは早いところでは1ヵ月前から開始するが、おおむね仕事の合間や閉店後に時間を作って10日くらいかけることが多い。千羽鶴など部品が多く必要な飾りを製作するような場合は、それだけを少しづつ作っておき、大きな飾りは組み立てをまとめて1日や2日で製作してしまうというところもある。完成した飾りは、店内や自宅に下げておく。吹流しなどの長いものは床の間に下げておくというところもある。

#### 飾りの作り手

七夕は宮町商店街振興組合が中心となって呼びかけを行っているため、だいたい組合に加入する店や会社が製作して飾っている。「商店街とは無関係で」と語る店もあるが、個人が民家で飾るのは見受けられない。

作り手は、個人商店の場合、家族や店員総出で製作したり、友人を家に呼んでグループで製作したりと、おおむね家の女性を中心に家族や友人、テナントで入居している店ではお客さんや従業員などいづれの場合も近しい人の協力を得て製作している。お客さんから提供してもらった飾りを飾って、七夕が終了すると返却するというところもある。

ある商店では七夕直前の週末にご当主の奥さんを中心としてその友人達が集まり、お茶を飲んだり、昼食をはさんだりして楽しみながら製作をしている。その際、吹流しに使う折鶴は予め折ってきてもらうことになっているという。

こうした他に、社会組織として宮町商店街振興組合と子ども会が七夕飾りを製作して飾っている。子ども会に関係するところでは北六番丁児童会、北六番丁小学校2年生、東六番丁児童館が参加している。そのうち東六番丁児童館の場合、飾りの製作や短冊への願い事を地域の子ども会や子育て支援クラブなど地域の協力を得て3週間くらいかけて製作し、6日の早朝子どもたちや親が参加して飾りつけをして竹を立てる。

#### 種類と構成

飾りは七飾りが基本とされ、「ミニ七夕」となる以前は吹流しも今に比べて格段に長く、昭和30年



保管中の吹流し。

代（1955～1964）に仕掛け物を出したような商店もあった。

現在でも基本的に仙台七夕まつり協賛会発行のパンフレットを見ながら製作するということが多いため、どの商店でも飾りの種類は「七飾り」といわれるが、その7つはそれぞれの商店によって異なることもある。基本的には短冊、吹流し、扇籠、巾着、紙衣、投網、折鶴といわれるが、折鶴の代わりに七夕線香を飾る店もあり、折鶴と七夕線香が共に飾られ、短冊も飾るものの「七飾り」の七つに含まない場合もある。七夕線香を飾る店では、七夕期間がお盆に近いことから飾られると語るところが多く、先祖供養や先祖を迎える意味あいがあるという。七夕線香は伝統的で珍しいということで「一番町は見せる七夕で、（宮町は）素朴で昔ながらの七夕」と語る人もいる。



七夕線香

その他には飾りが短冊だけという商店もある。短冊に願い事を書くかどうかは店によって異なるが、書いてあるというところは店の客や家族などに書いてもらうことが多い。

その他、紙の巾着ではなく本物の布製の巾着を飾るところや、歯科医院では紙のハブラシやコップ、鮮魚店では紙の魚といった業種と関係する飾りもあった。平成20年（2009）はDC（ディスティネーションキャンペーン）のキャラクターむすび丸、ペガルタ仙台、楽天、北京五輪などスポーツやイベントに関係する飾りもあった。また佐々木酒店では独自に「七夕の由来」という説明を下げている。

### (3) 竹の切り出しと配布

#### 竹の切り出しと運搬

七夕飾りに使用する竹は、宮町商店街振興組合に加盟する商店主の関係で加美郡色麻町の農家から毎年竹を切り出してもらってきている。また、一軒だけ近隣の竹林から自前で調達しているということもある。「ミニ七夕」になる以前は、山から切り出したままの10メートルほどの竹をそのままトラックに積んできたが、現在は5mほどに裁断してから運搬している。その際、枯れた竹や曲がった竹などが混ざる為、好みに合わせて竹を選んでもらうように多めに伐採している。

#### 竹の配布

竹は社の都信用金庫や七十七銀行の駐車場など4ヶ所に10本から15本ずつくらい置かれ、だいたい商店街の役員が運んでくれるが、その際にはたくさんある竹の中から自由に選ぶことはできない。一方、各商店から指定場所に向いて竹を受け取って運んでいく場合は竹の長さや下枝の量、曲がり具合などをそれぞれ製作した飾りの長さなどに合わせて選ぶことができるため、竹にこだわりたい商店では人を出して運んで運んでいくという。運んでいった竹は、それぞれの商店で下枝を払うなど飾りに合わせて整形しておく。

### (4) 飾りつけ作業と維持

#### 竹の設置と飾りつけ

平成16年（2005）までは、歩道から車道にかかるほど大きなものだったため、4人がかりで竹を担ぎ上げ、通行する車を止めながら竹を立てたり、飾りは滑車を利用して上げたりと大変な労力だった。「ミニ七夕」となってからは歩道に少しかかる程度になり、竹は2人ぐらい、もしくは男手だ場合によっては1人でも竹を立てることができるので楽になったという。



飾り付け風景



「ミニ七夕」となった理由としては歩行者や自転車の安全へ配慮するためといい、竹が小ぶりになったのも衝突した場合でも安全を確保するためだという。そうした「ミニ七夕」となった要因に関連して、竹の曲がりを店舗と平行になる様に気をつけて設置するなど、歩行者を意識しながら飾りつけを行っているところも多い。

振興組合から配布された竹には予め短冊などの飾りを取り付けておき、8月6日の早朝、宮町商店街の街路整備に際して設置された竹を立てるための穴に挿しこみ、払っておい下枝を穴に詰めておく。こうすることで、見栄えがよくなるとともに歩行者へ注意喚起をする意味合いがあるのだという。街路整備以前は、電柱や塀に竹を括り付けていた。

飾りの付け方は店によって異なるが、おおむね「長いものは高いところへ」「見栄えがよくなるように」「歩行者の邪魔にならないように」と飾りの長さや大きさなどのバランスに配慮して飾りつけられ、その順序は「決まりがあるらしい」という認識はあるが、特別それに準じることはなく、それを知っている人も少ない。

#### 七夕期間中の管理

七夕飾りは期間中、基本的にはそのままにしておくが、七夕飾りが雨に弱いため急な雨には注意が払われている。雨天時には必ず取り込むという店がある一方、小雨程度の場合、もしくは普通に雨が降ってもそのままにしておくところも見受けられた。その理由としては、全て和紙で飾りを作っているので水に強いからといったものや、上げ下げが大変というものもある。

「ミニ七夕」以前は、雨が降ると店の従業員総出で竹ごと下ろして取り込んだり、すぐに下ろせるように滑車を使って飾りをつけたりしていた。昭和40年（1965）頃には一度だけ、はじめからくす玉にビニールをかけて飾ったが、見栄えが悪く不評だったので次の年からはそのまま飾りになったという。

また、最近では放火や損壊など防犯上の理由から閉店後、夜中は取り込んでおいて翌朝また出すという商店もあり、そうした観点から、はじめからシャッターの内側に飾るようにしているところもある。「ミニ七夕」以前の飾りは、車道にまで飾りが出ているため、トラックやバスに飾りが引っかけり破損することが多かったという。現在は車道に出ることが無いので、そうした問題は少なくなった。

### (5) 撤去と処分

#### 飾りの撤去と回収

飾りの撤去は8月8日のだいたい17時過ぎからそれぞれの商店で竹を下ろして飾りを取り外していく。飾りは来年に再利用したり、知人や関係するところへ贈ったりするところは保管しておくが、それ以外のところでは普通ゴミとして処分する。来年の参考のため残しておくところもある。回収は杜の都信用金庫、北四番丁角、七十七銀行向かいの駐車場の3ヶ所が指定場所となり、18時から振興組合の役員が二手に分かれて北六番丁と東六番丁からそれぞれ中心に向けて竹を回収していく。商店によっては予め竹を截断して持参するところもあるが、基本的には振興組合の役員らがそれぞれの指定場所でのこぎりやハサミなどを利用して竹を30～40cmに截断し、数本分の竹を一束にしてビニールヒモで束ねておく。下枝も同じようにして束ね、普通ゴミの回収場所に積んで作業は終了する。その後、振興組合事務所まで打ち上げが行われて解散する。

#### 竹と飾りの処分

振興組合で回収した飾りや竹などは、翌日仙台市清掃局が回収する。当日は普通の回収日と異なり、回収時間が早まるため、早朝6時までにゴミを出すよう予め広報や町内会の掲示板で呼びかけがなされる。「ミニ七夕」以前の竹については物干し竿やお盆の花竹に再利用したということもあったが、現在は盆棚の飾りに使う人がいる程度で、ほとんどは振興組合で回収している。たいていくす玉は中

の竹製の枠だけを残して飾りは全て外し、普通ゴミとして処分をする。また、飾りはそのまま知人や障害者施設へ贈ったりするという商店もあった。商店街として山形県東根市商店街の青年会に送ったこともあったという。

### 3 七夕の変遷と行事

#### (1) 七夕の変遷

##### 戦前から戦後の七夕

戦前の七夕は、主に商店が自主的に七夕を飾るだけで、商店街として七夕飾りを並べるようなことや、家庭で飾るようなことはなかったという。また、紙が豊富になかったためほとんど短冊ばかりで吹流しなどを飾ることは少なく、そのため新常盤町にあった遊郭で飾られる七夕が珍しい上に大変きれいで、わざわざ見物に出かけたものだったという話も聞かれる。遊郭には、その境となる大門があり、その内側は七夕期間になると一変してびっしりと飾りが飾られたという。

当時を知る人は、昭和12年(1937)頃の宮町では軒先に数軒飾る程度だったと語る人がいる一方で、東照宮にかけての宮町通りは戦前まで七夕が盛んで、知り合いや親戚を宮町に誘うほどだったと語る人もいる。また町の中央にも七夕見物にでかけ、宮町の人たちは名掛丁から一番町というのが見物の定番コースだったという。

ある商家では、雇っていた番頭や女中と家族など皆で七夕の5、6日前から飾りを作っていた。子どもは鶴折りなどを手伝い、他には短冊、扇骨や紙の着物などがあつた。七夕の1週間前ぐらい前になると「タケようがすか」と竹売りが宮町に来ていた。早いところでは6日の朝6時ぐらいには飾りつけ、8日薄暗くなると飾りを下ろし、飾りや竹は使用人が川へ七夕を流しに行っていた。

しかし、太平洋戦争が始まると七夕をしているところではなく七夕は途絶えた。また戦争を挟んで七夕やお盆に行われていた盆踊りが地味になったという。戦後に再び復活した七夕は「一番町がしているからこっちも」という意識だったという話も聞かれる。その後、しだいに七夕を飾る軒数が増えていき、商店街規模で飾るようになった。

##### 昭和30年代(1955~1964)以降の七夕

宮町商店街の多くの人が語るのは、このころが七夕の最盛期で華やかだったということである。1.5kmの商店街に80本ほどの竹が並び、当時はまだ街路整備も行われておらず、道幅が現在より狭かったため竹飾りが両側から重なり合って七夕のトンネルのようになってきれいだつたという。仕掛け物が出されたものこの頃で、吹流しも2m50cmぐらいの長さがあつたという。その頃の七夕を「一番町に追いつけ追い越せ」だったと語る人もいる。

昭和40年代(1965~1974)になると鶴ヶ谷、旭ヶ丘、南光台などの団地が造成され、宮町の交通量が増加した。そのため自動車による七夕の破損が目立つようになり、雨が降ってもそのままにしておいた七夕の濡れた紙が、トラックのコンテナ部分に張り付いて竹ごと倒れたりするなど問題がはじめた。そして昭和50年代(1975~1984)には街路整備で道路が拡幅され、それまでのように両側の七夕が重なり合うことがなくなり、見栄えがしなくなった。

そうした影響や、商店主の高齢化や後継者不足などから年々七夕の参加は減少したという。昭和60年代(1985~1988)から平成7、8年(1995、1996)頃までは七夕に合わせて「夏祭り」と称し、宮町通りを通行止めにして歩行者天国にして東照宮の神輿を担いだり、露天を並べたり、夜には東照宮で夜店も行われていたという。また音楽通りと称して小学校のマーチングバンドや太鼓などを演奏したこともあつた。しかし、こうしたイベントは車道の通行止めに対する周辺住民の理解が得にくくなり、中止となった。この歩行者天国で出されていた神輿は現在、星の宵祭りで担がれている。平成19

年（2009）までは七夕バスツアーのコースにもなっていた。

#### 現在

現在では、年々七夕に参加する商店が減少しているが、新規開店などで今年からはじめたところが3軒ある。平成17年（2006）からは竹に歩行者や自転車が衝突して問題化したことをうけて七夕飾りもこれまでのものと比べて小さくなっている。それでも平成20年（2009）に参加している全ての商店では、今後も続けたいとの意見であった。その理由は、これまで七夕を飾っていたから今後も継続したいというものが多く、中には、義務感で飾っているというところもあった。

既に七夕を止めた商店では高齢化で飾りの製作や竹の上げ下げができなくなってしまうところが多く、後継者問題なども多く語られた。また、毎年七夕飾りを一度だけ飾ってゴミとして捨てられるのはもったいないなどの意見や、七夕の材料費の負担が大きいことなどを問題にあげるところもあった。



宮町の七夕飾り

## (2) 七夕期間中のイベント

### 商店街振興組合の活動

商店街の企画で青年部に所属しているお店の店先で麦茶を無料配布することになっており、短冊に願い事を書いてもらうコーナーが設けられる。

また、星の宵まつりに東照宮の神輿が出るため、仙台商工会議所青年部の声かけで集まった荒町・原町・宮町・長町の各商店街の青年部と伊達幹典連などが神輿を担ぐ。16時に仙台商工会議所に集合して、18時頃から神輿を担いで定禅寺通りを練り歩き、およそ一周して20分ほどで終了する。その後、三本締めで締め、直会となる。



星の宵まつりで担がれる東照宮の神輿

### 七夕審査

仙台七夕まつり協賛会による七夕審査が行われ、審査員や振興組合の役員などが七夕を見て周り、審査をする。平成20年（2009）の宮町商店街振興組合では、団体審査第3地区Aで奨励賞を、個人賞では金賞を（資）佐々木酒店、銀賞を佛阿部幸商店、宮町子供会、銅賞を佑メルヘン菓子店、新田輪業商会、鈴恵味噌醤油醸造株が受賞した。宮町商店街振興組合でも個人賞として努力賞を出しており、平成20年はきぼう園などが受賞した。

### 各商店

商店街として「七夕セール」のようなことをすることはなかったが、店によっては、期間的にお中元時期と重なるのでお中元セールは行われていたというところもある。また平成19年（2008）まではわくわくポイントカード加盟店ではポイントが3倍になるセールを行っていた。

それ以外で七夕に関連したセールは基本的には独自に行われており、かつて独自にくじびきで花の鉢植えなどを景品につけたり、現在でも「七夕セール」の看板をショーケースに掲げたり、期間限定で商品を販売するなどが見受けられる。また病院では患者さんを対象とする七夕パーティなどの企画があるところもあるという。

### (3) 各家庭での行事

#### 七夕流し

宮町での七夕流しについては、戦前にはお盆に使ったものや七夕飾りは燃やしてはいけないものという意識があり、どこの川かは不明だが家で雇っている使用人が川へ流しに依っていたという話が聞かれた。

しかし、仙岳院の南側を東流している梅田川の近辺に住む人は、お盆の灯笼流しは行われていたが、七夕流しをするようなことはなかったとも語る。また多くの人が水量や川幅のある広瀬川と違い、水量も少なく川幅も狭い梅田川では無理であったろうとの認識であった。しかしながら、そこでもお盆の供物を蓮の葉に包んで流すことは行われていたという話が聞かれた。

#### その他の行事

多くの人が、七夕期間中に何か特別なものを食べたり、行事を行ったりといったこと今も昔もはなかったと語る。ごく一部で昔は七夕の時トモロコシやスイカを食べて見物していたといった話や、特別に必ずソーメン（温・冷両方）を食べるといった話が聞かれたが、その意味については分からなかった。また朝露で墨をすって字を書くと上達するといわれていたという話を聞くことができたが、実際に行った人はいなかった。

## 第5節 原町の七夕飾り

### 1 調査地の概要

#### (1) 原町の歴史と人びとのくらし

##### 原町の歴史

原町は仙台市宮城野区に属する町で、榴ヶ岡の北東、苦竹の西に位置する。ここは藩政期に仙台北城下と塩竈方面を結ぶ交通の要衝であった塩竈街道の起点となったところで、仙台北城下東端の関門として宿場が置かれていた。農家が多く米の商売も盛んで、周辺には田園が広がり、昭和中期まで遠く多賀城の地を望むことができたという。また蒲生から運ばれてきた物資を運ぶ馬車が往来し、農家を相手にした桶屋、馬具屋、鍛冶屋も多かった。他にもさまざまな店が通りに立ち並び、商人の中には農家の敷地を借りて店をかまえるものもあった。

原町が町として誕生するのは1889年（明治22）の町村制施行によって南目村と苦竹村、小田原、仙台北区北六番丁の一部が合併してできたことによる。当時は宮城郡原町で、宮城郡2町12ヵ村を治める郡役所もここに存在していた。その後1926（大正15）の郡制の廃止によって、原町は1928年（昭和3）に仙台市と合併し仙台市宮城野区原町となる。現在郡役所があった場所は駐車場となっているが、当時ゆかりの松を見ることが出来る。



原町周辺地図

##### 現在の原町

現在行政上の区分でいうところの原町は、原町本通りと呼ばれる旧街道周辺に分布する1丁目から6丁目までを指し、1962（昭和37）に施行された住居表示に関する法律に基づいてその範囲が縮小する以前はもっと広がった。現在の区分での世帯数は2911世帯で、人口が5764人（『町名別人口統計資料—平成17年国勢調査結果—』仙台市2008）となる。

これよりさらに広い範囲で原町小学校の学区を範囲とした12の単位町内会からなる原町地区連合町内会が分布し、この範囲で見た場合の世帯数が7721世帯、人口が14509人（『仙台市統計書平成19年版』仙台市2008）となる。なおJR仙石線陸前原ノ町駅の「原ノ町」と「原町」が区別されるのは、1925年（大正14）の開業当初「原町駅」として宮城郡原町に属していた駅が現在では宮城野区五輪に属していることによる。

原町地区連合町内会は、原町本通りに面している原町一丁目町内会、原町二丁目福祉会、原町苦竹第一厚生会、原町苦竹第二親交会、原町苦竹第三協和会、原町坂下町内会の6つの町内会と、JR東北本線以南にある清水沼町内会、原町北三会、原町松原町内会、原町東大通町内会の4つの町内会、また国道45号以南の五輪町内会と東に広がる苦竹町内会からなる。本稿で記述する七夕などの商店街の行事に関わってくるのは主として本通り沿いの商店などであり、そのほかに周辺町内会の子ども会なども参加する。

##### 農家のくらし

現在交通網の発達とともに宅地化が進んでいる原町であるが、昔は農家が多く暮らす町であった。原町の農家は5、6軒を一つのまとまりとしてケイヤク（契約）を組み、農繁期の互助をはじめ農閑期のシバカリなどの作業も共同で行っていた。山は近くに山を持たないため、泉のほうの農家の雑木林を買い受け、その木を切って一年分の燃料とした。

大体輪刈りの終わる10月頃にケイヤク2、3人で山を探して回り、山主となる農家が見つかるとその農家の作業場を借りて一ヶ月ほど自炊をしながら共同で木を切り出す。こうして切り出した木は薪

にして、枝などは東にして原町まで運び出す。

昔は馬車を利用して薪を運搬したため一日一往復しかできなかったというが、その後大正末から昭和初期にかけて仙台の通町と中新田を結ぶ軽便鉄道が開通し、これを利用して近くの駅まで薪を運搬したあと、そこから原町まで馬車で運搬したという。この軽便鉄道は戦後のキャサリン・アイオン・キティ台風の被害によって復旧が困難となり、1959年(昭和34)に廃止されることになった。

山主はその年によって変わるが、大体2、3年は同じ山主の山を買い受け、山がなくなれば隣の農家の山を紹介してもらった具合に転々としていった。こうした山の売買はとくに幹旋専門の人がいたというわけではなく、農家との付き合いを通して行われていた。中にはこうしたつながりがあって宿となった山主の娘と結婚した人もいる。

シバカリは石油が登場してからは行われなくなり、現在山主の家とのつながりはなくなっているという。また日清・日露戦争をはじめとする度重なる戦争や、国道45号の敷設、また市電の開発などによって農家の土地は買い上げとなり、交通の時代が進むとともに原町の農家は少なくなっていった。ただしケイヤクの付き合いは今も続けられており、冠婚葬祭はもちろん普段からつながりが多いという。

## (2) 商店街の歴史

### 原町商工振興会

原町の商店街は原町本通りと呼ばれる長さ1.3~1.4kmの直線の通り沿いに形成される。本通りは原町1丁目から始まり、仙台第三合同庁舎向かいの国道45号からの分岐点がその入り口に当たる。

この商店街は昔は原町商工振興会と呼ばれる一つの商工会によって成り立ち、七夕などの行事もこの商工会が主体となって行われていた。

### 商工会の分裂

原町商工振興会は、その商店街の長さゆえに加入店数が多すぎて管理が難しい、また全体として一体感がないなどといった理由から、その後二つの商工会に分かれることになる。今年(2008年現在)は分かれてからちょうど40周年に当たるというので、分裂したのは1968年(昭和43)頃に当たる。

二つに分かれたうちの片方は原町本通商工親睦会として新たに会を発足し、これは原町本通り全体の約3分の1の範囲に当たる。また二つに分かれたうちのもう片方は原町東部商工会として新たに会を発足し、これは原町本通り全体の約3分の2の範囲に当たる。原町東部商工会には青年部もあり、これは七夕の復活の際に結成された。

原町本通り商工親睦会、原町東部商工会とも非商工会加入店を加えればさらに商店の数は多くなるが、発足当時(40年前)に比べればその数は減ってきているという。なお原町本通商工親睦会・原町東部商工会を指す呼び方として、その位置関係から時によって上・下といった呼び方がされることを付け加えておく。

この二つの商工会は商店街の行事の運営などはそれぞれが別個に行っている。ただし4月に行われる春祭りのパレード、また年末の大売出しなどは互いに協力し合い原町本通り全体の行事として行っている。なお春祭りのパレードは今年(2008年現在)で25周年に当たり、昔は4月15日に決まっていたが、20年ほど前から4月の第3日曜日に行われるようになったという。

## 2 原町の七夕

### (1) 原町のかつての七夕

#### 戦前の七夕

原町の戦前の七夕は、その頃幼少期を過ごした話者の話によると、家の子どもたちで作り、子ども会といった単位で作ることはなかったという。それをどこにどういった形で飾ったかなどは詳しくさかのぼることはできなかったが、作った飾りは笹につけたまま竹を残し、朝早い時間帯などに子どもが梅田川に流しに行ったという。そのときはとくに手を合わせたりとか願い事をするとかいうようなことはしなかった。

#### 商工会分裂前の七夕

その後戦中戦後にかけて七夕がどのような展開を見せたのかは分からないが、1968年（昭和43）頃に商工会が二つに分かれるまでは七夕は商店街全体として行われていた。また飾りは現在の七夕道具と同じであったというが、昔の本通りは大きな車が通らなかったこともあり、吹き流しが今よりももっと長かったという。飾りはこのほかにもやっこさんなどの飾りもあったという。

七夕は主に商店で作るものであったため、農家は基本的に関わりがなかったが、中には商工会のほうから声がけされて参加するような家もあったようだ。また商店以外に子ども会のほうでも各地で七夕作りが行われていたため、農家であっても子どもがいればその子どもは七夕作りに参加した。

子ども会で七夕飾りを作るときには、町内会の子ども会単位で七夕1本を作った。一区に大体20人ほどの子どもがいて、班毎に「1班は鶴」などというように分担して飾りを作るということもあったという。集まる場所は班長の家などが多く、中には農家の敷地にあった柿の木の下にゴザを敷いてテーブルを出し、そこに集まって飾りを作ったというところもある。

こうして飾り作りは7日から10日ほどかけて毎日1、2時間くらい行われていたという。そのときの材料は子ども会のお金なので、子どもたちは手ぶらで行って飾りを作っていた。そして飾り作りが終わればアイスキャンデーをもらうということもあった。そうやって子ども会で集まるのは楽しかったが、とくに男子などは七夕を作ることにしてはさほど楽しいとも思わなかったと話す人もいる。それでも自分たちが作った飾りが飾られたのを見れば、子どもなりに「あよかったな」と思ったという。

子ども会で作った七夕は本通りに面したよい場所や広場など子どもたちが遊んで歩くところに子ども会として上げていた。そのときの竹はどこかの家の竹やぶから切ってきたのではないかとの話である。当時は竹やぶも多く、きつねやたぬきなども出てきたという。なお子ども会で七夕を上げるときには、町内会あるいは商店街の若い人などが手伝った。

こうして行われてきた原町の七夕であるが、やがて参加する店が減少していき、いつしか商店街では行われなくなったという。

### (2) 現在の七夕

#### 商工会分裂後の七夕の復活

原町で七夕が復活したのは1968年（昭和43）頃に商工会が分裂した後である。まず分かれたその年あたりに原町本通商工親睦会のほうで七夕が復活した。これは当時の会長が商店街を活性化させようとしたときに七夕を取り上げたことによる。このとき一番町七夕の戦後復活の森天祐堂の主人を招き、原町のお寺に集まって指導を受けた。そのときの七夕作りの方針としては、お金をかけないで昔ながらの七夕を作ろうというのが目標だったという。これは今でも原町の七夕の特徴となっている。

一方東部商工会のほうでは、まだ七夕が行われていない時期に、原町本通商工親睦会のほうから竹

を分けてもらって七夕を上げていたという人も一部にはいたが、そうした人たちが青年部を結成したのを期に、東部商工会でも七夕を上げようということで始まった。最初の年は商工会全体として申し合わせて始めたわけではなく、青年部が商工会員、非商工会員関係なく一軒一軒尋ねて回った。「あの店が上げているならうちの店でも」という意識を広めていくのが狙いで、若いやる気のある人たちから始まり、それに追随する形でどんどん増えていった。

こうして最初の年は一部の有志たちによって七夕が飾られ、翌年から商工会として行われるようになったが、最初の年に大変な思いをして翌年止めてしまうという人もいたという。継続していくためには力の抜きどころをわきまえることが重要で、あまり気合を入れすぎでは続かなくなると当時の指導者は語る。なお復活の際にはとくに原町本通商親睦会からの支援を受けたということはない。

七夕が復活した当時はどちらの商工会でも商店が多く密集していたため、その頃に比べても今は七夕を上げる本数は少なくなっているという。それでも仙台の中心街のほうに見に行けないお年寄りなどが毎年楽しみにしており、それほど人も混まず普段着で気軽に来るのがよいと地元の人々は語る。

## 二つの商工会による原町の七夕

原町の七夕は、見る人にとってはそれが一つの商店街として行われているものように映る。しかし実際には商店街は二つの商工会に分かれて七夕を行っているのであり、もちろん七夕飾りの審査も商工会ごとに別々ということになる。一般には原町商工親睦会のほうが熱心で飾りの見映えもよいという評価がされている。

原町本通り全体で飾りは50本ほど出るのが、原町本通商工親睦会のほうが商工会の範囲が狭いため、飾っている本数が同じくらいでもぎっしり飾っているように見える。

そこで原町東部商工会のほうでも賞を取るために飾りを一箇所に集中させようとの話が出たこともあったが、自分の店で作った飾りはやはり自分の店に飾りたいということからそれが実現したことはない。賞を取りたいという気持ちがある一方、別に賞を取りたくて七夕をやっているわけではないという気持ちがそこにはある。

七夕を上げるのは商店が主だが、それ以外の各種団体も参加することができる。またテナントを借りて店を営業しているという人で参加する人もいる。こうした参加者には七夕一本ごとに商工会議所のほうから補助金が出るようになっている。

## 各種団体による七夕

商店以外の参加者であるが、原町では町内会の子ども会、老人会、また幼稚園、児童館、マンションの管理組合、福祉施設といったさまざまな団体が七夕に参加している。子ども会は小学校児童で構成しており、地区によって人数は違うが、南目子供会、苦竹一子供会、苦竹二子供会、苦竹三子供会、清水沼子供会、坂下子供会（町内会の名称とは若干異なる）の六つの子ども会がそれぞれ七夕を12本ずつ作って上げていることが確認できた。

飾りは夏休みに入ってからある程度の期間、原町本通商工親睦会側は原町コミュニティ・センター、原町東部商工会側は原町中央集会所に集まって作っている。飾りの作り方は親が一緒について教えているためそれ以外に教える人はいないが、指導してくれるような人がいればよいかもしれないとの意見もある。一方今では飾りのデザインも子どもたちが考えるようになってきており、大人が指示して飾りを作らせるよりもそのほうが子どもたちにとっては楽しいだろうといった意見もある。

子ども会で作った飾りは、本通り沿いで商店がなく飾りが空いてしまうところや公園などに飾って



原町本通りの七夕



いる。また子ども会の中には老人会や幼稚園などと共同で飾りを作るという例もあるようだ。

現在老人会で参加しているものは清水沼長栄会で、参加して10年ほどになるという。また近年では幼稚園の子どもたちが小さな七夕飾りをミニ七夕として4,50個作り、カッコウ公園に飾ったこともある。こうしてさまざまな団体が七夕に参加するようになった背景には商工会のほうでの呼びかけが深く関係しているが、参加する側もそこに自分たちなりの意義を見出して参加しているようだ。

#### 七夕期間中の風習

なお先に記述したように、昔は飾りを梅田川に流しに行ったなどといった風習があったが、現在では七夕期間中に何かするといったような話は聞かれない。またお盆やお彼岸のように個人の家で特別に何かをするといったこともない。

七夕とは別だが、昔は各地区で町内会役員が取り仕切る子ども会での盆踊りを行っていたという。現在は原町小学校で体育振興会主催の盆踊りを行っており、今年は七夕最終日翌日の8月9日、10日の両日に亘って行われた。この盆踊りでは原町本通商工親睦会、原町東部商工会の両商工会が夜店を出している。

### (3) 原町の七夕飾りとその作り方

#### 原町の七夕飾りと景観

原町の飾り作りは材料以外全て手作りで行われるとあってよい。商工会のほうでも製作費用を安くするために、古いチラシなどを使用したほうがよいとの助言をしている。仙台市中央の周辺商店街は大掛かりなものでは作れないので、風習である七つ道具はきっちり作ろうということを心がけているという。

七つ道具は短冊・巾着・着物・鶴・吹き流し・投網・扇籠で、短冊には願い事も書き、吹き流しには花で飾りたくす玉がつく。このくす玉は一尺のもので約100個の花をつけることができるという。また鶴は千羽鶴のようなものではなく、吹き流しにつけて飾ることが多い。

作った飾りは滑車を使って竹に取り付け、道路の両側に飾るが、原町本通りは道幅も狭く、両側の飾りがちょうビアーチを作るように重なって見える。荒町や連坊など他の地域は道幅も広く大型車も通るためアーチを作れない場合が多く、この通りの広さが原町の七夕の景観を特徴付けている。だが一方では商店街の看板や街灯の問題もあり、あまり大きく飾りを飾ることはできないという。

七夕でもっとも嫌まれるのは雨であり、七夕期間中には一日は必ず雨が降るといふ。そのため空模様が悪くなると店の人は外に立って心配そうに飾りを眺める。そんな調子で人が通りにたくさん出てくると、それを傍目に見ている人にとってはおもしろく感じられるという。誰もが自分の家の飾りが一番きれいだと思っており、自分で作ったから愛着があるため、飾りを雨で濡らすのは忍びないと感じている。

飾りは例年毎日夜に下ろしている店もあるが、今年の場合七夕を上げてからの三日間は晴れたため、飾りを下ろさず上げっぱなしにしていたところが多い。原町では吹き流しを上げ下げしやすくするために滑車を使っており、各家庭や団体が保管している。滑車は金属製のものや、古い竹を輪切りにしたものを使用している。なお飾りを下ろすというのは竹ごと下ろす場合もあるが、原町では滑車を使って吹き流しだけ下ろすことを指す場合が多い。

また、車に対しての配慮も必要となる。本通りは大型車が通ることはできないが、中には車高の高い車もある。その中にはわざと飾りに引っ掛けるような運転をする人もいるという。そのため曲がり角に面した店など、車が引っかからないような角度にしたいのだがなかなか上手くいかないという。こうしたことで飾り付けの仕方が左右されることもある。

## 飾りの作り手

飾りの作り手は大別すると家族と従業員であるが、店に来る顧客が手伝ってくれるということもある。家族で作るところは、それぞれ父母をはじめ皆で作っていたところ、奥さんに任せているところなど家庭によりさまざまである。嫁にいった娘や親類など一緒に住んでいない場合も、七夕の時期には手伝いに来たり飾りを持ってきてくれるということもある。

飾りを作り始める時期は人それぞれで、早い人は4月頃からコトコツ作り始めるが、遅い人は7月後半から作り始める。早い人は仕事が忙しいときは何もできないからなどの理由で、遅い人は置いておく場所がなかったり日に近づくならないと作る気にならなかったりという理由による。

飾りは店を営業している場合は仕事の合間や仕事が終わってから作る。ある人は、以前は仕事が終わって5、6時から9時くらいまで飾りを作っていたが、今は景気が悪くどこでも暇という状態だと語る。主婦などは店が終わってから作るのは忙しいこともあり無理なため、日中お店の手が空いているときに作る。人によっては夜子どもが寝てから作っているという人もいる。

飾り作りをするとなればずっと没頭してしまうこともあるようで、花を開くにしても2つ目くらいまでは大変だと思うが、開いているうちにだんだんその気になってくるという。

また、七夕に対する思い入れとして、七夕を作るということは人に見せたいというよりも、仙台人としての心意気だと思ふといった話や、今年は七夕飾りが好きだった母が亡くなってから初めて作る七夕なので、供養的な意味合いも込めているといった話を聞くことができた。

## 飾り作りの工夫

飾り作りの工夫には、材料の工夫と飾り自体の工夫がある。

まず材料の工夫であるが、七夕飾りの費用は各自で出すものなので、基本は材料費を安くする工夫ということになる。

飾りの材料は店ごとに特徴が出る。中には全て買い揃える人もいるが、大体は包装紙やチラシなどを再利用している人がほとんどである。表具や建具を職にしている人は障子紙や木材、生地なども使っている。だがそれらは失敗したものやサンプルのもので、商売のものとは流石に使わないという。また、以前からの習慣や書道をやっているなどの理由で和紙を使っている人もいるが、和紙は雨に濡れるとすぐに垂れてしまつて大変だという。他には鶴をタバコの銀紙、巾着を紙袋、着物をカレンダーで作り、くす玉のかごをザルを二つ合わせて作る、また丸ではなく四角い形状のぼんぼりを用いるなどの工夫も見られる。昔は台所の水きりを切って飾りを作ったこともあったという。

場合によってはくす玉のかごや針金など、昨年のものであっても使えそうなものを使いまわすこともある。しかし飾りは色落ちするため昨年のもを上げてみると色がくすんでいるのが分かるという。そのため花は毎年換えるしかないで、花紙などは新しく購入することが多い。また鶴と着物の飾りは忙しくて間に合わない時のために作り溜めておくこともある。

次に飾り自体の工夫だが、飾りは基本的に七つ道



四角いぼんぼり



キャラクターもの七夕飾り

具なので、工夫といえ色彩とデザインになる。あとは作る人のセンスに因るところが大きい、イメージ通りに作るのは大変だという。人によっては流行のキャラクターを題材として使ったりもすることもあり、例としては東北楽天ゴールデンイーグルスができたときのカラスコや、今年（2008）のディスティネーションキャンペーンのむすび丸などがある。一方で豆腐の入っていた古いプラスチックの箱を切って小さい花を作り吹き流しにつけたり、八百屋などではダンボールに色を塗ってスイカを作ったりと独自の飾りを作ることもある。

原町での飾り作りは、飾りが完成するまで人に見られないようにしておくといったことはなく、比較的オープンに行われている。そこでは余った飾りを人にあげたり材料をもらったり、時にはどんな材料を使ったかの話をするなどの交流も見られる。

#### 商店における七夕作りの現状

原町ではすでに七夕を止めてしまったという商店もいくらかあるが、止めてしまった理由は大別すると二つある。

一つは飾り作りの大変さである。飾りは主に家族間や従業員間で作るものであるが、はじめ子どもと一緒に飾りを作っていたのが、大きくなって家を出て行ったり手伝ってもらえなくなると飾りの作り手が少なくなってしまう。そのことによって飾り作りを早めに始めようと思うと、今度は飾りを置いておく場所がないという問題も出てくる。花屋などはお盆の準備で忙しいのに七夕にそこまで力を入れられないといった事情もある。

こうしたことが七夕作りをやめてしまう一つのきっかけとなっている。逆にはじめは店で七夕を作っていなかったのが、学校へ上がるなど子どもが大きくなって七夕をやりたいと言いつたのをきっかけにはじめるといふところもある。

もう一つは飾りを作って上げることの大変さである。七夕を上げるときには商店街の人が協力してくれるものの、雨が降れば飾りを下ろさなければならないなど天気も左右され、年配の人にはとくに負担が大きい。そのようなことで「気力がなくなった」という人もいる。

他に主催者側の目的がはっきりしていないため七夕を止めてしまったという人もいる。はじめは仙台七夕という伝統行事に賛同してはじめてはみたものの、それによって原町のよいところを周辺にアピールして集客を招くというわけでもなく、ただ自分たちで七夕を作って自分たちで見て終わるといふような構造になってしまっているのではないかとするように、ただ単純に七夕をやっているのではないかと疑問を抱いている人もいる。

一方七夕飾りを行っている人の中にも、飾り作りは仕事以外にさらにやらなければならないことなので大変だと感じている人はいる。飾りつけも朝早くからやらなければならない上、竹を上げるにしても3人は必要のため、商店街に若い人がいなければ七夕を続けるのも難しいという。このように現在の原町では条件的に七夕を実施するのが難しい状況になっている部分もあるが、商工会のほうではそうした中でも多くの商店の協力を得られるように、竹を用意したり有志が飾りを作って支援するなどさまざまな取り組みを行っている。

### 3 それぞれの商工会の七夕への取り組み

#### (1) 原町本通商工親睦会の七夕への取り組み

##### 七夕参加への呼びかけ

七夕に参加する店舗の中には、商工会からの呼びかけに応じて最近参加するようになったところもあるが、その一方で自発的に参加をしたのがマンションの管理組合である。管理組合はもともと町内にはあまり緑の無かった人が多く加入している団体なのだが、組合の人の中には商店街の町お

こしに関心を寄せている人もいて、新しく来た人たちが商店街のことを心配してくれるのはありがたいことだと会長は語る。また、町内にある福祉施設などでは今年初めての七夕制作に参加するところもあり、お年寄りの励みになるだろうと考えた結果始めたそうである。このほかにも子ども会や清水沼の老人会も七夕に参加している。

#### 有志による飾り作り

上記のように商工会のほうから呼びかけを行っているものの、七夕に参加できない店舗も出てくるため、全体的にたなばた飾りがまばらになってしまう恐れがある。そのため不均衡を防ぐ手段として、有志による間を埋めるための七夕飾りが制作される。また時間に余裕がなく吹き流ししか作れないといった人でも七夕に参加できるように、そういう人たちのために飾りを作っている人もいる。

#### 竹の調達

原町本通商工親睦会はかつて使用する竹を、東部商工会と一緒に購入という形で調達していた。しかし数年前に調達した竹が足りなくなるといふ事態が起きたため、急遽新しく調達することになったのだが、たった数本のために手間と金銭が多くかかってしまうようなことは避けたいことであった。そのような時、原町で竹やぶを所有している人の協力が得られることになったため、その竹で不足分を補うことにした。その所有者が竹を持って余っていたこともあり、その後も引き続き提供してもらっている。その所有者の竹は太過ぎずちょうどよく、原町本通商工親睦会としてはそれで十分だという。

#### 催し物の企画

原町本通商工親睦会は七夕期間中に催し物を開くことにしており、一昨年（2006年）は下宿屋の座敷を借りての津軽三味線演奏、去年（2007年）はハーモニカを主体としたジャズバンドの演奏、そして今年（2008年）は演歌歌手が出演することになった。その演歌歌手は催し物と同時に開かれるビアガーデンに出演することになっている。催し物は毎年音楽に集中しているわけではなく、七夕音頭、映画会、そうめん流し、うなぎつかみ、ニジマス釣りなどをしたこともあったが、現在は行う場所が無いという。また近年では現会長宅の前で七夕ふれあい広場と称したビアガーデンも開いている。



七夕ふれあい広場の様子

## (2) 原町東部商工会の七夕への取り組み

### 七夕参加への呼びかけ

七夕に際して商工会のほうから事前に各商店に呼びかけを行い、商店街の表通りに面していない店やスーパー・銀行なども参加している。また東部商工会の範囲内に存在する4つの子ども会でも七夕飾りを4本作り、本通の飾っていない場所にあげている。飾りを作る店が少なくなっているため、幼稚園で制作したミニ七夕をカッコウ公園に飾ることにしており、材料は東部商工会で用意される。

### 有志による飾り作り

東部における七夕飾りは当初青年部5、6軒での発案を期に始められ、次の年からどんどん増えていったが、最近では再び下り坂傾向になってしまい、現在ではそれを補うために自分の店以外に飾る分の七夕飾りを制作している人もいる。しかし、自身の七夕飾りを制作すること自体大変な作業であり2つ以上制作することはかなりの負担であるため、毎年必ず補充できるわけではない。

また期間中子どもたちが自由に持って行けるような形で、小さな笹竹とそれにつける花や短冊をたくさん用意している人もいる。

## 竹の調達

町の人の話では、昔七夕に使用する竹は自分たちで調達していたというが、現在では商工会が造園業者から購入したものを参加者に無償で配布するようになっている。竹は以前は河北町から取り寄せていたが、現在は南三陸町あたりから取り寄せている。また竹を宅配する際には青年部が主体となって行動する。

## 催し物の企画

七夕期間中、原町東部商工会青年部では毎年子どもたちのために青空映画会を開催している。映画会はカッコウ公園で夜に開かれ、白いスクリーンに借用した短編映画を映す形で行われている。このための宣伝は手書きのチラシを店頭や電柱に貼るなどしている。

青空映画会では10年程前に駄菓子屋などの夜店を出したこともあるが、少人数の青年部で開いているため余裕が無いなどの理由で、現在は催し物の際に夜店は出していない。



ミニ七夕の無料配布

## 4 原町本通商工親睦会の七夕の様子

### (1) 飾りつけ

#### 竹の切り出し

今年(2008年)の竹の切り出しは8月3日(日曜日)だった。先に述べた所有者宅の裏庭において5時から切り出し作業が行われ、親睦会の会員や町内の有志など10名ほどが参加した。

切り出す竹は本来、2～3年経って十分丈夫になったものを使用するのが望ましいが、管理の大変さから実際は冬を越す形で1年おいて、ある程度硬くなった竹を使用している。新しい竹は柔らかいため、七夕飾りを付けるとして折れてしまうという。切り出す竹には見分けがつくように所有者のほうで1ヶ月ほど前から目印をつけている。

#### 竹の配布

切り出された竹は一旦会長宅に集められ、枝を払ったり長さを整えて、綺麗になった竹が参加者に今日中に配布される。枝はすべて払い取るわけではなく見栄えを良くするために必要最低限の量まで払い取られる。具体的には立ち上げた際全体的に下を向いている枝を根こそぎ切らず払い取り、竹の先を重点的に残すことになっている。なお切り取られた竹は建具屋によって8日にハナタケ用として加工され、必要な人が持ち帰れるようにしている。



竹の立ち上げ



アテダケ

竹を持っていった店では3日現時点で早速立ち上げるところもある。竹を立てる場合、竹の重さや立地条件から3～4人による作業となる。しなりの具合や上げやすさを考慮した結果竹を交換し、さらに切断して竹の大きさを調整することも応々にしてある。店によっては立ち上げた竹を固定するためにコンクリートブロックの穴や電柱、街灯の柱、駐車場のフェンスを使用しているところもある。また七夕期間中の竹には飾り物の重量で負担がかかるため、ソエギ、アテダケと呼ばれる支えを付けて竹がしなるのを防いでいる。

#### 飾りつけ

飾りつけは8月6日当日に限らず前々日あたりからはじめる。吹き流しの飾り付けには滑車を使用されるが、滑車を取り付ける場合、竹の枝に滑車を引っ掛けて取り付けるようにしており、見栄えを考えて80cmを目安に滑車同士の間隔を作る。滑車は下向きに付けるのがよく、また、飾りの重みで竹が曲がることを防ぐソエギ、アテダケと呼ばれる硬くて古い竹も、本来は前述の枝肌いで枝が少なくなった下の部分に取り付けるのが理想的なのだが、制作の都合上必ずしもそうしなければならないというわけではない。

飾り付けには手伝いが必要であり、会長も含む本通商工親睦会の関係者4名が七夕制作の手伝いのために商店街を回っていた。その様子を観察したところ、わずかに10分程度で飾りつけが完成したので、あっという間に取り付けられたという印象を持った。飾りをつける際のこつとしては、先端に七つ道具を集中させれば見栄えがよくなるという。また8月6日朝には、清水沼子俱会で作った飾りを飾るため、地域の子どもたちも朝早くから飾り付けを手伝っていた。

飾りは天気が悪くなるとそのたびに降ろさなくてはならず大変である。そのため、6日7日と雨が降らなかつたら最終日の8日は降ろさないうで飾ったままにしている。曲がり角に位置している店などでは七夕を飾る高さの問題があり、低く立ち上げた方が見栄えとしては良いのだがそれではトラックが曲がる際にぶつかってしまうなどしてどうしても高く飾らざるを得なくなっている。

## (2) 七夕期間の動き

### 期間中の催し物

七夕期間中6日と7日の夜に七夕ふれあい広場と称したビアガーデンが開かれ、会長宅前に机やベンチを出し、生ビール他に焼きそば、焼き鳥、枝豆、さらに近所の人々が持ってきたナス漬やきゅうり漬、トウモロコシなども振る舞われた。また、これらのうち6日には演歌歌手によるディナーショーが行われ、多くの人が見物した。また原町本通商工親睦会では、これ以外にも訪れた人が自由に短冊に願い事を書くためのコーナーも設けている。

### 仙台市商工会議所による七夕審査

8月6日12時頃、仙台市商工会議所の審査員が原町入り口に到着した。審査員は歩きながら七夕を見物して点数を付けていき、審査員の到着に合わせて商店街に音楽が流れ始めた。審査員曰く、「今日、初めて五輪に関連する飾りを見た」らしく、マンションの人たちが参加しているのも珍しいということだった。審査自体は30分程度で終了し、審査結果は、金賞：ファミールかんの、銀賞：はせせ接骨院・清水沼長栄会、銅賞：小池時計店・シラサワサイクル・相沢米穀店だった。

### 飾りの片付けとその後の利用

原町本通商工親睦会では、七夕最終日の8日午後6時から翌日の朝8時にかけて片付けが行われる。七夕が終わった後、竹は再び1ヶ所に集められ、家庭ごみになった七夕飾りと共に業者が回収する。竹は再利用される場合もあり、墓地に添える花竹や竹とんぼ、酒の杯やソーメンを流す竹などに利用される。

## 5 原町東部商工会の七夕の様子

### (1) 飾りつけ

#### 竹の配布

竹は造園業者から仕入れており、今年は8月4日にカッコウ公園まで運んでもらったものを翌日参加者の下へ宅配した。

8月5日早朝6時、商工会員8名と子ども会役員4名の計12名による竹の宅配が始まった。その日の朝はひどい雨で冗談交じりに中止にするかという話も出たが雨天決行になった。本来は竹の立ち上げ作業も行う予定であったが、さすがに雨天では無理ということもあり中止され、最終的には7時5分に終了した。



原町東部商工会の竹の宅配

#### 飾りつけ

飾りつけは6日に行われるが、中には前日に行う人もいる。6日に行う人はすぐに上げられるように、開店にあわせて9時ごろまで飾り付けを終わらせる。飾り付けには家族のほかにも、青年部や隣近所も手伝いに来る。

竹は十分しなりがある3年ものの竹を使用する。取り付ける滑車は4つすべて個人所有であり、滑車のおかげで雨が降った日もある程度簡単に上げ下げ出来るようになっている。雨天の場合はくす玉のみを降ろしてほかを降ろすことはない。立ち上げた竹は地面に掘ってある用水器の穴にはめ込んで支えているこれは本通の穴とは別である。また七夕のために地面の穴と寄り掛けるための支えを作る人もいる。

七夕の飾りものは、雨が降ったとたんボトボトと落ちてしまうためすぐに家の中にしまい込むのだが、何故か七夕期間中は毎年雨が降ってしまうという。

### (2) 七夕期間の動き

#### 期間中の催し物

8月6日の夜7時からカッコウ公園で子ども向けの上映会である青空映写会が開かれ、数十名の人が集まる。観に来るのは子どもたち同士や親子連れが多く、その中には親睦会側から来ている人もいだろうと関係者は語る。集まって来た人はとくに浴衣などを着てくるといったことは無く、着飾るのは9日の盆踊りの方であるという。

この上映会ではお菓子も配られる。上映会の準備は青年部が行い、ブルーシートを敷いたり、東屋にスクリーンを設置したり、テントを設営するなどしていた。かつては映写会を2日間開いて夜店も出していたが、現在では人手不足など余裕がなくなっている。

なお一部の有志が子どもたちのために小さな笹竹とそれにつける花や短冊をたくさん用意し、ミニ七夕として自由にそれを配付するコーナーもあった。

#### 仙台市商工会議所による七夕審査

原町東部商工会の七夕審査は原町本通商興親睦会の審査が終わった後12時半頃から行われた。原町東部商工会でも使っている材料（野菜入れの網など）をアピールポイントにしている。審査は約30分で終わり、受賞結果は、金賞：三浦本店、銀賞：仏壇の八百市・橋本時計店、銅賞：安附表具店・永島まんじゅう店であった。

金賞：三浦本店

銀賞：仏壇の八百市

橋本時計店→仙台市章の飾りをつけていた

銅賞：安附表具店

水島まんじゅう店→吹流しに形見のゆかたの布を使ったのが評価された。

くす玉を、ザル二つで作った。

#### 星の宵まつりでの神輿担ぎ

七夕期間中、中央商店街では星の宵まつりと呼ばれるパレードが行われているが、その一環である7日の神輿担ぎには原町東部商工会からも何名か参加する。今年は3名で毎年参加している人が多い。神輿は一番町から始まり、宮町の東照宮の神輿（600Kg）を約30分担ぐ。担ぎ手たちは、原町以外では宮町、長町、荒町、進坊、伊達幹興連（だてすいこうれん）、泉興会（せんこうかい）、舞興組（まいこうぐみ）、その他有志の人30数名で、それぞれ半纏の色が違ったり、名前入りだったりする。着るものは町内や組織ごとにあり、どこにも属さない人は、それようのものを着る。今年は平日ということもあり、担ぎ手がいま集まらなかったという。神輿担ぎのあとの直会はホテルで行った。

#### 飾りの片付けとその後の利用

飾りの片付けを始めるのは七夕期間最終日であり、5時頃からは子ども会が、店を閉める時間になると商店が片付けをはじめ。ただし忙しかったり用事のある店では、早めに片付けはじめ、七夕期間の初日でも、個人で賞をもらったところは、早く下ろす場合があるという。また自分のところ以外にも手伝いに当たらなければならないため、今日中に片付けを終わらせておこうと考える人が多い。

竹は1メートル半くらいに切った後ヒモで結んでゴミとして夜のうちに出してしまい、9日の朝に業者がそれを持っていく。片付けが早く済んだ場合には、あまり早い時間にゴミ捨て場に置くのはどうかということで、商工会の役員宅などで預かるようにしている。業者によれば、今年は去年より量が少なくむしろ年々減っている印象があると語る。竹の回収は普段のゴミ回収とはルートが違い、原町は最後の方で一番町の方から回収してきたという。また回収の際ゴミ捨て場の様子を写真に撮っていた。

竹はゴミに出さずお盆の迎え火のために使ったり、流しそうめんやガーデニング用の竹に再利用することもある。また子どもたちは貯金箱・花瓶・皿など、考え次第でさまざまに活用するようだ。竹以外にも針金やカゴは再利用することもあり、アニメキャラクターの吹流しなどを保育園に貸したりすることもあるという。

#### 参考文献

- ・『仙台市史通史編3 近世1』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 2001
- ・『仙台市史通史編4 近世2』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 2003
- ・『仙台市史通史編5 近世3』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 2004
- ・『仙台市史通史編6 近代1』 仙台市史編さん委員会 仙台市 2008
- ・『仙台市史特別編4 市民生活』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 1997
- ・『仙台市史特別編6 民俗』 仙台市史編さん委員会／編集 仙台市 1998
- ・『地元学 歩いてみれば、地域がもっと好きになる』 地元学の会／企画編集 みやぎの区民協議会 2000
- ・『続 地元学 歩いてみれば、地域がもっと好きになる』 みやぎの区民協議会／編 みやぎの区民協議会 2008
- ・『宮城県地名考 菊地勝之助』著 宝文堂 1970
- ・『町名別人口統計資料—平成17年国勢調査結果—』 仙台市 2008
- ・『仙台市統計書平成19年版』 仙台市 2008



## 第4章 民俗誌にみる七夕飾り

### 第1節 民俗誌にみる七夕行事

仙台市及び周辺部の民俗誌を見ると、七夕行事も元来盆行事の一種であったことがわかる。水に関わる儀礼を伴う場合が多く、また農耕儀礼としての関連もうかがえる。

**墓掃除** 盆を迎える準備として、7月7日に墓掃除が行われる。(泉区福岡、青葉区新川、青葉区大倉など)

**井戸替・水浴び** 7月7日をナノカビといって井戸替をする。女の人は陽が昇らないうちに川で髪を洗う。(荒浜) 女の人は7日の朝川で髪を洗うとよく落ちるとか、子供は7日中に7回水を浴び7回餅を食べる。(河原町と南材木町周辺)

**七夕馬** 7月7日馬の供養のために菰草で馬を作り、馬屋の屋根にあげる。(荒浜) 麦藁で馬の形を作り、手綱をつけて七夕の竹の下に2頭つなく。また馬頭観音をまつた所においてきたり、馬屋の屋根の上にあげておいたりする。(坪沼) 6日に麦からで馬の形に2頭作り、馬屋の屋根にまたがらせるように乗せる。(泉区福岡) 6日に藁で七夕馬を作り母屋の上にあげる。(若林区下飯田) 6日に小麦藁で飼っている馬の数をつくり、屋根の上に乗せる。(青葉区大倉) 6日に菰草で馬を2匹作り馬屋の屋根に乗せる。タナバタさまが乗って行くという。(荒浜)

**七夕飾りを田に立てる** 竹を畑に立ててカカシにする。(青葉区北目町、若林区下飯田) 竹を畑に立ててスズメ追いに使う。(若林区上飯田) 畑に立てる。(若林区日辺) 大根畑に立て虫除けにする。(青葉区新川)

**七夕飾りの下で御飯を食べる** 6日の晩に七夕を飾り、子供達が竹の下で御飯を食べる。(坪沼) 6日に家の庭に竹飾りを作り、夜にその下で食事をした。(泉区福岡) 竹飾りを庭に立て、ゴザを敷いて竹飾りの前で食事をする。(若林区下飯田) 6日子供達が米や銭を持ち寄って宿で料理してもらい、タナバタの下にムシロを敷き、台をおいてお膳で供えご馳走を食べる。(荒浜)

七夕には七夕飾りをつくるだけではなく、上記のように様々な習俗が見られた。

#### 参考文献

『足元からみる民俗 (11)』仙台市歴史民俗資料館

## 第2節 根白石の七夕飾り

### (1) 根白石地区の概要

仙台市泉区は仙台市北部、宮城県のはほぼ中心に位置し、泉ヶ岳や七北田川などの自然環境に恵まれている。また、泉中央地区を中心とした都市機能を併せ持つ。

泉区域は東西に約21.4キロメートルと長く、面積は145.78平方キロメートルある。また、気候の面では、平野部は太平洋に面した海岸性気候のため、比較的寒暖の差が少なく、一年を通して過ごしやすくなっている。根白石地区は泉区の西北にある泉ヶ岳の麓にあり、七北田川の上流にある集落である。この地区には実沢・小角・根白石・西田中・朴沢・福岡があり山間部の福岡・朴沢、町場の根白石、水田地帯の実沢・小角・西田中がある。

また、かつて根白石村は、定義如来信仰の参詣者が往来したという。定義街道と呼ばれた道がいくつかあった。その中でも賑わったのは、朴沢―小山―上野原―蒜但木―白木と根白石―花輪―藤沢―白木だったという。参詣者は仙北や岩手地方からもやって来た。

定義までの道筋には、定義までの道しるべの石が残っているが、仙北や岩手地方の人々が建てたものもあるという。

近年周辺には団地ができ泉ヶ岳に向う道路沿いには、飲食店なども立ち並ぶようになった。

### (2) 昭和初期から昭和30年代の七夕飾り

聞きとりによると、昭和初期の七夕は町場の商店のある通り上町から下町まで、仙台七夕のように道路の両側に飾りをつけた。町中には堀があり、戦前は飾りを山や家の竹藪から伐って来た竹に飾った。飾りは7つ飾りだった。

この時、タナバタさんにずんだ餅をあげ、朝は墓掃除に行った。早朝には里芋の葉から露を集め、墨をすり、短冊に願いを書いた。

また「7回餅食って7回水浴びするもんだ」といわれ、子どもたちは川で遊んだ。また女の人たちは川で洗たくなどをした。翌日には虫が来ないように七夕飾りを畑に立てた。

また、妻わらで、その家の馬の数だけ馬の形を作り、厩屋のヘグシ（軒）に乗せた。これはこの馬に「七夕様」が乗ってくるといわれていた。

戦争で昭和15年から昭和20年はじめまでの間は七夕はやめていた。しかし昭和24、25年には復活した。

昭和30年代頃までは根白石の町並みや集落の家々にも飾られた。仙台七夕のように大きな飾りで30数本あった。その後、車社会になりバスなどが通ると、飾りが邪魔になってきた。また雨の日に七夕飾りを入れるのがたいへんだった。

高度経済成長期の仙台はアーケードも充実してきたので飾りも豪華で、根白石の人々も自分で作るよりも子どもを連れて行く人も多くなったため、昭和40～昭和53年頃までは七夕は下火になった。

### (3) 七夕飾りの復活

昭和54・55年にはミニ七夕が作られ飾られたが、本格的には昭和56年老人クラブで七夕飾りが復活した。(庄司健治氏の提唱により始まったといわれている。)

(大きな七夕飾りは昭和58年ごろまで作った。写真を見ると大きな飾りと、今のミニ七夕飾りを一

緒に飾っているのがある。)

小さい七夕飾りは雨でもすぐ入れられ、車の邪魔にもならないということでミニ七夕を作った。これは「根白石民俗ミニ七夕」としてはじめられた。最初竹は20～30本で老人会が山へ行って取ってきた。それをプラスチックの魚などを入れる桶に根ごと入れてその竹に飾った。

また、手のかからないお金のからない、何度でも使えるということで、七夕の竹は鉢植えになった。竹は布袋竹を使っている。

昭和40年代団地が作られ、山や竹藪も少なくなってきた。今は「泉緑化」から竹を買っている。竹は布袋竹を使っている。飾り終わったら鉢からとって、植えるか、そういった場所がない人は「泉緑化」から買ったので、そこに預かってもらっている。七夕が近づくと庭に植えていた竹を掘り出し植木鉢に移したり、また鉢を預けた家では「泉緑化」から運んでもらった。

飾りは8月6日・7日・8日で、老人会や子供会、各家庭で作り商店街の道路に並べ、コンテストを行うようになった。

#### (4) 飾り

材料の紙は、高長商店が最近では仙台に行ったときに紙屋へ寄って七夕用の紙などを買って来る人もいる。高長商店には、その他にくす玉のカゴや吹き流しの竹輪などと七夕馬や草履なども売っている。

七夕飾りは主におばあさん達が冬や時間のあるときに飾りを作っておいたり、七夕の頃に作ることもある。

現在は童で作った馬をさげているが、かつては田の神、豊作の神が馬に乗ってやってくると言う事で茅葺の上に並べた。また一緒に農作業や日常生活で必要だった藁草履、草鞋もつけた。それらは妻を使っで作っていたそのなごりでミニ七夕に飾るようになった。かつては竹籠も地元のおじいさんが作ったが、藁細工・籠の製作技術など全部自分たちで出来る技術を使って七夕飾りを作った。

七夕飾りは仙台七夕と同じように七つ飾りを作って飾る。着物、短冊、綱、扇かご、巾着、鶴、吹き流しで、作り方も同じである。藁細工やそのほかの飾りで使われるものは、前年度に使ったものを取っておいて、飾るという事もしている。

糞をさげているところもあるが、これは全部の飾りにはさがっていないので手の器用な人が作って飾りつけをしたのではないだろう。

写真 故 庄司健治氏撮影

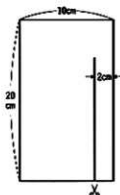
#### 参考文献

- 『泉市誌 下巻』1986年
- 「いずみのふるさと—根白石—」1997年3月
- 「仙台市泉区」ホームページ
- 「仙台七夕浪漫」ホームページ
- 「ふるさと仙台」2009年

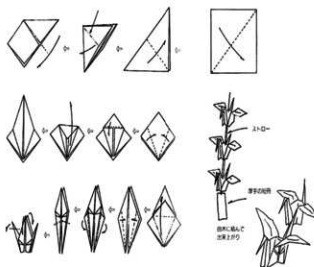
#### 調査協力者

- 高橋兵也
- 沼田さだ子
- 鷲尾隆商店
- 庄司とみお
- 永澤みさ子（永澤商店）
- 兼岸守（兼岸製菓店）

仙台七夕飾りの作り方 (『仙台七夕浪漫』ホームページより)

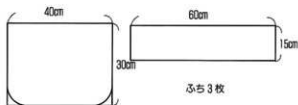


短帯の作り方

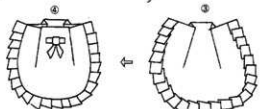
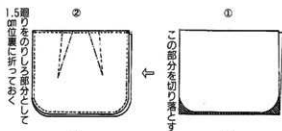


鶴の作り方

巾着の作り方

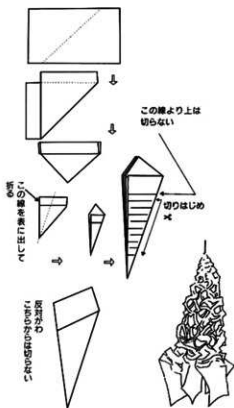


袋の紙2枚



②の上にもう1枚の紙を貼り、リボンを付けて糸で下げる。

②枚に折ってからひだをつくる。



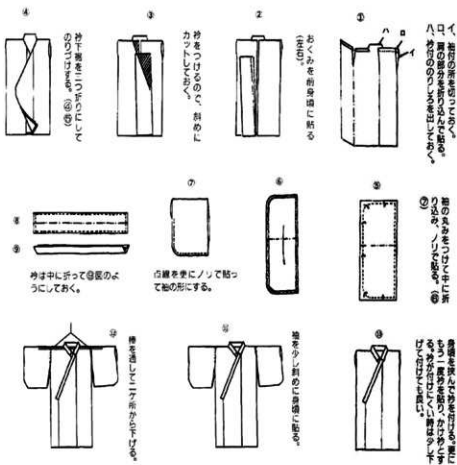
投網の作り方 (くずかごは逆さにする)

着物の作り方

市販されている紙は、タテ60cmヨコ90cm位なので、その大きさの紙を次のように切ると良い。  
(2枚必要)



紙を縦に使うと90cmの長さの着物になる。



七夕馬作り



① ヨリをかけたものにワラを巻いて口の部分を作る



② ワラを重ねて顔を作る



③ 胸と足を作るためにワラを曲げる



④ 顔と足の部分ができたら胴体を束ねる



⑤ 前足の部分を作る



⑥ 前足を縛る



⑦ 胴体の部分にワラを足す



⑧ 胴体を束ねる



⑨ 馬の尾を作る



⑩ 尾を結びつける



⑪ 後ろ足を決める



⑫ はみ出たワラを切って整える



⑬ 後ろ足を決めたら2本に分ける



⑭ 両方の足を束ねて整える



⑮ 両方の足ができた形を整える



⑯ 飾りをつけて出来上がり

昭和30年代の七夕



昭和30年の七夕飾り



昭和30年頃の七夕飾り



昭和35～36年頃の七夕



牛と七夕飾り（根白石上町）



七夕飾り作り



昭和58年7月24日 竹籠作り



昭和58年7月25日 きもの作り



昭和58年8月1日 七夕馬作り



昭和58年7月25日 薬玉の花作り



昭和58年8月1日 七夕馬作り



昭和58年7月25日 折鶴作り



昭和58年7月25日  
木の枠に和紙を貼って飾りを作る



昭和58年8月1日 折鶴作り

七夕の飾りつけ風景（昭和58年8月6日）



横白石のミニ七夕飾り（平成20年8月）



## 結び

仙台の七夕飾りについて、仙台市中心部商店街の七夕飾りの現状を把握し、そして周辺部の七夕飾りへの取り組みについて、聞き取り調査を実施して本報告書を作成した。調査員の人数と調査期間の制約もあり、調査内容の膨大さにどれほどの成果が得られたかと思うところではあるが、現時点での七夕飾りの現状把握と周辺部における七夕飾りを中心とした、七夕行事の一部始終を採録できた事は、望外の成果であった。それも調査補助員として精力的に聞き取り調査にあたってくれた、東北学院大学の民俗学研究室ゼミ生の尽力によるものである。

中心部の商店街の調査では、新興店へ仙台七夕の伝統をどう伝え理解させるか、という課題に苦慮している現状がある。また世代交代による伝統の軽視、七夕飾りを制作する上で、財政的な問題と共に、労働形態の変化による作り手の不足など、様々な問題を抱えていることがわかった。そうした現状から、七夕製作専門業者の存在は軽視できない。専門業者も依頼主との意識の違いを問題として抱えている。一方、外部へ委託することなく自家製作を続ける店への取材を通して、伝統を継ぎ次の世代へ伝える使命感や、仙台商人の誇りと心意気を知ること出来た。

周辺部5町の調査を通して、七夕に関わる民俗はほとんど残っておらず、過去の事例となってしまったが、かつて最小の単位である家毎に行われていた七夕飾りや七夕行事が、地域に拡大し新たな共同体意識を醸成しているとも言えよう。

七夕飾りについても、伝統的な七つ飾りの復興への試みが見られるようになった。小学校や子供会などで、伝統七夕作りの講習がなされてもいる。仙台市民のまつりとして、仙台の七夕飾りが更に浸透していくことを願うものである。

## 仙台の竹細工

## 例 言

- 1 本稿は、仙台市を補助事業者とした平成20年度国庫補助事業「仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査」のうち、「仙台の竹細工」に係る調査報告書である。
- 2 本調査の実施期間は平成20年6月6日～平成21年3月23日である。
- 3 調査は仙台市教育委員会文化財課（担当：伊藤優）の総括のもと、仙台民俗文化研究会が行った。
- 4 調査および執筆分担は次のとおり（肩書きは当時）
  - ・第1章 仙台の竹細工  
小谷竜介（東北歴史博物館学芸員）
  - ・第2章 竹細工の下準備  
岩館岳（東北学院大学大学院生）  
柏井容子（多賀城市埋蔵文化財調査センター）
  - ・第3章 組み組みの技術  
柏井容子
- 5 本調査事業の目的と方法、調査体制、調査成果の概要を示すために別途「総括編」を刊行している。
- 6 調査及び報告書作成に関する諸記録、資料等は仙台市教育委員会が保管している。

# 仙台の竹細工

## 目 次

第1章 仙台の竹細工	81
第1節 竹細工職人	81
(1) 仙台の竹職人	
(2) 職人と内職	
(3) 職人の技を継ぐ	
第2節 製品の種類	89
(1) 竹細工の編み目	
(2) 仙台の竹細工	
第2章 竹細工の下準備	97
第1節 竹細工の道具	97
第2節 竹細工の原料とその入手	106
第3節 ザイリョウ作り	108
第3章 組み編みの技術	110
第1節 製ザルの過程	110
(1) 製ザル技術保持者	
(2) カゴの製作工程（半切り）	
(3) ザルの製作工程（コメトギザル）	
第2節 くす玉製作の過程	115
(1) くす玉製作の背景	
(2) くす玉の製作技術	
(3) くす玉製作工程写真	
(4) くす玉製作用具	
(5) くす玉製作からみる竹細工職人の技術	
話者一覧	124
参考文献	124

## 第1章 仙台の竹細工

### 第1節 竹細工職人

#### (1) 仙台の竹職人

竹細工は、鉦、鉋などの道具があれば、自生する竹を原料に製造することの出来る用具である。その意味で、製品の質を問わなければ厳密な意味で竹細工職人を定義することは困難である。本稿では、ひとまず竹細工職人について竹細工を専業とし、主たる現金収入源としている人と定義し、仙台の竹細工は、仙台市域で製造され消費される竹細工とする。

竹細工は、このように厳密な意味でどこまでを職人と見なすか判断が難しいが、高橋幸作氏によれば、氏が竹細工仕事を始めた昭和20年代に100人を超える職人がいたという。

宮城県の竹細工では岩出山の篠竹細工、宮床の箕作りが著名であるが、仙台の場合は、篠竹細工とカラダケ（唐竹＝マダケ）細工が中心となり、かつ基本的に両材とも使って竹細工を行っている。

仙台市域における竹職人の状況を示す資料として、後掲資料1があげられる。「仙台竹細工商工組合規約書」には、組合規約とともに、名簿が掲載され、昭和29年に52名が組合員となっている。この時期以降竹細工は衰退していったと説明され、事実、同組合の、昭和47年の名簿では20名となっている。

以後、漸次職人は減少し、昭和の終わり頃には4、5名になり、そのころ組合も解散した。現在竹細工を行っているのは、大宮捨治氏、信之氏親子、升澤正章氏、丹野幸一氏、高橋幸作氏の5名である。

現在、仙台における竹細工製品は仙台七夕のくす玉の心材の製造販売が中心となっている。製造している職人の総計で毎年数千個の出荷があり、安定した収入源ともいえる。一方、その他の竹細工については、大宮竹細工店が店舗販売を唯一行うほか、くす玉の卸先である紙屋などと直接取引をしている。



写真1 ヒゴの面取り



写真2 ヒゴ作り



## (2) 職人と内職

仙台の職人の状況については、戦後発足した仙台竹細工商工組合に関する資料（高橋幸作氏所蔵）から一部伺うことが出来る。

高橋幸作氏は昭和21年から竹細工を専業に仕事を始め、昭和24年に店舗を構えた。ほどなく組合に加入したが、所蔵資料中最も古いものは昭和29年の規約である。資料1は規約部分および組合員名簿を起こしたものである。また、資料2は、同氏が所蔵する中で最も新しい、昭和41年のものである。規約書は、2年ごとに発行され、仙台竹細工商工組合の規約、役員名、組合員名と組合費の徴収記録からなっている。前項でも触れたように、52名の組合員が20名に減少する時期の記録である。こうした組合の規模の縮小は、最初の規約書が印刷であるのに対して、最後の規約書がガリ版刷に変わっている点からも伺うことができる。

### 〔資料1〕 仙台竹細工商工組合規約書（昭和29年）

- 第一条 本会ヲ仙台竹細工商工会ト称ス
- 第二条 本組合事務所ハ組合長宅ニ置ク（仙台市河原町廿七番地）
- 第三条 本組合ハ同業者奨励及親睦ヲ因ルヲ以テ目的トス
- 第四条 本組合ノ目的ヲ遂行シ事務ヲ統括スル為メ左ノ役員ヲ置ク
- 一 組合長 一名 副組合長 二名 理事監事 四名  
部長 十名 名誉顧問 三名 顧問 若干名
- 第五条 役員ハ總會ニ於テ組合員中ヨリ選任シ任務ハ各二年トス
- 一 組合長ハ組合一切ノ事務ヲ総理ス 副組合長ハ組合長ヲ補佐ス  
組合ノ事務一切ヲ処理ス尚組合長代理ニ任ズ  
理事監事ハ組合長ヲ補佐シテ本組合ノ名誉ヲ永久ニ持続スルモノトス 顧問ハ組合ノ重大問題アルトキハ組合長ノ評議ニ参与スル事
- 第六条 各幹部ハ名誉職トシテ無報酬ノ事  
但シ賞状並ニ感謝状ヲ贈呈スル事
- 第七条 本組合ヲ維持スル為メ組合員ヨリ金五拾延組合費ヲ徴収ス 部長ハ毎月二十五日マテ集金ノ上会計ニ納金スルモノトス
- 第八条 組合費ハ会計ニ委任シ 七十七銀行ニ委託スル事  
但シ通帳ハ会計ノ保管トス
- 第九条 新タニ組合員ヲラントスル者ハ申込書ニ記名調印ノ上本組合事務所ニ提出スベシ
- 第十条 本組合員ニ於テ死亡セル時又ハ火災等ニ限リ金五百円贈与スルコト武ヶ月以上病氣ニ掛リタルキモ全ジ  
但シ組合員死亡シタル場合ハ組合長会葬スル事
- 第十一条 本組合ハ毎年一月五日ヨリ十五日マテノ間ニ於テ通常總會ヲ開催ノ上組合ノ事業ニ関スル一切ノ事項ヲ議決スルモノトス又場合ニ依リ臨時總會ヲ開ク總會ノ招集ハ二日前ニ通知ス会員半数以上ノ出席ナキトキハ開会セズ  
尚会計ハ年一回組合員ニ決算報告スル事
- 第十二条 本組合ニ於テ意外ナル費用ヲ要スル場合ハ役員協議ノ上担当ナル費用ヲ提出スル事  
但シ費用ハ組合員全体ノ負担トス
- 第十三条 役員会開催ノ時ニ茶菓子料トシテ一回金參百元支出スル事
- 第十四条 本組合員ニ於テ使用スル印鑑左ノ如シ  
二寸四方 「仙台竹細工商工組合之印」 一寸四分四方 「仙台竹細工商工組合事務所之

印] 七分四方 「仙台竹細工商工組合長之印」

第十五条 本組合規約ニ違反シタル者ハ役員協議ノ上除名処分ヲナス 本組合ヨリ各組合ニ其ノ  
指名ヲ通知スル事

一 組合ニ入会スル者ハ二ヶ月分ノ組合費申シ受ケル

右ノ通り定メマシク

昭和二十九年四月

#### 役員

組合長	相沢長太郎
副組合長	皆川栄治
全	本郷幸吉
理事	横須賀竹十
全	今野西松
全	大場亀三郎
全	今野幸平
監事	小関亀次郎
全	大宮捨治
会計	皆川栄治
第一部長	本郷幸吉
第二部長	渡邊俊雄
第三部長	戸田 正
第四部長	庄子冬五郎
第五部長	菅野宇吉
第六部長	赤井東藏
第七部長	高橋幸作

#### 組合員氏名

##### 第一部

本郷幸吉	通丁
升沢金平	北鍛冶町
升沢金九郎	〃
板橋幸吉	肴町
山田信吉	土橋通

##### 第二部

渡邊俊雄	小田原
小関亀次郎	宮城野町通
阿部清藏	宮城野町
萱場憲治	二十人町

##### 第三部

皆川栄治	三百人町
大場亀三郎	穀町
丹野子之松	土樋

戸田 正 一本松  
松本新助 成田町  
高橋幸三郎 田町  
斎 勝雄 深沼新堀  
大久保義助 浦ノ町  
佐藤傳四郎 深沼新堀  
山田忠之助 連切小路

第四部

相沢長太郎 河原町  
庄子政治 河原町  
庄子冬五郎 五ツ谷  
今野西松 広瀬川橋下  
菱 正二 広瀬川橋下  
菱 良平 新河原町  
針生長治郎 六郷三ツ橋  
相沢 勝 広瀬川橋下

第五部

横須賀竹十 長町北町  
鈴木子之松 長町土手内  
鈴木末五郎 長町南町  
菅原清蔵 長町南町  
沼田源十郎 長町鹿野前  
菅野宇吉 長町北町  
高橋安雄 長町北町  
庄子庄之助 長町砂押  
石森常五郎 長町北町

第六部

国分三五郎 大野田  
赤井東蔵 大野田  
小泉千賀蔵 長町廣岡  
庄子清吉 長町南町  
大宮捨治 長町太道西  
渡邊俊雄 長町  
佐藤庄治 郡山  
大谷政蔵 長町南町  
庄子市次郎 郡山  
佐藤栄太郎 郡山

第七部

佐藤源之丞 中田町前田  
菅井清一 中田町  
大久昭二 中田町  
高橋幸作 中田町

今野幸平 名取郡増田町  
佐藤英三郎 増田町田高

【資料2】 仙台竹細工商工組合同規約書（昭和40年）

- 第一条 本会ヲ仙台竹細工商工会ト称ス
- 第二条 本組合事務所ハ組合長宅ニ置ク（仙台市中田字壇腰一八番地）
- 第三条 本組合ハ同業者奨励及親睦ヲ図ルヲ以テ目的トス
- 第四条 本組合ノ目的ヲ遂行シ事務ヲ統務スル為メ左ノ役員ヲ置ク
- 一 組合長 一名 副組合長 二名 理事監事 若干名  
部長 五名 顧問 若干名
- 第五条 役員ハ総会ニ於テ組合員中ヨリ選任シ任務ハ各二カ年トス
- 一 組合長ハ組合一切ノ事務ヲ総理ス 副組合長ハ組合長ヲ補位シ組合ノ事務一切ヲ処理ス  
尚組合長代理ニ任ズ 理事監事ハ組合長ヲ補佐シテ本組合ノ名誉ヲ永久ニ持続スルモノトス  
顧問ハ組合ノ重大問題アルトキハ組合長ノ評議ニ参与スル事
- 第六条 各幹部ハ名誉職トシテ無報酬ノ事  
但シ賞状並ニ感謝状ヲ贈呈スル事
- 第七条 本組合ヲ維持スル為メ組合員ヨリ金式百円組合費ヲ徴収ス 経費ハ毎月二十五日マテ集金ノ上会計ニ納金スルモノトス
- 第八条 組合費ハ会計ニ委任シ 銀行ニ委託スル事  
但シ通帳ハ会計ノ保管トス
- 第九条 新タニ組合員ヲラントスル者ハ申込書ニ記名調印ノ上本組合事務所ニ提出スベシ
- 第十条 本組合員ニ於テ式ヶ月以上及ビ急病ニ罹リタル時組合員ノ両親及ビ業務ニ従事スル相続人ニ対シ金一、〇〇〇円ヲ贈ル 死亡ノ際ハ条例ニヨリ金一、〇〇〇円ヲ贈ル 火災ニ罹リタル時ニモ金一、〇〇〇円ヲ贈ル 組合員及配偶者死亡ノ際ハ花輪ヲ贈ル事 但シ組合員死亡シタル場合ハ組合長会葬スル事
- 第十一条 本組合ハ毎年四月中ニ於テ通常総会ヲ開催ノ上組合ノ事業ニ関スル一切ノ次項ヲ議決スルモノトス 又場合ニ依リ臨時総会ヲ開ク 総会ノ招集ハ二日前ニ通知ス 会員半数以上ノ出席ナキトキハ開会セズ 尚会計ハ年一回組合員ニ決算報告スル事
- 第十二条 本組合ニ於テ意外ナル費用ヲ要スル場合ハ役員協議ノ上担当ナル費用ヲ提出スル事  
但シ費用ハ組合員全体ノ負担トス
- 第十三条 役員会開催ノ時ニ茶菓子料トシテ一回巻仔円支出スル事
- 第十四条 本組合員ニ於テ使用スル印鑑左ノ如シ  
二寸四方 「仙台竹細工商工組合之印」 一寸四分四方 「仙台竹細工商工組合事務所之印」 七分四方 「仙台竹細工商工組合長之印」
- 第十五条 本組合同規約ニ違反シタル者ハ役員協議ノ上除名処分ヲナス 本組合ヨリ各組合ニ其ノ指名ヲ通知スル事
- 一 新タニ組合ニ入会スル者ハ二ヶ月分ノ組合費申シ受ケル組合費一ヶ年以上不納者ハ除名スル
- 二 役員三期以上を務メタル者ニ賞状ヲ贈ル事

右ノ通り定メマシク

昭和四十一年四月

役員

組合長	佐藤源之丞
副組合長	菅原清藏
兼會計	
副組合長	相沢 宏
理事	丹野子之松
全	佐藤英三郎
監事	高橋安雄
全	升沢 正
顧問	相沢長太郎
全	小関亀次郎
第一部長	高橋三郎
第二部長	大宮捨治
第三部長	高橋幸作
第四部長	佐藤祐幸

組員氏名

(第一部)

升澤 正章	木町通
丹野子之松	土樋
戸田 正	南小泉
高橋三郎	五ッ橋
小関亀次郎	原町五輪
相沢長太郎	河原町
相沢 宏	河原町

(第二部)

庄子清吉	長町
高橋安雄	長町
菅原清藏	長町
大宮捨治	長町
針生重治	長町
大谷政藏	長町

(第三部)

佐藤源之丞	中田町
高橋幸作	中田町
佐藤英三郎	名取市増田町
小関鎮治郎	名取市下余田
大友千年	名取市関上町

(第四部)

大友幸太郎	名取市高館
佐藤祐幸	名取市高館

資料1、2をもとに、市内における組合員の所在位置をみると、大きくは旧城下と近郊農村に分けられ、旧城下、すなわち都市部に比較的多くの職人がいたことがわかる。逆に時代変遷を見ると、旧城下の職人が大きく減少し、近郊農村部の職人が後まで活動していたということが出来る。こうした中で、長町近辺の職人の多さは際だっており、都市部と農村部を結ぶ場所に多くの職人が居たという



写真3 大宮竹材店の販売用竹資材

ことがいえるのかもしれない。仙台の竹細工の製品については第2節で改めて述べるが、篠竹細工によるザルなどは米研ぎに使うなど日用品の製造が中心であった。一方で、生業に関わる竹細工も多く、農作業用の道具であり、店舗販売用の什器や商品運搬用のカゴなども多数あった。また、城下土樋で竹細工業を営んでいた丹野家は、米研ぎザルなどは製造せず、もっぱらハナカゴと呼ぶ贈答品を盛りつけるカゴを作っていたという。主に蒲鉾店などに卸していたとのことで、単価の高い高級品を製造していたとのことである。仙台の職人はカラダケ、シノダケともに用いるため、明確な区分がどこまであったか不明であるが、職人の所在地は、そのまま販売するザル・カゴ類の種類を規定していた可能性がある。

組合は、規約の第3条に「本組合ハ同業者奨励及親睦ヲ図ルヲ以テ目的トス」とあり、親睦団体としての性格が前面に出ている。聞き書きでも、必ずしも全ての職人が入っていたわけではなく、また、入退会も自由であったという。一方で、組合に入っているということは製造技術の裏付けがある、という意味合いがあったという話もあり、竹細工職人および販売店にとっては意味ある存在でもあった。

こうした組合の性格とともに、実利面でも機能していた。戦後、竹細工の消費先が拡大する中で、北海道などへの販路を確保し、組合員内で共同出荷のような形式での販売を行ったりした。これらは組合長を中心に行われた。特に、河原町の相沢組合長は、長らく組合長を務め、こうした共同出荷などを仕切っていたという。

職人は、店舗を構え、製造販売する人と、自宅で製造のみ行い、竹細工屋や雑貨屋などに卸す職人がいた。また、前者の中には、竹細工を行うだけでなく、竹の販売を行うものもあった。三百人町の皆川家や長町の大宮家などがそうした職人で、こうした竹職人は比較的大規模に製造販売を行っていた。

また、後者、すなわち店舗を持たない職人は販売店からの注文に応じて製品を作っていた。こうした職人の中には、販売店を持たない専業職人と共に、農閑期を中心に製造する人たちがいた。いわば内職の竹細工職人である。内職の人たちは、それぞれ販売店と契約するようなかたちで、商品を製造していた。

### (3) 職人の技を継ぐ

ここでは、竹細工職人になるために弟子入りを経験した職人の修業時代から独立後の生活について紹介する。

竹細工職人、高橋幸作氏は大正15年生まれである。高等小学校を卒業した14歳のとき、六郷地区の竹細工職人に弟子入りし、職人への道歩んだ。実家では長男であったが、年の離れた姉が婿を取り

家を継いだため、家を出る必要があった。はじめは役場などへの就職も考えたというのが、当時「カゴヤとタガヤはくいこねえ」、すなわち竹細工職人と桶職人は食うに困らないといわれていた事から、竹細工職人に弟子入りする事になった。修業先は同じ集落から、1年先に弟子入りした人がいた事から、その先輩、アニキのついでで親が見つけてきた。

修行といっても特に何を教わるということはないという。師匠やアニキの作業を見て、見よう見まねで仕事を覚えていった。住み込みで、早朝から一仕事をし、朝食後直ぐに仕事、10時のお茶を挟み、昼食、3時のお茶と、決まった時間の中で、仕事を手伝いながら技術を盗み見し修行を行った。あくまでも修行なので給料が出るわけでもなく、暮れに蕎麦代としてオコツカイを少しもらうくらいで、大変な生活だったという。

最初にさせてもらった作業はヒゴ作りである。竹の割り方、はがし方を覚えさせられた。この技術を覚えるのに3年はほかかった。ここで、製品に応じてヒゴの厚さ、幅などの違いを覚える事になる。

この後編み方を覚えた。最初に作ったのは野菜籠である。六つ目編みの籠目は隙間大きいので、ここで立体的に編む事を覚える。次に竹細工の基本である米研ぎザルを作るようになる。話者は米研ぎザルが形になるようになったのは修行を初めて6年目であった。これは商品になんとかなるということで、話者いわく、米研ぎザルは米が目から洩れてはならないので、一番難しいザルであり、独立してからも編み方の研究を重ねたとのことである。

修業時代の道具は全て師匠から借りていた。この道具は、そのまま独立する際に師匠から送られた。高橋氏の場合は、竹割用のワリナタとノコギリをもらった。ワリナタは独立から60年以上たった現在も使える状態でもっている。

昭和20年、話者は独立した。一通りの技術を得たということで独立したが、「独立したらあとは研究しないといけない。先生は関係ないから」と述べるように、職人として最低限の技術を得ただけだったという認識のようである。師匠との関係は、その後多少のつきあいはあったが、必ず何をしなければならぬ、といった特別な関係が続くというわけではなかった。「関係は自由」とのことである。

独立した話者は実家を借りて職人としての一歩を踏み出した。農家からの注文を受けてザルやカゴを製造していた。昭和24年、結婚を契機に旧国道4号線沿いに自宅兼作業場兼店舗を得た。借家であったため、間取りの都合上、家の前に軒を伸ばしてそこで作業をした。

竹細工は原材料の竹をある程度保管しなくてはならないが、雨に濡れたり、日に当たると傷むため、その保管場所が大変であったという。以後、数回の引っ越しを経て、昭和40年頃、土地を購入し、以後、30年ほどの間店舗販売を続けた。平成7年に現在地に移転した。



写真4 高橋氏が師匠からもらったワリナタ



写真5 現在の店舗兼自宅 (高橋幸作氏提供)

## 第2節 製品の種類

### (1) 竹細工の編み目

竹細工の編み方は多様であり、数十種にのぼるとされる。その定義は明確ではないが、ここでは、工藤員功による編み方の種類をもとに整理をしておく [工藤1982]。

竹細工は大きく3つの部位の組みあわせになる。すなわち、本体、底部、縁である。本体と底部は同じ平面であるので、基本的な編み方の組み合わせとなる。縁は、竹細工の最後の作業であり、見た目だけではなく、編んだ竹を押しさえるという意味で重要な部分である。以下、基本的な編み方を解説した上で、底部、縁について解説する。

#### 【編み方】

##### ①ザル目編み

経竹に対し、緯竹を1本跨り1本潜に編み、段ごとに1本送にする（以下、編み方については、1跨り1潜1送と表記する）。目を詰めて編む。

ザルの側面に用いることが多い。経竹を2本揃える例も多い。



写真6 ザル目編み

##### ②四つ目編み

経竹に対し、緯竹を1本跨り1本潜に編み、段ごとに1本送にする（1跨り1潜1送）。ザル目編みと同様であるが、間隔を開けて編み、四角い目ができる。

カゴ類を編む際に用いることからカゴ目編みともいう。

この変形として、経竹・緯竹を斜めに置いて菱形に編む菱四つ目編みがある。

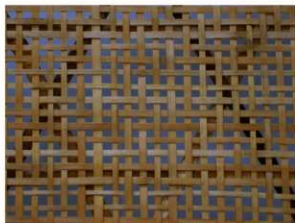


写真7 四つ目編み

##### ③六つ目編み

四つ目編みの菱形の交点上下に緯竹を編み芯として通す。中心の目が六角形を示す事からこの名となる。

カゴ類を編む際に用いられる事が多い。

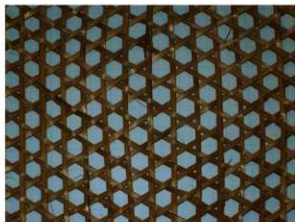


写真8 六つ目編み



#### ④麻の葉くずし

四つめ編みの変形の中央に緯竹を編み芯として入れる編み方。



写真9 麻の葉くずし

#### ⑤網代編み

経竹に対して、緯竹を2本跨2本潜に編み、段ごとに1本送(2跨2潜1送)が基本的な編み方とあるが、2跨1潜1送などバリエーションが豊富である。平面に編む場合は目を詰めて、同幅で編んでいき、ザル類の底部に用いるほか、全体を網代編みにして箱状のものを作ることもある。

また同様の編み方で、経竹の間隔を広げ、2跨2選1送で編むものを、松葉編みないし、仙台ではモロミ編みと呼ぶ。ザルの側面をこの編み方にした場合、ザル目編みに比して隙間が広くなるため、水切りの良いザルなどに用いられる。



写真10 モロミ編み(ザルの本体での網代編み)

#### [底部]

底部は四つ目底、網代底、菊底の3種が基本となる。

##### ①四つ目底

経竹・緯竹を目を詰めた四つ目編みで編んだそこで、経竹・緯竹が側面で経竹となる。方形のカゴ類の底の編み方として用いられる事が多い。

##### ②網代底

ザルの底部に用いる事が多い。ザルに用いる場合はヒゴを2本を並べ、4跨4潜2送で編むことが多い。

##### ③菊底

菊底は、板状の幅の広いヒゴを交差して重ね、重なるの切れる部分からヒゴを1跨1潜1送のザル目に編んでいく。経竹になる幅広のヒゴは、マダケであることが多い。一般にザルの底としては、東日本は網代底、西日本は菊底に分かれるとされるが、仙台においては一部のザル目編みの一部に菊底を用いる例がある。



写真11 網代底

### 【縁部】

縁は巻縁の系統と当縁の系統に分けられる。

#### ①巻縁

本体に用いたヒゴと同じヒゴを用いて螺旋状に巻いた縁である。また、螺旋の角度を垂直に近づける千段巻縁もある。角度が垂直に近づくほど手間がかかるが強固な縁となる。



写真12 巻縁

#### ②返し巻縁

巻縁の上に逆回転にヒゴを螺旋状に巻いた縁である。



写真13 返し巻縁

#### ③矢はず巻縁

2本のヒゴを交互に逆方向に巻いた縁である。

#### ④当縁

縁に対して、外周と内周に太い竹を回し、ヒゴないし樹皮で縛って固定したものである。巻縁が軽竹・緯竹と同素材を用いるのに対して、当縁はマダケやモウソウダケなど太い竹材を用いる。



写真14 当縁

## (2) 仙台の竹細工

仙台の竹細工は、マダケおよびシノダケを共に使った製品に特徴がある。

仙台竹細工商工組合では、製品の値段を定めた価格表を作っている。資料3は昭和40年4月に協定した価格表である。

[資料3] 竹細工製品価格表

定		
米揚簾		
十四本立	1000円	
十三本立	850円	
十二本立	750円	
十一本立	550円	
十本立	420円	
九本立	350円	
八本立	270円	
七本立	200円	
横田籠		
特大	2000円	
一番	1800円	
二番	1400円	
三番	1100円	
四番	900円	
三貫ノ	300円	(青ペン追記)
二貫ノ	270円	(青ペン追記)
芋籠	350円	
半切籠	250円	
腰籠	90円	
全皮製	150円	
果物籠		
一貫目入	30円	
七百目入	25円	
五百目入	20円	
御用籠		
二尺五寸	一尺五寸	1600円
高さ	一尺五寸	
二尺三寸	一尺五寸	1400円
高さ	一尺四寸	
二尺	一尺三寸	1200円
高さ	一尺三寸	
特大		1000円
一番		800円
二番		650円
三番		500円
手提		400円

右の通り協定す

昭和四十年四月

仙台竹細工商工組合

ここに、仙台において製造された主要な竹製品を何う事ができる。基本的には米揚箕、横田籠、果物籠、御用籠の4種で、それぞれ大きさにより値段が異なっている。また、ここに協定される規格化されたもののほか、顧客から要望や、使用目的に応じて求められる大きさ、形の製品も製造していた。

以下、各製品について解説する。

**[米揚箕]**

米研ぎに用いるザルである。シノダケのヒゴを使い、2本並べた4跨4漕2送の網代底に、経竹を2本組にした2跨2漕2送で編むものが中心となる。縁は巻縁である。

前掲資料にあるように、その大きさは「本」を単位を表す。

**[資料4] ザル定価表**

品名	直径	高さ	価格
8本	27cm	15cm	300
9本	30	18	400
10本	34	21	480
11本	37	25	650
12本	43	28	850
13本	47	30	1000
14本	52	32	1200

上記の通り協定します

昭和41年2月

仙台竹細工商工組合  
箕製造部

資料4は仙台竹細工商工組合箕製造部が発行した箕の価格表である。箕製造部がいかなる組織であったか、先に触れた同年の組合規約にはないためはっきりしないが、高橋幸作氏によれば、基本的に竹細工商工組合と同じとのことである。

さて、この資料では8本から14本までのザルの直径と高さが記されている。この本という単位は、ザル底部の網代編みの送る段数である。すなわち、8本だと8段の網代を編んでから経竹にして本体を編み出す。14本だと14段となる。底部の大きさが網代の段数により決まる事から直径が決まる事になる。高さは用意するヒゴの長さで決まるため、資料4のような協定を作り、高さを統一したものと見られる。いずれ、製品としての規格を整える必要があったのであろう。実際アサザル（浅箕）と呼ばれる高さの低いザルもある。

ザルにはチカラダケを入れる事もある。チカラダケは本体の補強のために、製品が完成した後、マダケ製の厚手で幅広のヒゴを外側から差し込む。編み終わったザルに指すため、力のいる作業であり、またマダケを用いる事から、内職の人はあまりせず、卸先である販売店に入れるものとされていた。

資料3には米揚箕のみの掲載であるが、このほか、本体をザル目編みではなく松葉編みにしたザルも作られた。この編み方をモロミ編みともいう。松葉編みはザル目編みに比べて隙間が大きいので、水切りのよいザルとして製造されるほか、こしあん作りに際して、小豆を漙す為にも使われる。また松葉ザルのアサザルは、煮魚を作る際、煮汁から魚を取り上げる為に使うといった用途もあった。

<資料から>



写真15 飯ザル



写真16 飯ザル (底部)



写真17 飯ザル (結接部)

資料名：飯ザル

法 量：直径30.6cm 高19.6cm

口 縁：巻縁

底 部：変形網代底 中央部 6踏6潜2送・6段

2踏2潜1送・11段（うち8段はスダケ裏面を使用）

本 体：ザル目網み 経竹2本組 底部10段 側部38段 足部14段

緯竹間隔 口縁部 12mm 本体中央部 14mm 台座部 8mm

竹 種：シノダケ・スダケ 竹幅：経竹・口縁部 3mm 緯竹 2mm

#### 〔横田籠〕

六つ目編みや四つ目編みのカゴを横田カゴという。底部側部ともに同じ編み方であることが多い。一般家庭用というよりも業務用のカゴとして、野菜の出荷などに用いられた。そのため、規格化されているものの、出荷する種別により注文に応じて作るという側面もあった。

横田籠もザル同様にチカラダケを入れ補強していた。

横田籠は、出荷用ということもあり、市場からの要望により段ボールにとって変わられ生産されなくなった。

#### [果物籠]

六つ目編みか四つ目編みの浅籠である。八百屋などで野菜や果物の店頭販売時の籠として使われるものである。単位が貫目になっているように、販売する重さの分載せられるサイズが決まった。また値段の通り、大量に生産して卸すものであった。ある話者は果物籠は量を作らないといけなし、利益も小さいのであまりやらなかった、と話している。

#### [御用籠]

荷運びに用いる御用籠は、米揚籠、横田籠と並び、仙台の竹細工の主要な製品であった。

製法は、底をマダケのヒゴを使って四つ目編みにし、そのまま経竹とする。緯竹もマダケ製のヒゴをつかい、ザル目に編む。口縁部はマダケを使った当縁で、おなじヒゴをチカラダケにする。チカラダケは長辺部で4本程度、短辺部には持ち手の回りに2本程度入れる。多くのチカラダケを入れるため、強固な作りとなる。

短辺部に持ち手を作るが、持ち手部分にはトウヅルと呼ばれる中国産の蔓を用いて角を取ると共に、チカラダケを縛る紐として用いる。なおトウヅルも竹材店で扱っており、竹の購入時に併せて入手した。



写真 18 御用籠

#### [資料 5] 御用籠価格表

定		
手 提	四百四十円	
三 号	五百二十円	
二 号	六百円	
相 型	六百八十円	
一 号	七百二十円	
特 大	千百六十円	
二 尺	千三百二十円	
二尺三寸	千四百四十円	
二尺五寸	千六百四十円	

但し総折曲の場合は一ヶに付き五十円高

下帯の場合一ヶに付き三十円高

一号まで高さ一寸に付き五十円高 特別注文はこの限りにあらず

昭和四十年十一月一日

仙台竹細工御用籠組合

資料5は、資料4同様御用籠組合というかたちで、御用籠の規定を定めたものである。こうした単産の組合や部会が作られ、価格ほか取り決められるということが、竹製品として重要視されていた事を示している。

また、大きさから値段が定められているが、末尾の但し書きにあるように、同じ製品でも施主からの注文により改造がなされている事がわかる。解説すると、総折り曲げは、通常外側のみ入れるチカラダケを、上部で返して内側に差し込むということである。また下帯は、底部からの立ち上げた部分に横向きに帯状のチカラダケを入れる事である。ともに強度が上がるため、重量物を運搬するときなどに必要な補強である。

ある話者は最大で3尺ほどの御用籠を作ったという。また、竹の生態上あまり地元での生産が盛んではない八戸方面から魚市場で使うということで、手提を大量に受注したという話や、前記の仙台竹細工商工組合で一括して受注したのも、北海道から注文のあった御用籠であった。このように御用籠は仙台の竹細工にとって重要な産品であり、また物流が整備された戦後は仙台以外にも需要のある商品であった。

## 第2章 竹細工の下準備

### 第1節 竹細工の道具

#### (1) 大宮竹細工店の道具

本節では長町6丁目にて現在も竹細工製品の製作・販売業を営む大宮竹材店所蔵の竹細工制作道具について記述する。大宮竹材店は現代表取締役の大宮捨治氏（大正11年12月生）で2代目である。店舗は現在長町6丁目の本店と長町一丁目の2店舗である。

#### 【ワリナタ】

- ①竹を割る際に使う両刃のナタ。竹を割る際には、切れ味の良いナタは使わない。写真は切れないナタ。竹を割る際にはモト（竹の根元の意）からサキ（竹の先端の意）にナタを向けて割る。



写真19 ワリナタ①



写真20 ワリナタ①

- ②捨治氏が作業中最もよく使うナタ。



写真21 ワリナタ②



写真22 ワリナタ②刃先

- ③写真は刃のついているナタでよく切れる。



写真23 ワリナタ③



写真24 ワリナタ③刃先

- ④刃のついていないナタ。

最近購入した物であり使っておらず、サビなどは無い。



写真25 ワリナタ④



[セン (ケズリナタ)]

竹の節や余分な肉を削ぐために使用するナタ。捨治氏は家族間では「セン」と呼んでいる。



写真26 セン



写真27 セン (先部)



写真28 セン (持ち手部)

※裏面に刻印。

郷  
六  
保  
険

[サンカクギリ]

ゴヨウカゴを作成する際など、ハリガネを通す穴を開けるために使用する。

ギリにはサンカクギリとマルギリがある。サンカクギリの方が「仕事が速い」が、物によってはゆっくりと穴の開くマルギリが適している場合もある



写真29 サンカクギリ



写真30 サンカクギリ刃先

[マルギリ]



写真31 マルギリ



写真32 マルギリ刃先

[ノミ]

竹の節や余分な肉を削り落とし材料を薄くする際に使用する。竹の丸さを残したまま裏を削ることができる



写真33 ノミA



写真34 ノミB



写真35 ノミC



写真36 ノミD

[コテ]

平面に編んだ竹を直角にオコス（立てる）際に火にあぶって使用する。タケゴウリなど、立方体の形状の製品を作る際に使う。



写真37 コテA



写真38 コテB



写真39 コテC



写真40 コテD

### [ヒゴノキ]

作ったヒゴを一定の幅に整える「ハバノロエ」という作業をする際に使用する。板に差した小刀の刃の位置を変えることでヒゴの幅を調整する。



写真41 ヒゴノキ



写真42 ヒゴノキの刃面

### [ハサミ]

ヒゴを切る際に使うハサミ。



写真43 ハサミA

ハサミB

カゴなどの縁を巻く針金を切る際に使うハサミ。



写真44 ハサミB

### [ヒゲトシ]

大宮竹材店にて捨治氏と同時期に働いていた金州周吉という職人の道具。すでに金州氏は亡くなっており、形見として持っている。



写真45 ヒゲトシ



写真46 ヒゲトシ刃面

[カタ]

ウドンやソバなどの水切りザルを作る際に用いる。同様の大きさのザルを作る必要があるため、型を用いる。ザル型の部位は工程に応じて垂直に立てることもできる。



写真47 カタ



写真48 カタ（垂直利用時）

[ビジョ]

ハリガネを巻く前の行李の縁を押さえるために使用する。縁の4隅を押さえるため、一度に4つのビジョを使う。



写真49 ビジョ



写真50 ビジョ

[メドオシ]



写真51 メドオシ

[ユミハリノコ]

伐採してきた竹を必要に応じて切断する際に使用する。竹の伐採に使用することはなく、細工専用のノコギリ。



写真52 ユミハリノコ



写真53 刃部

### [カンナ]

竹の裏面の肉をそぎ落とす際に使用する。



写真54 カンナ



写真55 カンナ刃面

以上、大宮竹材店に保管されている竹細工制作道具を見てきた。大宮氏の作業場には一人で使うには十分すぎるように思えるほど道具の種類は豊富でそれぞれの本数も多い。大宮竹材店では先代の頃には弟子を数人受け入れ、修行させていたという話もあり、弟子または共に仕事をしていた職人たちの道具も保管されていると思われる。

### (2) くす玉製作用具

現在升澤竹細工店や丹野幸一氏などはザルやカゴ類は制作しておらず、七夕のくす玉のみ制作している。そのため、道具もくす玉に特化したかたちで残り使用している。以下、仙台七夕のくす玉製作で 사용되는主な用具について記述する。

### [竹割り]



写真56 ナタ (両刃・表面)  
全体27.5cm  
刃部16cm



写真57 ナタ (裏面)

[ヒゴ作り]



写真58 ナタ (両刃・表面)  
全体24.5cm 刃部14.5cm  
日本刀を改良したもの



写真59 ナタ (裏側)

[編み]



写真60 くす玉の型 (6寸用)  
全体41.5cm 球形部15cm  
径19.5cm



写真61 くす玉の型 (横)



写真62 くす玉の型をはめる台（台座付き）  
台座42.5×15cm 厚さ22cm  
台部27.2×11.2×17.8cm 筒部44cm  
径3.2cm

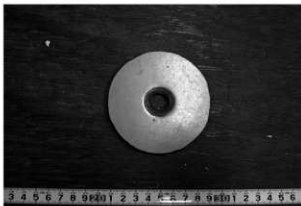


写真63 くす玉と型を固定する板  
径8.5cm



写真64 板を固定するねじ  
8.5cm

[その他]



写真65 くす玉の型  
床に型を書き代わりにこの型を敷いてその上  
からヒゴを組む



写真66 くす玉の下組み①  
何セットか作っておく



写真67 くす玉の下組み②



写真68 バカボウ①  
くす玉のできあがりの寸法が目盛りとして入っている  
もので、定規より一目で確認しやすい



写真69 バカボウ②  
寸法を確認する



写真70 曲げ輪①  
くす玉の下に付ける吹流しに使う



写真71 曲げ輪②  
バカボウをあてて寸法を確認する



## 第2節 竹細工の原料とその入手

竹細工製品を作るに当たって当然ながら必要不可欠なのは原材料の竹材である。ここでは竹細工に用いる竹材、とくにマダケについて述べたい。

### (1) 竹材の採取

竹細工製作者が竹材の入手する方法は大きく分けて2通りある。一つは自らが竹林に入り望む竹を選んで切り出してくる方法、もう一つは専門の卸業者を通じて入手する方法である。

前者の場合、道すがら「良い竹があったので」と切り出してくるわけにはいかないため、自らが竹林を所有するか知人や友人所有の竹林から取得する、または営林署の許可を得て公有地から切り出すことになる。竹材採取の範囲も多くが県内が中心となる。直接採取の場合は自ら出向いて選別する時間と手間が必要となるが、製作者の望む竹材を得ることができるというメリットがある。とはいえ、竹の利用が激減している昨今にあっては竹林の手入れ自体がされず、放棄されたままになっている竹林も多いため、良い竹材の入手は難しくなりつつある。現在も自ら竹材採取を行っている丹野幸一氏によれば、伐採時期は2月から3月頃の気温が6度から7度になる晩冬が最も適していると話す。この時期の霜に当たった竹は虫も食わずカビも生えにくいという。伐採年齢は竹材の使用目的によって異なるが、丹野氏は周囲の長さが5寸ほどの1年目の竹を主に伐採している。細割して使うため、弾力のある比較的若いものが使いやすいと話す。

一方、後者の場合には必要に応じた分量を卸業者に連絡し作業場で運搬してもらう。宮城県内の場合には仙台市に北隣する富谷町内の若生竹材店に竹材の卸を依頼する竹細工業者が多い。市内の竹細工店では升澤竹細工店（木町通）、大宮竹材店（長町）、高橋かごや（東中田）が現在も若生竹材店を通じて竹材を入手している。若生竹材店で取り扱っている竹は全てマダケで、茨城など関東方面、県内では白石市や県北から入手している。竹の周囲の長さが5寸～6寸の新しい竹が細工には使いやすいといい、竹細工にはジモノ（地物、国産の竹の意）が好まれる。卸業者から入手する場合でも品質が全て一定とはいえないため良い竹材の選別を要する。かつては良い材料の選別が職人の技量の一つとされたという。若生竹材店に竹材の仕入れを依頼している升澤竹細工店ではシンコと呼ばれる1年物の竹を仕入れている。産地については県内産の竹は堅くて割りやすいが関東地方など南に行くほど竹は柔らかくなり、使いづらいという。



写真72 富谷町若生竹材店に保管されているシノダケ



写真73 大宮竹材店に保管されているマダケ

現在も営業を営む竹細工業者のほとんどが若生竹材店との取引を行っているということからも市内における竹材の調達に関しては卸業者を通すかたちの集約化がなされていたとみることができ。加えて、竹の青みを保たせ新鮮な状態で保管することが求められるため、一定規模の土地や施設が必要であり、市内中心部における竹材の入手は業者を介して行う方が都合が良かったと推測される。

マダケ以外の竹材利用に関しては、現在仙台市内ではほとんど確認できない。現在でもシノダケを用いた竹細工を行っている宮城県大崎市岩出山においてもシノダケを扱う業者はなく、基本的に各自が必要な量のシノダケを山林から調達する。毎年12月頃に1年間に使う量のシノダケを確保するため大変な重労働だという。

### 第3節 ザイリョウ作り

「ザイリョウ」とは原材料であるマダケやシノダケから各竹細工製品に応じて必要な長さ、幅、厚さに作るヒゴのことを指す。ザイリョウ作りは竹細工製作において最も重要な工程であり、製品の出来は8割以上ザイリョウ作りにかかっているという。本節では入手した竹を割って竹細工製品それぞれに応じたザイリョウを作る工程に関して触れていきたい。

#### 〔竹割り〕

竹の品種や太さなどにより細かな工程は異なるが、竹細工のザイリョウを作るにあたってまず行うのが「竹割り」と呼ばれる作業である。製品の大きさや必要な部位の長さごとに竹を切断した後、通常は竹を縦に4分割する「荒割り」からはじまり、細分化していく「小割り」を行う。ワリナタを竹の先端部の「サキ」から割り口に差し入れ、根本の「モト」へと押し込みながら二つに分けていく。シノダケの場合はこれを2回繰り返して4本に分け、マダケの場合は太さに応じて6本から8本に小割りする。マダケはモトの方が肉厚でサキとは太さが違うため取れる本数も異なる。この場合ヒゴの幅が両端で変わってしまうため、竹割りの前に竹材を必要な長さに切断する。



写真74 割った竹を薄くする様子 (丹野氏)

竹割りの際には刃のついてない両刃のナタを使う。これは製作者が誤って怪我をする危険性を減ずるのはもちろんだが、切れないナタを使うことで竹の繊維に逆らわずに割ることを企図するものである。つまり鋭いナタを使うと竹のサキからモトへとナタを進める際に繊維の向きとは異なる方向に刃が入り、割れ目や断面が曲がってしまうのである。そのため、ナタの刃を研ぐこともしない。長い間使っているワリナタの刃は部分的に減っ

ている。加えて片刃のナタを用いると竹の割口が一方に偏ってしまうため、両刃のナタを用いる。製作者によってはナタで竹の先端部に割り口を開いた後は竹や木の棒を挟み込んで割るという方法をとっている。竹割りでは分割した全ての部位の断面が同じ角度と幅になることが望ましいとされる。

#### 〔ヒゲ取り〕

一定の幅に割った竹を作ると、次は竹の表皮部分を剥ぎ取る「ヒゲ取り」を行う。竹は表皮が最も繊維が密で丈夫であり耐久性もあるが、内側の内部になるほど繊維が荒く強度は弱くなる。つまりザルやカゴなどの生活用品製作に用いるのは表皮に近い部分のみでその他の部位はほとんどを廃棄する。一方で七夕のくす玉などは当初廃棄していた肉の部分を使って作ったという話もあり、ザルやカ



写真75 ヒゲ取り作業の様子 (升澤氏)

ゴの作成に用いない部位を流用した可能性も考えられる。竹は「薄くしようと思えばいくらでも薄くなる」というほど、剥離性が高く、表皮部分のみを剥がし取ることが可能である。だが、薄くするほどヒゴの強度や弾力性も失われるため細工の用途に合わせて厚さを変える。

竹を剥く際は、表皮面を上にして剥くのが普通だが、剥ぎ方は人によって様々である。下部のヒゴを足の指にはさんで剥く人もいれ

ば、竹を脇に抱くようにして下部を一方の手で受けるようにして剥ぐ人もいる。上部のヒゴを口にくわえて剥ぐ人もおり、一様ではない。

【ハバキメ】



写真76 ハバソロエを行う様子（大宮捨治氏）

ヒゲ取りを終えるとザイリョウの準備はある程度完了となるが、製品によってはヒゴの幅を正確に揃える「ハバキメ」やヒゴの角を落とす「面取り」を行う。細工の丁家なものは、こうした調整によって完成度が変わる。

ハバキメでは刃の向きの異なる小刀を台木に刺したハバソロエという道具を用いる。ハバソロエは小刀の刃の間隔を変え、その間にヒゴを通してヒゴの幅を一定に揃える道具である。米揚茶などは米粒が漏れないように幅

の統一されたヒゴが必要なため、こうした道具を使って幅を均等に揃える。

【面取り・その他】

この時点のヒゴの断面は角張っており繊維がささくれだった状態で残るため、製品によっては面取りを行って角を落とす。面取りはそのほとんどをワリナタを使って行う。とくに台所などで使うザルは、面取りをしたヒゴで編んだものが多い。水切れがよくなり、米などの粒がヒゴの間にはさまらないからだという。面取りは小刀などにヒゴの幅にあわせて何種類かの溝をつけたものを使うが、極端に細いヒゴでは、ナタや小刀で一つ一つの角を慎重に削る。これらの作業を経てあらかじめの竹のザイリョウ作りが終わる。細工によっては表面をなめらかにし、ヒゴの厚みを一定にするなどの作業がある。とくに御用カゴなどに用いる緑竹や力竹は、編み竹のように細かなヒゴは使わないが、内部を多少削ったり、角を落とすなどしなければならない。その際使う道具はワリナタとは異なり、センと呼ばれる両方に柄のついた片刃の道具である。また、力竹は細工に合わせて腰部でほぼ直角に曲げるため、マルノミという刃先のU字型になったノミを使い当該箇所の肉を薄く削る。

こうして細工に合わせたザイリョウ作りが済むと、編む作業へと移る。同種類の製品を同時に作る場合やくす玉作りなど短時間に相当数の製品を作る必要がある場合はこれらのザイリョウ作りが非常に重要となる。くす玉作りの際は出荷時期には毎日編む作業を行う必要があるため、升澤氏は時間に余裕のある時期にザイリョウ作りを集中的に行っている。



写真77 センで余分な肉を落とす様子（大宮捨治氏）

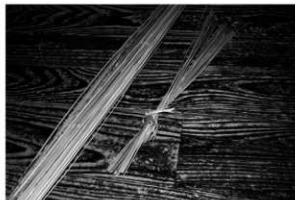


写真78 必要分量にまとめたザイリョウ（高橋かこや）

### 第3章 組み編みの技術

#### 第1節 製ザルの過程

本節では仙台市歴史民俗資料館製作ビデオ『竹細工-升澤孝雄さんの技術-』（1993）より、升澤竹細工店の升澤孝雄氏のザル製作技術について概観する。

##### (1) 製ザル技術保持者

仙台市本町通の升澤竹細工店の升澤孝雄氏は、現在は店を引退されており、兄の息子である正章氏が店を継いでいる。孝雄氏は昭和4年10月4日生まれで、13歳のときから父親について兄とともに修行を始めた。もともと繁忙期には手伝いをしていただけ、いわゆる一般の弟子のように竹割りから始めるということではなかった。修行当時はクズカゴという製品が多く出荷されていたので、そのガワ作りを主に行っていた。その後昭和18～20年の間は戦争のため一時中断したものの、終戦後は本格的にザルやカゴの製作を始めた。昭和32年に結婚し、平成5（1993）年の現役当時は、実用的なザルやカゴの製作から民芸的なものまで幅広く手がけていた。仙台七夕のくす玉は1年間で3600個製作し、仙台市内のくす玉の7割は孝雄氏が製作していた。

孝雄氏によると、「竹細工職人はザルとカゴの作り方を覚えれば一人前」とされ、それでいたい生活が成り立つようになる。「何年修行したら一人前」ということはなく年数に限りはないが、さまざまな種類の製品を作る職人になれたらほぼ一人前とされていたようである。製品作りの中で一番難しいのはザルの底編みであるという。

升澤竹細工店では、最盛期には御用籠や、盛籠、パンカゴのような細工がきれいな工芸品的なものを作った時期もあった。盛籠やパンカゴは戦争前までは輸出もしていたが、戦争をきっかけに止めてしまったという。それからはクズカゴ、茶碗籠、林檎籠、笹入れ籠、結婚式の引き出物の引き物籠を長く製作していた。それらもダンボールの登場により需要が減ってしまった。きのこ採り用のフゴや魚とり用のフゴなど、いろいろなものも作った。昔はザルやカゴだけ作ってれば生活ができたが、現在は一般家庭でほとんどこれらの製品を使わないため、製品として消えていくものが多い。

孝雄氏は竹細工の材料としてカラダケ（マダケともいう）、シノダケ、スズダケを使い、銭湯などの脱衣カゴの材料として知られるカンチクも使用していた。

仙台七夕のくす玉は、升澤竹細工店では終戦後から作り始めた。丸いくす玉に限らず、サイコロ状のものや扇状のものなども作り、松島の五大堂にも作ったことがある。このくす玉は4月から7月いっぱいかけて製作する。七夕が終わったら、翌年の七夕用のザイリヨウ取り（竹の調達、竹割り、ヒゴ作りなど）をしなければならぬくらい年間通して忙しい。

孝雄氏が製作していた製品として、カメノコザル、御用籠、腰フゴ、花籠、フリザル、盆ザル、コメトギザル、エサカゴ、炭入れ籠、半切り、玉入れ籠、干し籠、目籠、茶碗入れ籠、籠菓子入れ、くす玉などがある。

##### (2) カゴの製作工程（半切り）

###### 【竹洗い】

材料となるカラダケは、まず初段で水洗いして水槽に1日浸す。水洗いは左手で竹を回転させながら初段でこする。昔は洗わずにそのまま使用したが、製品としての見た目をより美しく見せるためにこの作業を行うという。洗った竹は作業場の細長い竹専用の水槽に入れて水に浸す。このようにする

ことで竹自体が柔らかくなり細工しやすくなる。

#### 【竹割り】

##### ①力竹作り

洗った竹はナタで割る。竹割りでは、右手にナタ、左手に竹を持ち、左手には指を切らないように親指にカバーをしている。一番初めの割りでは、ナタを竹のモト（竹の下の太い部分の意）の真ん中部分に刃を垂直にあてて押し、竹に食い込ませてひびを入れてから右手でナタをウラ（竹の先端の細い部分の意）方向へ動かしていきながら左手で竹を前に送り出して割る。太く固い竹のときは、ウラ方向へナタを動かして下から10cmほどのところまできたら、ナタを持つ右手を内側にひねって刃を寝かせて竹を二つに割る。

2分の1になった竹の割れた断面を、ナタを前に滑らせるようにして削って竹の内側の節やささくれを取り除いてから、また同じように竹のモトの真ん中部分にナタの刃をあて、少し食い込ませたら一気にウラの方へ（下方向への意）動かしていく。

4分の1になった竹の内側をセンで削り、節を取り除いて肉を削り薄くしていく。このとき、右ひざの上に皮革のような布をあててセンを持った右手を固定し、左手で竹を前後に動かして肉を削る。節の部分にさしかかったらナタの刃先を一度後退させて、再度強く前進させる動作を2、3回繰り返して節を削る。

次に竹の両側の断面をセンで削って角を取り、先端を三角に削る。この三角部分は内側の肉も薄く削る。

##### ②ヒゴを作るための小割り

2分の1に割った竹の先端部分の切り口に目安となるヒゴを当てて、等間隔に4箇所印を付ける。印を付けた竹をナタでまず半分分割り、そこから印に沿って4分割する。この作業を繰り返して最終的には1本の竹を16分割する。竹を小割りにしたら、ナタでヒゴの側面を削ってささくれを取り除く。

#### 【皮はぎ（ヒゴ作り）】

右手で竹割りより小ぶりのナタ、左手で皮を上にして竹を持ち、竹製品に使う表皮をはがしていく。ナタを竹の先端部分に対して水平にあてて切り込み、右手の親指と人差し指でナタを細かく自分の方向へ動かしながら左手は竹を小割みに前に送り出して、だいたい20cmくらいはがしたらはがされる側の竹を床に置いて右足で踏んで押さえ、はがす側の皮部分の竹をナタを持った右手で上方向へ引っ張りながらはがしていく。左手は竹の裂け目をつかみながら後方へすべらせていく。節部分にきたらナタの刃先を一度後退させて、再度強く前進させて節をさいてはく。そして竹を前へ送り出し、足で竹を押さえながら上方向へ引っ張り張ってはがしていく。竹割りのときはナタ自体の重みを利用して割っていくが、ここではナタと竹を双方向へ動かす力の加減によってはがしていく。

#### 【縁作り1回目】

##### ①竹を削る

力竹を作るときと同じようにして、センを使って竹の内側の節や肉を削って薄くする。先端を台形状に削り、側面の面取りをしてきれいに整える。この先端部分は力竹ほど尖らせない。時々竹を丸めてみたりしてよくなるか確認し、硬いようであれば更にセンで内側の肉を削る。

##### ②竹を丸めて固定する

しなやかに曲がるまで削った竹を、皮部分が外側になるように丸めて、1箇所をビジョウでとめる。

#### 【底編み】

ヒゴ（薄くはいだカラダケの表皮）を型に合わせて編む。このとき、型の上に表皮が上になるようにヒゴを置いて、足で型と置いたヒゴを押さえながら六つ目に編んでいく。カゴは六つ目が代表的で、編みの種類では基本となる。

次に4本のヒゴを使ってヒゴかけをする。これは底の幅を合わせるために行う。

#### 【腰立て】

型から外して、周りを編んでいく。これは腰立てと言い、平面だったカゴを立体にする工程である。1本目から3本目までの目がまっすぐ揃っていると最後まできれいに編める。立ちひざの姿勢でカゴを縦に持ちながら、右手で竹を上下に動かしたところから左手で竹を入れていき、時計回りに回しながら編んでいく。ときどき両手で網目を内側へ折り曲げたりしながら、6段目で編んでいく。

#### 【かざり】

余った竹をはさみで切り落とし、緑の部分をかざりしていく。かざりは緑部分の飛び出ている竹を両手を使って内側へおこむ作業で、先に製作した緑をはめやすくするために行う。

座り込んだ状態で両足でカゴを挟み、かざりしたところから緑をかぶせる。ビジョウを外し、緑をカゴの円周に合わせて鉛筆で緑に印をつける。一旦カゴから緑を外し、印をつけたところを再度ビジョウでとめる。

#### 【緑作り2回目と化粧ぶち】

カゴの円周に合わせてビジョウでとめた緑の重なっている部分を針金で巻いていく。このとき内側に化粧ぶちもつける。化粧ぶちは、緑の内側に入れてきれいにするためと、これを入れることによって製品の耐久性を高め、かざりした部分を隠すためにつけるので、緑よりも幅が細い竹を使う。つけるときは緑を両足で挟んで押さえ、竹の内部分のヒゴを内側に丸めて入れて緑と合わせて円周のサイズに合わせてから取り出し、重なる部分を針金を巻いて固定する。

#### 【緑巻き】

カゴに緑をはめて、化粧ぶちを内側に入れながらかざりした竹部分も内側へ折り返し、ヤハズを使って緑巻きをして固定する。

かざりした余分な竹のうち、邪魔な部分をはさみで切り落とす。

#### 【のみつき】

力竹の折る部分の内側を薄くするため、丸のみを使って少し削る。このときは、左手で力竹を持ち、左半身を寝かせながら右手で持つ丸のみに力を加えて削る。左足で力竹を固定する。

#### 【力竹をさす】

のみつきをした力竹を折ってから、カゴの底部に3箇所差し込む。緑から余った力竹の先端部分は、一旦手前に折り曲げて繊維を壊し、緑に巻く部分を薄くするためにはさみで切り取って柔らかくしてから、緑を渡して内側に折り込む。そこへヒゴを横にさして力竹を固定し、針金を巻いて固定する。

#### 【火であぶる】

最後に底編みのときにはみ出た竹などをはさみで切り落とし、バーナーで余分なささくれ立った竹を焼いて完成となる。

### (3) ザルの製作工程 (コメトギザル)

#### 【下準備】

コメトギザルに使用するのはシノダケで、編むには3年物のシノダケが良いとされている。

ナタで竹の表面を削り、きれいにする。

#### 【竹割り】

シノダケは四つ割りにする。材料として四つ割りが一番きれいに取れる。

まずナタで半分割り、下から10cmほどのところまできたら、ナタを持つ右手を内側にひねって刃を寝かせて竹を2つに割り、次にそのまま持ち続けて2本同時にナタで割っていく。こうすることで一気に4本のヒゴをとることができる。

#### 【皮はぎ（口とり）】

右手で竹割りより小ぶりのナタ、左手で皮を上にして竹を持ち、口を使って薄く表皮をはがしていく。ナタを竹の先端部分に対して水平にあてて切り込み、右手の親指と人差し指でナタを細かく自分の方向へ動かしながら左手は竹を小刻みに前に送り出して、だいたい20cmくらいはがしたら表皮側の竹を口で扶んで、口と手で上下にはがしていく。節の部分で一度止め、ナタで切り込んだらまた口と手で上下にはがしていく。ナタを持った右手は下の竹を引っ張り、左手は竹の裂け目をつかみながら後方へすべらせていく。

皮はぎでは口を使ってはいでいくが、口ではいでも良い材料とは、丸を作ったときにきれいな輪になるものをいう。

#### 【はばきめ】

ヒコ台を使ってはばきめをする。はばきめは、ヒゴの幅を一定に揃えることと、ヒゴの面取りのために行う。このことよりコメトギザルの水きりが良くなり、ヒゴの間に米が挟まらなくなる。ヒコ台にヒゴを通し、台に押さえつけながら左手でヒゴを手前に引いていく。

#### 【底編み】

型の上にはばきめで整えたヒゴをのせていく。底は網代編みで隙間なく編み込む。型通り編んだら隙間がないように細竹で交差するヒゴを詰める。

#### 【七まわしかけ】

網代編みから七まわしかけに移る。七まわしかけは、網代編みの四角形を編みながら円形にしている方法で、ザル作りにおいて難しい部分でもある。まず網代の周囲を、1本の七まわしかけのヒゴを折り曲げながら時計回りに編み始め、網代を編んだ両端のヒゴを広げるように7周する。

#### 【底まわし】

七まわしかけが終わったら底まわしに入る。底まわしとは、平織りで底を時計回りに編んでいくことである。七まわしかけが終わるとそれまで四角形でまっすぐだったヒゴが放射状に広がり、底も円形になっている。ここから平織りで底の部分を編む。

#### 【腰立て】

カゴ同様、ザルでも腰立ては難しく重要な工程であり、これがうまくいかないと米が漏れてしまう。ヒゴを一本ずつ横に時計回りに編みこんでいきながら、平面だったザルを立体にしていく。右手でヒゴを上下に動かして編みこんでいる横ヒゴをくぐらせたりしながら、左手でザルを回しながら調子をとっていく。左足の指先では編んでいる部分と反対方向のザルを扶んで押さえている。

#### 【たてひき】

ある程度編んだら底を平らにするために縦ヒゴを上につ引っ張る。このとき、ザルの中に足を入れて底を押さえながら、両手で縦ヒゴを上につ引っ張りながら回していく。そうすると縦ヒゴは2本ずつのセットになる。そこでこれまで編んできた横ヒゴの飛び出ている部分をはさみで切り落とし、更に平織りで編んでいく。

#### 【かぎおり】

編み終わったらかぎおりをして縁をつけ、縁巻きをする。このときのかぎおりは、右方向へ丸めて差し込んでいく。

#### 【縁作り】

縁をザルに合わせて丸め、ビジョウでとめたら針金で重なっている部分を巻いて固定する。

#### 【縁巻き】

ビジョウを外してかぎおりした部分へ縁をはめ、目抜きで縁の下部分に穴を開けていく。この穴にシンコのシノダケを通して縁を巻いていく。巻き終わりの部分は内側に折って内をはがして薄くし



て、目抜きでガイドしながら既に巻いてあるシノダケ部分に入れ込む。

**【力竹をさす】**

力竹を一旦折ってから、ヘラを使ってカゴの底部に3箇所差し込む。縁から余った力竹の上部は一旦手前に折り曲げて繊維を壊し、肉を取って薄くして2つに割ってから縁を渡して内側に折り込む。

**【火であぶる】**

最後に底編みのときはみ出た竹などはさみで切り落とし、バーナーで余分なささくれ立った竹を焼いて完成となる。

## 第2節 くす玉製作の過程

### (1) くす玉製作の背景

#### 【仙台七夕】

本節では、現在仙台市内のはますべての竹細工職人が現金収入の一つとして行っているくす玉作りについて概観する。くす玉は毎年8月に行われる仙台七夕において、市内各商店街で飾られる吹流しに付けられる球形の竹細工である。仙台市中心街のアーケードや仙台駅等に飾られる大型の飾りには、大小さまざまなくす玉が使用される。このように吹流しにつける飾りとしてくす玉が七夕に登場したのはだいたい昭和20（1945）年代半ばからで、昭和30（1955）年代から昭和40（1965）年代頃に流行が広まり、現在に至ると考えられている。近江恵美子によれば、このような七夕飾りの変化の背景にはいわゆる仙台商人がおり、大正15（1926）年の「七夕競技会」を始めとして昭和3（1928）年の「七夕飾り付けコンクール」などを契機に、七夕に競技性を持たせることで飾りや仕掛けが豪華なものへと変化し、それまでの従来の仙台七夕とは趣を異にした商店街の七夕が登場してくることになる。これらの経緯によって衰退していた七夕に活気を取り戻し、その後戦争による一時中断はあったものの、昭和21（1946）年には七夕は復興されて徐々に現在の姿となっていく [近江 2008]。七夕の復興期と前述したくす玉の登場時期がほぼ重なることから、くす玉は飾りを豪華にするために用いられるようになったことが伺える。この結果、くす玉を用いた吹流しは重量があるため、従来の細竹では支えきれないことから太い孟宗竹を使用するようになるなどの変化も見られる。

くす玉がいつ頃から登場したかについては、①一番町の森天佑堂主人森権五郎氏が七夕を華やかにするために発案した②常磐町遊郭の女性達が発案した（当時流行の「桜紙」でくす玉を作った）という説があるが、①が通説となっている。鳴海屋紙商事株式会社ホームページによれば、森天佑堂主人であった森権五郎氏が、昭和21年頃にカゴを2つ合わせて京花紙を貼って作ったものがくす玉の始まりであるとしている。また、今回の聞き書きの中では、肴町の板橋という竹細工職人が一番最初に竹のくす玉を作ったという話を聞き取ることができたが、これはかつて肴町界隈で演祭や七夕が行われていたことと関係があるのかもしれない。これらより、くす玉は当初、ザルやカゴなどを2つ合わせた形態であったが、次第に竹で作られるようになったということが推察できる。特にザルやカゴを2つ合わせた形態というのは、現在も市内各商店街で行われている七夕のくす玉に見ることができ、原町や八幡町などではこの方法でくす玉を作っている。

#### 【竹細工職人とくす玉】

平成21（2009）年3月現在で確認できる限りでは、4人の竹細工職人がくす玉を製作している。くす玉は七夕飾り製作者「鳴海屋」をはじめとした仙台市内の各製作者が竹細工職人へ注文をし、職人はそれを受けて製作する。だいたい5月頃に業者より発注を受け、5～7月はくす玉作りの最盛期となる。それぞれが製作する数は発注元である紙屋あるいはディスプレイ店によって異なるが、年間1500～2000個ほど作る職人もいれば、50個ほどしか作らない職人もいる。年間2000個近くのくす玉を職人が一人で製作するので年間を通して材料作りは常に行っているが、目安として5月までに使う材料はだいたい準備しておき、5月から本格的に編み始める。この材料というのは、マダケ（カラダケともいう）を割って薄くはがしたヒゴである。くす玉は5寸から3尺までと大小さまざまな大きさがあり、寸法によって使うヒゴも異なるため、作るものの寸法にあったヒゴをあらかじめ大量に準備しておくことで、5～7月の期間は編み方に専念することができ、効率よく大量のくす玉を製作することができる。

くす玉を編むという工程はそれほど手間がかからないが、竹を割り、薄くはがしてヒゴにする材料作りの工程が一番手間のかかる部分で、他の竹製品と同様に肝となる作業工程である。くす玉は1個

あたりの価格が寸法ごとに決まっています、数をこなして大量に製作すれば大きい金額となるので、いかに効率よく多くくす玉を製作するかが鍵となる。そのために職人は年間を通して材料作りに勤しみ、注文が入ったらすぐ製作に取りかかれるように準備しておく。

## (2) くす玉の製作技術

### 【くす玉製作技術保持者】

本調査においては、仙台市青葉区本町通の升澤竹細工店、同市太白区長町の大宮竹細工店、同市太白区東田中の高橋かご屋、同市若林区上飯田の丹野幸一氏の4名のくす玉製作者を確認することができた。このうち、升澤竹細工店がくす玉作りにおいて中心的存在であり、現在はくす玉のみを専門に製作している。

升澤竹細工店は竹製品の製作・販売を行ってきたが、先代の升澤孝雄氏の引退後はくす玉製作のみを行っている。当店でくす玉を作り始めたのは現店主升澤正章氏（昭和29年生まれ）の父親と升澤孝雄氏の二人が店をやっていた頃からで、だいたい昭和20年頃からだだったと記憶しており、その前の祖父の代にはまだくす玉はなく、やっていなかったという。二人で店をやっていた昭和30～40年代頃は3000～4000個のくす玉を製作していた。また、昔は高橋さん（仙台市太白区東中田）や戸田さん（仙台市若林区荒井）と職人間でくす玉作りを行っていて、他へは作り方を教えていなかった。正章氏は、平成16（2004）年頃に孝雄氏が引退する際にくす玉作りとザル作りを教わった。このときは1年ほど一緒に仕事をして覚えたという。現在は一人でくす玉作りを行っているが、昼間は外へ働きに行っているためくす玉作りの最盛期以外は週末や平日の仕事終わりに材料作りを行っている。升澤竹細工店のくす玉の主な発注元は「鳴海屋」（鳴海屋紙商事株式会社）と「ゴコウ」（看板屋）で、鳴海屋については昔から升澤竹細工店がほぼ専属で製作している。現在は年間1500～2000個のくす玉を製作しており、後継者はいない。なお、一番注文が多いサイズは1尺5寸や1尺8寸あたりで、200～300個ほどの注文がある。

大宮竹細工店では竹製品の製作・販売とくす玉製作を行っている。本店である大宮竹材店では竹材の卸販売も行っており、こちらから竹を購入している竹細工店もある。くす玉製作は大宮竹細工店の大宮信之氏が主に行っている。くす玉は河原町の「宍岐紙屋」や長町商店街、荒町商店街の一部店舗から発注があり、年間200～300個、多い時で400個のくす玉を製作している。

高橋かご屋は、店主である高橋幸作氏（大正15年生まれ）が初代で、くす玉作りは昭和20年頃から始めた。しかし昭和20～40年代頃は横田龍やザル作りに忙しく、それほどくす玉を作る余裕がなかったという。平成4（1992）年頃は年間700～800個のくす玉を製作していたが、現在は50個ほどである。主な発注元は河原町の「宍岐紙屋」である。現在後継者はいない。

丹野幸一氏（昭和29年生まれ）は、父も竹細工職人であり、かつては土樋で竹細工屋を18年間営んでいた。その頃に製作していた主な製品は果物籠や盛籠、結婚式の引き出物の引き物籠などの細工物のカゴなどであった。くす玉作りは父も行っていたが、作り方は誰かから教わったわけではなく、くす玉を見て材料や作り方を覚えたという。現在は年間1700～1800個のくす玉を製作し、それ以外にも3年前から吹流しに使う曲げ輪も製作している。他に門松なども製作し、地域の公民館等に納めている。くす玉の主な発注元は「なるみや」で、これは「鳴海屋」の分家である。

### 【製作工程の流れ】

#### ①竹の調達

くす玉の原材料はマダケで、升澤竹細工店では富谷の若生竹材店から購入している。竹は5本で1束になっており、円周が6寸の竹（これをロクスンボという）をだいたい5束（25本）ずつ仕入れ、年間では約30束使用する。また、丹野氏は竹林を持っている人の山に行き、2～3月中旬までに自ら

が竹を選んで伐採して調達している。高橋かご屋では、自分で竹を調達することもあったが、大宮竹材店や現在は相沢さんから竹を購入していた。相沢さんとは竹細工商工組合で会長をやっていた河原町の竹細工店である。自分で竹を調達するときは、名取のタルミズヤマで竹を刈り取り、リヤカーに乗せて運んできたという。その際、昔は木造の傾斜が急な橋を通らねばならず、大変な思いをして運んだと話す。

## ②下準備

### 水洗い

竹は初段で水洗いして水槽に1日浸しておく。こうすることで竹自体が柔らかくなり細工しやすくなる。昔は洗わずにそのまま使用したが、製品としての見た目をより美しく見せるためにこの作業を行うという職人もいる。

### 竹割り

竹割りではどの寸法のくす玉を作るかあらかじめ決めておいて、それに見合った寸法のヒゴを作れるように竹を割っていく。竹の寸法によってそこから取れる材料は異なるが、5寸のくす玉であれば幅約5mmほどのヒゴ、1尺5寸のくす玉であれば幅約7～8mmほどのヒゴが取れる。また、5寸のくす玉を作るには細くて身が厚くない竹を、1尺5寸のくす玉を作るには大きくて身が厚い竹を選んで作業を行うなど、常に出来上りを見据えた作業をしていく。

竹割りでは、右手にナタ、左手に竹を持つ（右利きの場合）。一番初めの割りでは、ナタを竹のモト（竹の下の太い部分の意）の真ん中部分に刃を垂直にあてて押し、竹に食い込ませてヒゴを入れてから右手でナタをウラ（竹の先端の細い部分の意）方向へ動かしていきながら左手で竹を前に送り出して割る。太く固い竹のときは、ウラ方向へナタを動かして下から10cmほどのところで、ナタを持つ右手を内側にひねって刃を寝かせて竹を二つに割る。

2分の1になった竹の割れた断面を、ナタを前に滑らせるようにして削って竹の内側の節やささくれを取り除いてから、また同じように竹のモトの真ん中部分にナタの刃をあて、少し食い込ませたら一気に下のほうへの方向へ動かしていく。

4分の1になった竹の割れた断面もまたナタで削って節やささくれを取り除き、同じようにまた削っていく。こうして約16分割する。

竹割りで使うナタは刃幅が厚く重みがあるので、人の力で竹を割るというよりはナタ自体の重みで竹を割るという仕組みになっている。ナタ自体に重量感があるため、それほど力を入れなくても一度ヒゴを入れたら竹は繊維に沿って素直に割れる。竹割りでは左手で調子をとりながら竹を前へ送り出すが、割る竹が細くなるにつれて左手の竹を送り出すスピードが小刻みになる。右手のナタの動かし方も竹が細くなるにつれて小刻みになっていく。途中にある節部分では特に注意しながら割る。

### ヒゴ作り



写真79 竹にナタをあてる

竹割りで16分割したヒゴを、今度は竹割りのときよりも刃が薄く小振りのナタを使って3～4枚に割っていく。この割く行為を「はがす」または「へがす（べがす）」といい、「1枚べがし」「2枚べがし」というような言葉として使用される。竹はモトとウラで厚さが異なるため、モト部分だと4枚、ウラ部分だと3枚にはがすことができる。

はがすときは、まず右手にナタ、左手に皮を上にして竹を持ち、初めに皮部分をはがしてい



写真80 竹を割る



写真81 半分にした竹を更に半分に割る

く。ナタを竹の先端部分に対して水平にあてて切り込み、右手の親指と人差し指でナタを細かく自分の方向へ動かしながら左手は竹を小刻みに前に送り出してはがす。竹割りのときはナタ自体の重みを利用して割っていくが、ここではナタと竹を双方向へ動かす力の加減によってはがしていく。

次にはがした皮部分を更に2枚にはがす。皮部分を上にして竹を持ち、先端からだいたい20cmくらいまでは同じような動作ではがしていき、はがされる側の竹を床に置いて右足で踏んで押さえ、はがす側の皮部分の竹をナタを持った右手で上方へ引っ張りながらはがしていく。左手は竹の裂け目をつかみながら後方へすべらせていく。節部分はナタの刃先を一度後退させて、再度強く前進させて節をさいてはがす。そして竹を前へ送り出し、足で竹を押さえながら上方へ引っ張ってはがすという動作を繰り返して2枚にはがしていく。

次に、一番初めに2枚にはがしたときの肉（竹の内側部分で身ともいう）を2枚にはがす。はがし方は上記と同じで、2枚にはがしたうちの1枚は廃棄し、くす玉の材料であるヒゴが完成する。

ヒゴを保管するときはヒゴの強度や厚みなどの性質ごとにそれぞれ分けて束にしておく。

以前は竹製品を作る上で竹の肉は細工に不向きで不要なものだった。竹の皮部分は強度があり見た目にもきれいだであるが、身部分は強度がなく、いい竹製品を作るのに適していなかったからである。しかしくす玉作りにおいては、ある程度の強度は必要ながらも球形にするためには柔らかさやしなやかさも必要で、かつ出来上がったくす玉は紙花で全体的に装飾されることから竹の皮部分を全面に使用する必要がない。結果としてくす玉以外の竹製品作りに不要な竹の身部分を、くす玉の材料に転用したのである。

こうしてみると、竹製品の材料を作る段階においては、竹の性質の見極めが重要となることが分かる。竹のモトとウラとでは皮の厚みが違うため、モトは大きいくす玉を作るときやくす玉の直径部分（これをマワシ、あるいはセキドウという）に使い、ウラは柔らかいので小さいくす玉に使う。つまり、モトは頑丈であるので押さえ部分や大きいくす玉に向いているが、逆に柔軟さが要求される小さいくす玉には向いていないということで、このような竹の性質を見極めて適材適所に竹を利用することが竹細工職人として重要な技術の一つである。

また、材料のヒゴはとにかく多めに用意しておき、くす玉を編んでいる最中にヒゴが不足しないようにしている。これは編みの段階でヒゴ作りをするとその分作業の効率が落ち、生産性も落ちてしまうからである。材料となるヒゴ作りは、年間通して常に竹細工職人の仕事の中で欠かせないものであり、一番手間がかかる分重要な作業なのである。

### ③編み

本来は何十個単位で製作していくのでヒゴの束ごと水槽へ1日中浸しておくが、1個だけ製作するときはあらかじめ準備しておいたそれぞれのヒゴの束から、数本ずつ取り出して水に浸し、水気を持



写真82 竹をはがしてヒゴにする



写真83 ヒゴ作り



写真84 ヒゴ作り



写真85 竹を途中までさいたら口にくわえて一気に  
がす



写真86 さいたヒゴは皮と肉などの部位によって分け  
て束にして保管する



写真87 30号（3尺）のくす玉用のヒゴ

たせる。これは編んでいくときに竹同士が滑らないようにするため、水気を含まない竹ヒゴの表面はつるつるしており、竹同士を重ねると逃げてしまうからである。また、水気を含ませることで竹にしなりも出る。

編みの工程は大きく分けて3段階に分かれる。まずは作業場の床に書かれた寸法見本である型に合わせてヒゴを編む。これがくす玉の縦ヒゴとなる。次に床に固定した台に作る寸法のくす玉の型を設置し、そこへ先ほど床で編んだものをはめて固定し、横ヒゴをくす玉の直径部分（マワシ、セキドウと呼ぶ）まで編む。最後に型から外して型を使わずに残りの横ヒゴを編み、編み終わりと余計なヒゴの処理をする。以下では升澤氏に6寸のくす玉を製作していただいた際の製作工程を順に見ていく。

### (3) 6寸のくす玉の場合

- ① 6寸のくす玉を作るために必要なヒゴを選別する。
- ② 床に書かれた型に合わせてヒゴを並べながら組んでいく。初めに円の直径にあたる部分に1本のヒ

ゴを置く。以下ここで使われるヒゴは幅3mmのものである。

- ③そこから反時計回りに2本のヒゴを放射状に重ねる。このときヒゴがずれないように左足で踏み、左手でヒゴの重なる部分を押しさえる。この時点で3本のヒゴが型の上に並んでいる。
- ④4本目のヒゴから組んでいく。1本目のヒゴを上に通して、3本目のヒゴの横に放射状に並べる。
- ⑤5本目のヒゴは2本目のヒゴを上に通して、4本目のヒゴの横に並べる。6本目のヒゴは3本目のヒゴを上に通して、5本目のヒゴの横に並べる。
- ⑥7本目からは2本通しになる。3本目と4本目のヒゴを上に通して、6本目のヒゴの横に並べる。7、8本目のヒゴは4本目と5本目のヒゴを上に通して、7本目のヒゴの横に並べる。これを15本目まで行って一周させる。
- ⑦一周したら組み始めの3本と組み終わりの3本を持ち、組み終わりの3本を下に敷いて、14本目と15本目の2本のヒゴを上ヒゴ1本に通す。13本目と14本目の2本のヒゴを上ヒゴ1本に通す。12本目と13本目の2本のヒゴを上ヒゴ1本に通して、組み始めと組み終わりを結合させる。
- ⑧編み目を整え、ヒゴの交差を入れ替えたり、中心部分の6cmの空洞部分を両手で引っ張ったりしてしっかり組んでいるか確認する。これらの15本のヒゴがくす玉の縦ヒゴとなるが、大きいサイズであれば本数が増え、小さいサイズであれば本数が減る。これでくす玉の立ち上げ前の編みが完成する。
- ⑨くす玉の球形の型をはめる台を床に固定して型を設置し、編んだくす玉を型にはめて、円形の板とねじで固定する。
- ⑩幅2mmのヒゴ2本を組み合わせて4mm幅にする。固定した部分から約6cmの部分から縦ヒゴを1本ずつ交互に飛ばしながら時計回りに横に編みこんでいく。このとき左手で横に編みこむヒゴを押しさえながら、右手で縦ヒゴを交互に編みこみながら立ち上げていく。型は回転式なので勝手に回らないように左足のひざで押しさえるが、適宜回しながら行う。
- ⑪次に幅6mmで他のヒゴより少し厚みのあるヒゴを、一段目の横ヒゴから約4.5cm間隔をあけた部分に編みこんでいく。これはくす玉の直径部分にあたり、マワシまたはセキドウと呼ばれる。この真ん中部分は強度が必要なので厚めのヒゴを使う。編み方は工程⑩と同じである。
- ⑫マワシを編みこむとくす玉を型から外す。くす玉を抱えるようにして持ち、幅2mmのヒゴ2本を組み合わせて4mm幅にしたものをマワシから4cm間隔をあけて時計回りに横へ編みこんでいく。編み方は工程⑩と同じである。くす玉の型はマワシ部分まで編んで立ち上げるのに使用する。
- ⑬3つの横ヒゴを編み終わったら、余った縦ヒゴ部分を交互に編みこんでいく。初めに左からヒゴを1本ずつ右のヒゴへ編みこんでいく。一周したら反対に右からヒゴを1本ずつ左のヒゴへ編みこんでいく。一周したら更に左からヒゴを1本ずつ右のヒゴへ編みこんでいき、最終的には始めにヒゴを組んだときと同じ直径6cmの空洞になるように調整をする。
- ⑭余った縦ヒゴを内側に折りこんでいき、緑の部分は回しながら1本ずつ編んでいく。
- ⑮両手でくす玉を押して強度を確認したり、ヒゴがしっかり組まれているか確認したりしながら、更に飛び出ているヒゴをくす玉の内側に編みこんでいく。
- ⑯くす玉を両手で抱えてヒゴを引っ張ったりして形を整え、飛び出ている余計なヒゴをはさみで切り落とす。

以上の全工程合わせて13分ほどで6寸のくす玉が完成する。1尺5寸以上のくす玉を作る際には、半分ずつ製作してつなぎ合わせる。

(4) くす玉製作工程写真



写真88 使うヒゴを選別する

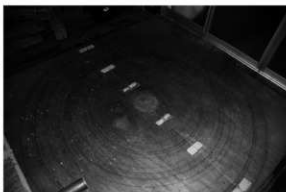


写真89 作業場の床に書かれたくす玉の型



写真90 4本目のヒゴを3本目のヒゴの下に通す



写真91 型に合わせて放射状に組む

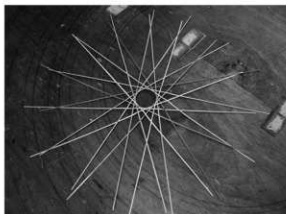


写真92 下組みの完成



写真93 くす玉の型と固定する台



写真94 型に下組みしたくす玉をはめて器具で固定する



写真95 くす玉のマフシ部分を編む





写真96 型から外し、3本目の横ヒゴを編む

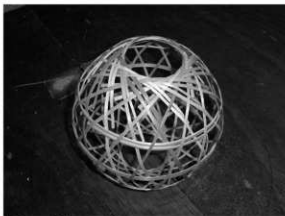


写真97 完成したくす玉

## (5) くす玉製作からみる竹細工職人の技術

### 【竹細工職人のくす玉製作への転換】

昭和30年代以降、ザルやカゴの代替品として安く丈夫なプラスチック製品や金属製品が市場に多く出回ったことで、竹細工店には経営方針の転換が迫られた。同じ頃、仙台七夕の規模が大きくなり、仙台市中心街の各商店街に飾られる吹流しには大きなくす玉が使われるようになった。他の商店街で行われている七夕では、市販されているザルを2つ合わせて球形にし、そこへ花紙を装飾したくす玉を作るが、中心商店街で飾る吹流しはサイズが大きいため特注のくす玉が必要となる。1年に一度の使用頻度ではあるが毎年コンスタントに注文があり、機械で製作するよりは経費も手間もかからない竹細工職人が作るくす玉は、仙台に特化した産業であると言える。

くす玉作りを機械化できない一番の大きな理由は、他の竹製品を作る時のように竹の性質や素性を見極め、人間の指先で感じる竹の厚みや適正を考えながら竹を割ったりさいたりするといった技術を数値化することが難しいからと考えられる。昭和20年代頃から「竹はぎ機械」が生産・流通するが、服部武によれば、機械で作るヒゴと職人の指で作るヒゴには違いがあり、それは職人の指は刃物が入って裂け目ができた竹を親指と人差し指で上下に開き、無理がないように繊維の方向を見極めながらはがしていくという作業を、竹に刃先をうまく当てながら行っているという点である【服部 2008】。職人は竹の繊維に合わせて竹をさいていくが竹の性質に左右されて厚みが均一にならないのに対し、機械は繊維の方向にかまわずさいていくため厚みが均一になるという特徴がそれぞれあるが、繊維の方向に合わせてさいたヒゴのほうが丈夫で長持ちするという。くす玉のように毎年ほぼ使い捨てにされる製品であれば、機械化が進んでも不思議ではないのにも関わらず、今回の調査ではくす玉製作過程において機械化されている工程がなかったというのは、仙台における竹細工技術の変遷を見る上でポイントとなると思われる。

### 【竹製品製作技術とくす玉】

このようにくす玉作りの技術には他の竹製品作りの技術が大いに関係している。竹の見立てはもちろんであるが、一番は材料となるヒゴ作りであろう。竹製品作りにおいて一番の肝は材料作りである。材料となるヒゴを製品の性質や特徴に合わせて作っていく技術は、そのままくす玉作りにも応用されている。ただし、いかにヒゴの1本1本のサイズを合わせ、角をとって面取りをするかで良い竹製品が出来上がるかが決まる竹製品に対して、くす玉は最終的には花紙で全面を覆われて竹部分が目に触れることがないことから、そこまで厳密に材料作りを行っているわけではないようである。これは、手が覚えているのでサイズを合わせたり確認したりしなくてもヒゴを作ることができるという、職人の長年培った経験によるものだが、道具として出来上がった製品が規格通りのサイズかどうか確認す

るために仕上がりの寸法が入ったバカボウという竹の道具はある。

ある職人によると、もともとはくす玉には竹製品作りで廃棄する竹の内部分を使用していたのだという。竹製品には竹の表皮が使われ、竹の内側部分にある肉は繊維が荒いのであまり使われない。もとは廃棄されるような竹を利用したくす玉なので、完成したときの竹製品としての見栄えの良さはあまり関係ないというが、くす玉の出来上がりのサイズについては気にしながら製作している。これは発注元の業者がくす玉や吹流しのデザインを考える際にパソコンを使って細かく数値化しており、くす玉に花紙を装飾する工程を内職として外注する段階において図面と実際のサイズが少しでも異なれば、装飾する花紙の数にも影響を与えてしまうため、なるべくいびつにならないように注意して製作しているからだ。ある職人からは、くす玉は斜め下から見るので昔は多少いびつであっても良かったとの話も聞くことができた。

#### 【職人の経験】

くす玉製作の最盛期は5～7月であることは先にも述べたが、ある職人は、くす玉製作の最盛期の間は毎日気温が高く、一晩水に浸しておいた竹がすぐに乾いてしまって編むときに苦労するため、朝の4時に起床して竹が乾かないうちから作業を始めるという。こうすることで効率よく作業を行うことができる。逆に梅雨時期は湿気が竹がカビてしまうため、梅雨が始まるまでに竹を十分に乾かして保存することが大事であるとも話す。

くす玉は製作個数が膨大であるため、製作過程において「いかに効率よく大量のくす玉を作るか」という点に主眼が置かれている。たとえばヒゴの束をつかみ、だいたい一握りでくす玉が何個できるかということも把握しており、ヒゴを束にするときもそこまで考えて無駄のないようにまとめておくなど、これは長年の経験の積み重ねによるものである。竹割りやヒゴ作り、編みなどの一連の作業を行う速さも経験によるものである。中でも編みについては、練習すれば誰でも早く編むことができるという。人によってさまざまではあるが、5寸のくす玉は6～8分、1尺5寸のくす玉は20分ほどでできあがる。くす玉に使われるヒゴの本数や編み方なども、その製品を見ればだいたい分かるようで、見よう見まねで作り始めてそこから徐々に自分なりの工夫を凝らしていく。たとえば、くす玉は真ん中のマワシ（セキドウ）1本を境にして上下にそれぞれ偶数本の横ヒゴが必要であるため、マワシ部分も入れて奇数本の横ヒゴが必要となることや、マワシの大きさ（直径）が吹流しの紙を垂らす曲げ輪の直径と同じになるように作ることなどはくす玉作りにおいて共通事項であるが、そうするためのやり方や技術は職人によって微妙に差異があり、それはお互いに知りえない情報となっている。

原料となる竹についても、シンコと呼ばれる1年物の柔らかい竹のほうが扱いやすいという職人もいれば、3年物の竹のほうが扱いやすいという職人もおり、それぞれの技術力や経験によって竹を選別して製作している。

以上のように、現在仙台市内でくす玉を製作している竹細工職人は、かつてはザルやカゴも製作していたが現在はくす玉作りに特化している者が多いということ、大半の職人が今のところ竹製品の中ではくす玉が一番需要がありコンスタントに現金収入を得られる製品であるという認識を持っていることが分かった。以上により現在の仙台市内における竹細工職人または竹細工店の現状は、仙台七夕があってこそ竹細工職人という関係性になっていることが伺える。また、くす玉製作技術についても、竹製品の中で一番難しいとされているコマギザル作りよりはるかに作りやすく、目の編み方についてはザル・カゴ作りの技術が用いられているので、竹細工製作技術が地域の需要によって新たに展開したケースとして捉えることができるのではないだろうか。

## 【話者一覧】

- 大宮捺治 仙台市太白区長町  
大宮信之 仙台市太白区長町  
高橋幸作 仙台市太白区中田  
丹野幸一 仙台市若林区上飯田  
升澤正章 仙台市青葉区木町通

## 【参考文献】

- 近江恵美子  
2007 『仙台七夕まつり 七夕七彩』 有限会社イービー風の時編集部  
2008 『国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書3 仙台七夕—伝統と未来』 大崎八幡宮 仙台・江戸学実行委員会
- 沖浦和光  
1991 『竹の民俗誌—日本文化の深層を探る—』 岩波書店
- 工藤貞功  
1982 『日本人の生活と文化6 暮しの中の竹とわら』 ぎょうせい
- 佐々田弥生  
1995 『竹とくらし』 『足元からみる民俗 (4) —失われた伝承・変容する伝承・新たな伝承—調査報告書第14集』  
仙台市歴史民俗資料館
- 服部 武  
2008 『野菜籠・果物籠生産時代の竹細工の機械化とメーカーについて』 『民具研究 第137号』 日本民具学会  
2008 『野菜籠・果物籠生産時代の竹細工の機械化とメーカーについて (2)』 『民具研究 第138号』 日本民具学会
- 三田村佳子  
2008 『職人という生き方』 『日本の民俗11 物づくりと技』 吉川弘文館
- 三原良吉  
1966 『仙台七夕と盆まつり—その由来と伝承—』 宝文堂
- 室井 緯  
1973 『ものと人間の文化史10 竹』 法政大学出版局
- 吉羽和夫  
1994 『籠職人—竹編みの技』 玉川大学出版部

---

仙台市文化財調査報告書第375集

**仙台旧城下町に所在する  
民俗文化財調査報告書⑦**  
仙台の七夕飾り・仙台の竹細工

2010年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会  
仙台市青葉区国分町三丁目7-1  
文化財課 TEL 022 (214) 8892

印刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト  
仙台市青葉区立町24-24  
TEL 022 (263) 1166

---